

伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ

守山市文化財調査報告書

2004.3

守山市教育委員会

序 文

守山市は、昭和45年に3万5千人で市制施行しましたが、21世紀を迎えて人口も倍増しました。

のどかな田園風景が広がっていた守山市も水田が宅地やマンションへと変わり、大きく景観が変化しました。開発に伴って発掘調査が行われ、全国的に注目を集める遺跡が次々と発見されました。

弥生時代の水田や360基以上の方形周溝墓が発見された大規模な服部遺跡をはじめ、9条の環濠をめぐらせた下之郷遺跡や大型建物を計画的に配置する伊勢遺跡、古墳時代の首長が使用した儀仗や準構造船が出土した下長遺跡など、次々と重要な遺跡が発見されました。二十年余りの発掘調査によって守山市内の遺跡群から弥生時代から古墳時代への移行を跡付けることができるようになってきました。弥生時代や古墳時代の歴史を復元する上で、守山市内の遺跡が欠くことのできない貴重なものであることが判明してきたのです。

伊勢遺跡は昭和54年に発見された弥生時代後期の集落遺跡です。近畿地方では後期の大規模な弥生遺跡の実態がよくわかっていません。古墳時代には奈良県を中心に国家形成が進むことが大規模な前方後円墳から予想されていますが、その直前の社会の実態がよくわかっていませんでした。

しかし、地域社会がより大きな集団に統合されていく過程を伊勢遺跡によって復元できることがわかってきたのです。平成4年には国内最大級の掘立柱建物が発見され、平成7年には全国ではじめて弥生時代の方形区画の存在が確認されました。さらに楼閣や円形にめぐる祭殿などが次々と発見され、全国的にみても類例のない重要な遺跡であることが判明してきたのです。

守山市では伊勢遺跡の保存・活用を目的として、平成9年度より遺跡の範囲や内容を明らかにする確認調査を行ってきましたが、本報告書は平成11・12年度に行った確認調査の成果をまとめたものであります。

確認調査にあたって伊勢町・阿村町の地権者の御理解・協力を受けました。また地元伊勢・阿村両自治会の協力・支援がなければ本書の刊行も実現しなかったと思います。最後になりましたが、ご協力頂いた各関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

守山市教育委員会

教育長 山川 芳 志 郎

例 言

1. 本書は、平成11・12年度に実施した伊勢遺跡の範囲確認調査の調査報告書である。調査は国宝重要文化財等保存整備費補助金を得て実施した。
2. 本調査は、守山市伊勢町字中東浦75番地他の水田地で行った。
3. 本調査は、守山市教育委員会（教育長 山川芳志郎）が文化庁、滋賀県教育委員会の指導を得て実施した。
4. 本発掘調査は平成11年8月10日から平成13年1月31日の期間現地調査を実施した。なお、調査整理業務は平成15年5月25日より平成16年3月25日まで実施した。

5. 発掘調査・整理調査業務にかかる教育委員会事務局は以下の体制で実施した。

平成11年度確認調査	平成12年度確認調査	平成15年度整理調査
教 育 長 川端 弘	教 育 長 川端 弘	教 育 長 山川芳志郎
教 育 部 長 中野 隆三	教 育 部 長 山中 憲三	教 育 部 長 津田 重幸
生涯学習課長 堀尾 和子	生涯学習課長 堀尾 和子	教 育 次 長 宇野勘二郎
生涯学習課参事 山崎 秀二	生涯学習課参事 山崎 秀二	文化財保護課長 山崎 秀二
調 査 担 当 者 伴野 幸一	調 査 担 当 者 伴野 幸一	文化財保護課主幹 岩崎 茂
		調 査 担 当 者 伴野 幸一

7. 発掘調査・整理業務及び本報告書作成については伴野が担当した。
8. 本報告書では標高は東京湾ポイントを使用し北方位は日本平面国家座標六系のX座標を指す。
9. 本調査にかかる遺物・図面・写真資料は、市立埋蔵文化財センターに保管している。

10. 現地調査・整理調査については以下の方々の参加を得た

平成11・12年度

現地調査 羽橋貴子 小川昭平 芝田政治 北村美佐子 湯口久美子
碓井富子 小島繁一 下村良二 中井光子 橋本みさ子 中橋フジ枝

平成15年度

整理調査 中井純子

伊勢遺跡確認調査報告書目次

序 文

例 言

目 次

挿 図 目 次

図 版 目 次

第 1 章	確認調査に至る経緯及び伊勢遺跡の歴史的環境	1
	第 1 節 確認調査に至る経緯	1
	第 2 節 伊勢遺跡の歴史的環境	1
	第 3 節 伊勢遺跡既往調査一覧表	4
第 2 章	伊勢遺跡の調査成果	9
	第 1 節 第56次調査の成果	9
	第 2 節 第58次調査の成果	15
	第 3 節 第59次調査の成果	18
	第 4 節 第60次調査の成果	19
	第 5 節 第61次調査の成果	24
	第 6 節 第63次調査の成果	26
	第 7 節 第64次調査の成果	28
	第 8 節 第66次調査の成果	30
	第 9 節 第68次調査の成果	32
	第10節 大洲遺跡第 6 次調査の成果	33
第 3 章	出土遺物観察表	37
第 4 章	調査成果のまとめ	39
	大型建物の変遷と区画溝	

挿 図 目 次

挿図 1	野洲川流域の遺跡分布図	挿図18	第63次調査全体図
挿図 2	伊勢遺跡全体図	挿図19	S B - 1 平面図
挿図 3	第56次調査全体図	挿図20	第64次調査出土遺物
挿図 4	第21・56次調査平面図	挿図21	第64次調査全体図
挿図 5	第56次調査出土遺物	挿図22	第66次調査全体図
挿図 6	S B - 1 平面図	挿図23	第68次調査全体図
挿図 7	第58次調査平面図	挿図24	大洲遺跡第 6 次調査全体図・ S D - 1 断面図
挿図 8	第58次調査出土遺物	挿図25	大洲遺跡第 6 次調査出土遺物
挿図 9	SB-10平面図	挿図26	伊勢遺跡内の区画施設
挿図10	第59次調査平面図	挿図27	伊勢遺跡東半部全体図
挿図11	第59次調査出土遺物		
挿図12	第60次調査 T - 1 平面図		
挿図13	第60次調査 T - 3 平面図		
挿図14	第60次調査全体図		
挿図15	第60次調査出土遺物		
挿図16	第61次調査全体図		
挿図17	第61次調査出土遺物		

図 版 目 次

図版 1	伊勢遺跡56次調査遺構写真
図版 2	伊勢遺跡56次調査遺構写真
図版 3	伊勢遺跡56次調査遺構写真
図版 4	伊勢遺跡56次調査遺構写真
図版 5	伊勢遺跡58次調査遺構写真
図版 6	伊勢遺跡58次調査遺構写真
図版 7	伊勢遺跡59次調査遺構写真
図版 8	伊勢遺跡60次調査遺構写真
図版 9	伊勢遺跡60次調査遺構写真
図版10	伊勢遺跡60次調査遺構写真
図版11	伊勢遺跡60次調査遺構写真
図版12	伊勢遺跡61次調査遺構写真
図版13	伊勢遺跡63次調査遺構写真
図版14	伊勢遺跡64次調査遺構写真
図版15	伊勢遺跡66次調査遺構写真
図版16~20	伊勢遺跡出土遺物写真

第1章 確認調査に至る経緯及び伊勢遺跡の歴史的環境

第1節 確認調査に至る経緯

伊勢遺跡は昭和54年、個人住宅の建築に先立つ試掘調査（第1次調査）によって発見された遺跡であるが、宅地造成に先立ち昭和55年に発掘調査を行った結果（第2・3次調査）、現在の伊勢集落を中心として弥生時代後期の大規模な集落遺跡が存在することが推測されるようになった。

伊勢遺跡が極めて特殊な遺跡であることが明確になったのは平成4年9月、国内最大規模の掘立柱建物（21次調査）が発見されてからである。平成2年8月に第21次調査地点の南側隣接地で第18次調査が行われており、その成果を合わせて検討することによって、後に伊勢遺跡中心部の方形区画を構成する建物群であることが判明した。第21次調査でみつかった大型建物は梁行2間×桁行4間（7.8m×11.3m）、床面積約88㎡を測る大規模なものであり、方形区画の中心となる建物であることが判明した。さらに、SB-1の西側には棟方向を90°変えて、SB-2・3・④の3棟の棟持柱付き建物がL字状に配置されていたのである。その周囲には、二重の柵がめぐっており、特殊な空間を構成していることが明らかになった。

その後、平成6年12月には方形区画の西側約80mの地点（第28次調査）で独立棟持柱付き大型建物が検出された。平成6年から7年にかけて道路建設及び宅地造成工事に伴う発掘調査（大洲地区第3次・第5次調査）により3棟の独立棟持柱付き大型建物が相次いで発見された。平成7年11月には野尻地区（現栗東市）でも屋内棟持柱付き大型建物が検出され、次々と大型建物が発見されていった。開発に伴う発掘調査によって伊勢遺跡は、大型建物が集中的に造営された特異な遺跡であることが明確になってきたのである。

守山市は大型建物が次々と発見される伊勢遺跡の保存を目的として、文化庁及び滋賀県教育委員会の指導を得て、国庫補助事業によって重要遺跡範囲確認調査を平成9年度より開始し、遺跡の性格および範囲確認を進めていくことになった。調査にあたっては地元伊勢町・阿村町の地権者の了解を得て、平面検出を基本とし遺跡の広がりや遺構の把握にあたり必要に応じて最小限の掘削調査を行った。調査終了後は水田に戻すため、重機及び人力によって原状復旧に努めた。

第2節 伊勢遺跡の歴史的環境

伊勢遺跡は、標高約98m～100mを測る扇状地上に立地する弥生後期の集落遺跡である。その規模は東西約700m、南北約450mを測り、面積30万㎡に及ぶ大規模なものである。遺跡の東半部には大型建物群が集中的に造営され、方形区画と呼ばれる特殊な空間が存在する。西半部には五角形住居を含む竪穴住居群が多数営まれており、対照的な内容をもっている。遺跡の北西部と南西部には、方形周溝墓群が造営され墓域が形成されている。

伊勢遺跡の大型建物群の特徴は、①中心部に二重の柵で四角く囲った中に大型建物が整然と配置される。②中心部の建物群は楼閣（SB-10）をはじめ柱穴配置が異なり、違った機能を有する建物群によって構成されている。③方形区画の周囲には独立棟持柱付大型建物が等間隔に弧状に配置されている。等の特徴をあげることができる。ここでは、特異な内容をもつ伊勢遺跡が出現する背景について触れておく。

稲作が始まって人間の生活は、大地との結びつきを著しく強めていったと考えることができる。近畿各地で沖積平野に大規模な集落が営まれるようになり、弥生前期から中期にかけて、次第に人口が増加していった様子が窺われる。そのような拠点的な集落の周りには、しばしば濠が巡らされている



挿図1 野洲川流域の遺跡分布図

が、環濠集落と呼ばれている。滋賀県内でも弥生前期の川崎遺跡（長浜市）、弥生中期の下之郷遺跡（守山市）など集落の周りに何重もの濠が巡っていることがわかっている。環濠は防御施設だと考えられているが、集落の内容を検討すると交流の拠点としても機能していたことがわかる。環濠集落内には非常に遠い地域の土器や金属器が運び込まれていて、物流の拠点であったことがわかる。弥生中期社会は土地に縛られながらも、近畿各地やそれ以西の地域、東海など東の地域との交流を盛んに行う仕組みを作り上げていたことがわかる。弥生中期末には湖南地域でも直径数百mにおよぶ環濠集落が、沖積平野を横断するように数キロごとに分布して営まれている。二ノ畦・横枕遺跡、山田町遺跡（守山市）、下鉤遺跡（栗東市）などがそれである。拠点集落同士が結びつき、盛んに交流を行うシステムが存在したと考えられる。近畿や瀬戸内・山陰・北陸・東海などの地域でも拠点集落が結びつき、物資の交流を行うネットワークを構成していたと考えることができる。環濠集落に持ち運ばれた他地域の土器や金属器の存在は、緩やかに広範な地域と結びつく弥生社会の仕組みを物語っている。しかし、弥生中期末から後期初頭にかけて近畿地方の拠点集落は解体しており、長期にわたり形成され維持された交流システムが崩壊していった様子が窺われる。

この劇的な集落構造の変化は、鉄の流通をめぐるものではないかと言われている。大阪府観音寺山遺跡や古曾部・芝谷遺跡など、弥生後期初頭には大規模な高地性集落がみられ、不安定な社会状態にあることが窺われる。しかし、鉄器が若干みられるものの石器も残存しており、一気に鉄が流通したとも考えられない。いずれにせよ、近畿における中期末から後期初頭の集落構成の変化は、流通の仕組みにも大きな影響を与えたことが予想されるのである。

近畿地方や瀬戸内地方の後期初頭の集落から、貨泉と呼ばれる中国で使用された銭貨が出土している。後期初頭までは量的には少ないものの、北九州を経由して近畿地方に金属器が流入していたことが窺われる。しかし、後期中～後葉にかけて瀬戸内を経由した近畿地方への金属器の流入が、ほとんど見られなくなるのである。北九州から瀬戸内を経由した物資の流通が遮断されることは、北九州以東の弥生社会にとって重大な事態であったと考えられる。大型の突線紐式銅鐸が製作されていた近畿・東海地域において金属器の原材料の確保は生命線ともいえる課題となったことは容易に推測される。

一方、後期中～後葉にかけて、丹後地方では大型の墳墓が造営され、大量の鉄やガラス製品が副葬されている。京都府大宮町三坂神社3号墳、同左坂26号墳などでは大量の鉄刀が副葬され、京都府岩滝町大風呂南1号墳では大量の鉄刀とともにガラス製の釧が副葬されていた。また、大宮町今井赤坂墳丘墓など大型の墳丘と豊かな副葬品がみられ、交易を通して強大な権力を持つ首長が出現していたことがわかる。

この時期、鳥取県妻木晩田遺跡や青谷・上地寺遺跡などでも大量の鉄製品が出土しており、日本海沿岸地域の物流が活性化していたことが窺われる。滋賀県でも新旭町熊野本遺跡などで40点余りの鉄製品が出土しており、日本海沿岸に流通する鉄が流入していたことがわかる。停滞する瀬戸内ルートにかわって、北九州を経由せず直接、日本海沿岸地域と交流することによって金属器等の入手を実現したものとみてよい。後期社会は、新たな物流のシステムを求めて、より大きな同盟関係が希求され、流通を通して首長のもとに権限が集中していった社会であると考えてよい。近畿地方においても、弥生中期とは異なったより大きな政治的同盟の枠組みが模索されていたと思われるが、その重心は琵琶湖・淀川を軸とする北近畿ルートに比重が置かれていたと推測される。

弥生後期中～後葉における日本海沿岸地域の活性化を背景に、伊勢遺跡が出現するものと見られる。近江は日本海沿岸地域と近畿・東海を結ぶ物流の結節点にあり、歴史的にみても交易上、重要な役割を担った地域である。弥生時代後期、淀川に繋がる琵琶湖を有し、陸路においても東海、伊賀・伊勢

と深く結びつきをもつ近江に、重要な権限が集中したことが想定されるのである。伊勢遺跡の大型建物に見られる政治・祭祀機能、権力の集中は、単に湖南という地域的枠組みを越えて、初期ヤマト政権形成のプロセスとして位置付けることができよう。

倭人社会の動乱に端を発し、古墳出現に結果する変革期が終わると、再び瀬戸内ルートは機能し始め、伊勢遺跡も衰退している。野洲町大岩山には東西の銅鐸が埋納されているが、弥生時代の幕引きを近江の地で行ったと考えることもできる。伊勢遺跡の出現は列島内の物流が大きく変化する時期にあたると同時に、その消滅は古墳時代の開始につながっているといえる。伊勢遺跡は、弥生から古墳時代への転換の仕組みを解明することにつながっている。

第3節 伊勢遺跡既往調査一覧表

伊勢遺跡は昭和54年に発見されて以来、平成15年3月末までに83次に及ぶ発掘調査を行っている。本報告では56・58・59・60・61・64・66次の確認調査と大洲地区6次調査の成果を収録している。また、大洲遺跡については平成4年に発見され、中世（鎌倉時代）を中心とする遺跡として調査が行われてきたが、平成6年度に実施した第5次調査によって伊勢遺跡に連続する弥生時代後期の集落が広がっていることが判明し、伊勢遺跡の範囲に含め平成9年遺跡地図改訂を行った。第6次調査成果は個人住宅建設にともなうものであるが、本確認調査の内容に係わるため収録した。

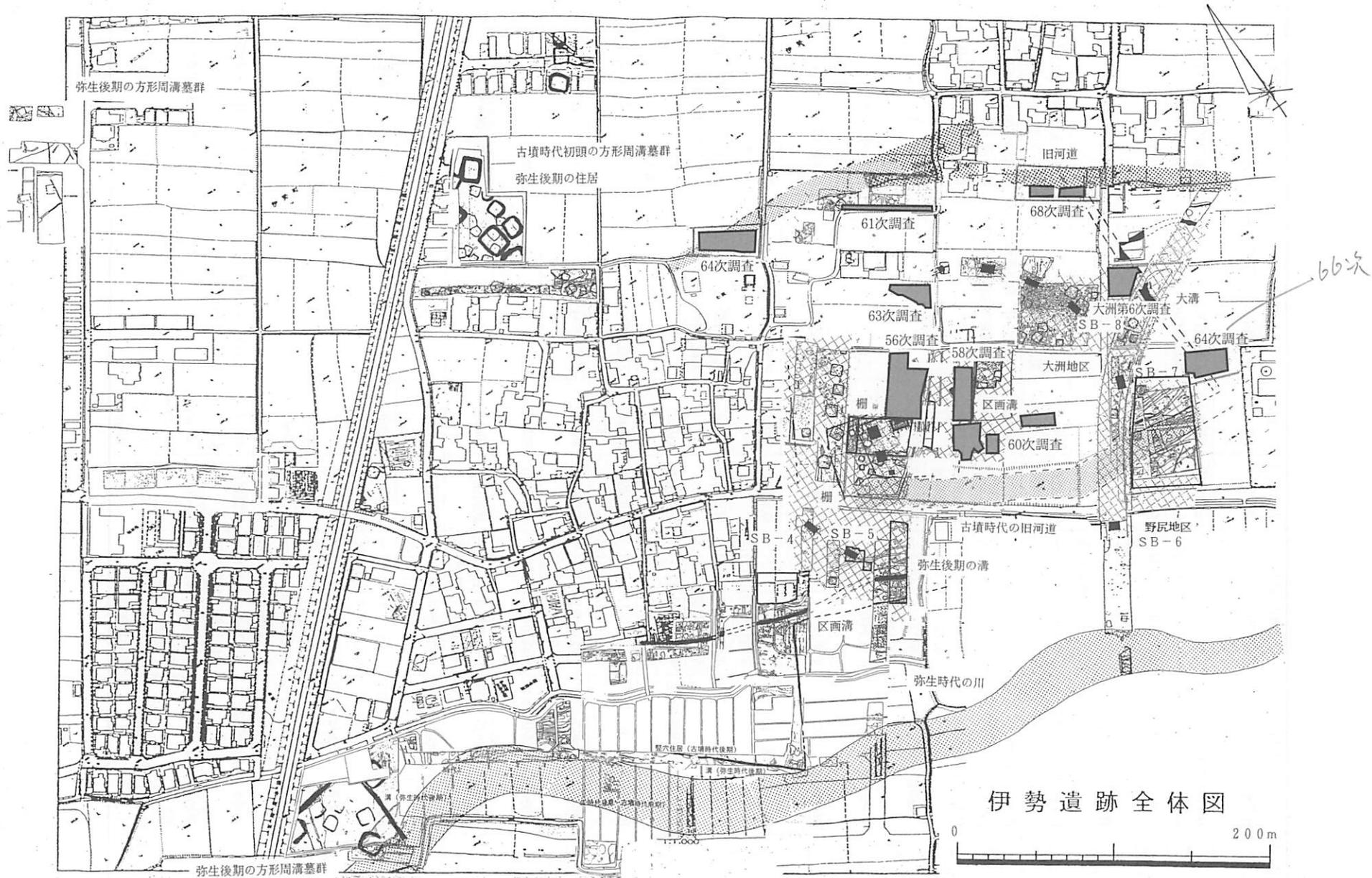
調査次数

調査次数	所在地	調査期間	調査原因	面積	参考文献	調査概要
1次	伊勢町字中東浦75	昭和56年1月16日～ 昭和56年1月22日迄	個人住宅	約50㎡	乙貞1号	試掘により弥生後期の遺跡の存在を確認。柱穴・溝（方形周溝基か）
2次	伊勢町字中東浦 76・77・82-1	昭和56年4月13日～ 昭和56年7月10日迄	宅地造成 県経済連	約3,000㎡	滋賀文化財だより67号 乙貞4・5号	弥生後期の竪穴住居9棟検出。内1棟は五角形住居。榎の検出。鎌倉時代の掘立柱建物・井戸等検出。
3次	伊勢町字大苗代 309-9、311-1	昭和56年7月10日～ 昭和56年9月30日迄	宅地造成 県経済連	約3,000㎡	乙貞5号	弥生後期の竪穴住居10棟検出。内1棟は五角形住居。古墳時代初頭から前期にかけての方形周溝基8基を検出。
4次	伊勢町字大將軍2丁田 344・343	昭和57年4月12日～ 昭和57年4月26日迄	農業倉庫	約400㎡/ 580㎡	守文報第12冊 乙貞6.7	弥生後期の五角形住居1棟。平安後期の溝・土壇・柱列・井戸等を検出。五角形住居から弥生後期の土器群が出土。
5次	伊勢町字西浦537	昭和57年5月	個人住宅 カミヤブ重機	約100㎡	守文報第12冊	弥生後期の溝。
6次	伊勢町451-1 他二町町30-1	昭和58年9月2日～ 昭和58年9月30日迄	宅地造成 大島鐵工業㈱	約2,000㎡	守文報第15冊	奈良時代の掘立柱建物1棟・溝を検出。
7次	伊勢町451-8 他二町町30-1	昭和59年5月30日～ 昭和59年6月17日迄	宅地造成 大島鐵工業㈱	約1,000㎡	守文報第15冊	奈良時代の掘立柱建物1棟・溝を検出。
8次	伊勢町字西浦537・538	昭和59年11月9日～ 昭和59年11月30日迄	個人住宅	70㎡/ 174㎡	守文報第20冊	溝
9次	阿村町字下番田151-3	昭和59年4月5日 試掘	資材置き場 滋賀県経済 農業共同組合	約300㎡/ 476㎡		旧河道
10次	伊勢町字二丁田327-3	昭和59年11月10日～ 昭和59年12月1日迄	個人住宅	約700㎡/ 1,269㎡	守文報第20冊	弥生後期の竪穴住居1棟検出。奈良・平安時代の掘立柱建物・溝、鎌倉時代の建物・井戸
11次	伊勢町字西浦540	昭和59年12月10日～ 昭和59年12月14日迄	個人住宅	200㎡	守文報第26冊	溝（しがらみ遺構）
12次	伊勢町字伊勢里177-1	昭和63年12月19日～ 昭和63年12月26日迄	農業倉庫	405㎡	守文報第33冊	溝4条、土壇6基、柱穴、中世とみられる。
13次	伊勢町字大苗代 303-12	平成元年1月13日～ 平成元年2月8日迄	個人住宅	300㎡	守文報第33冊 乙貞43号	古墳時代初頭の方形周溝基2基、溝・柱穴 奈良時代（8世紀前半）
14次	伊勢町字上阿ノ囷 19-1 外4筆	平成2年4月20日～ 平成2年6月4日迄	宅地造成 石橋産業	2,000㎡/ 12,464㎡	乙貞51号	古墳時代・鎌倉時代の溝、奈良時代の溝2条、江戸時代の井戸。
15次	伊勢町字伊勢里322-3	平成2年12月13日～ 平成2年12月14日迄	個人住宅	60㎡/ 149㎡	守文報第43冊	弥生後期から古墳後期の遺物包含層。鎌倉時代の柱穴

調査次数	所在地	調査期間	調査原因	面積	参考文献	調査概要
16次	伊勢町字二丁田347-1	平成2年2月4日～平成2年2月23日迄	個人住宅	978㎡	守文報第43冊	鎌倉時代の掘立柱建物・溝・土壌
17次	伊勢町二丁田	平成2年2月 日～平成2年4月 日迄	宅地造成	450㎡	乙貞55号	鎌倉時代の溝・掘立柱建物6棟、土壌7基 江戸時代の井戸
18次	伊勢町字中東浦81-1	平成2年6月28日～平成2年8月8日迄	倉庫建設	888㎡	守文報第42冊 乙貞51号	弥生後期の竪穴住居9棟・溝・独立様持柱付建物。 鎌倉時代の掘立柱建物・旧河道
19次	伊勢町字井上125	平成4年1月28日～平成4年1月30日迄	個人住宅	330㎡	守文報第44冊 乙貞61号	弥生後期末の竪穴住居・方形周溝墓・溝。 縄文晩期の深鉢・石鏃
20次	伊勢町字大將軍513-1・513-2	平成4年6月8日～平成4年6月10日迄	倉庫建設	約100㎡/948㎡	乙貞63号	弥生後期の竪穴住居1棟（五角形住居か） 旧河道
21次	伊勢町字中東浦80	平成4年6月25日～平成4年9月25日迄	倉庫建設	870㎡	現説資料92.9.19 乙貞64・65 伊勢遺跡確認調査報告書2003/3	弥生後期の大型建物3棟（S-B-1・2・3）竪穴住居7棟・柱穴多数。 鎌倉時代の掘立柱建物4棟
22次	伊勢町字高関459	平成4年7月29日～平成4年9月5日迄	共同住宅	600㎡	守文報第48冊 乙貞64号	弥生後期の方形周溝墓3基。 古墳時代後期から平安時代の溝。
23次	伊勢町字西浦553	平成4年9月1日～平成4年9月15日迄	個人住宅	227㎡	守文報第47冊	弥生後期の自然流路（土器出土）。
24次	伊勢町字溝崎411-1 412-1	平成5年4月23日～平成5年6月30日迄	共同住宅	2,279㎡	乙貞69号	鎌倉時代の掘立柱建物・溝。
25次	伊勢町字大苗代308-2	平成5年5月15日～平成5年5月29日迄	個人住宅	240㎡/500㎡	守文報第53冊 乙貞69号	弥生後期の溝。 古墳時代前期の方形周溝墓1基。
26次	伊勢町字溝崎409	平成5年6月7日～平成5年6月12日迄	共同住宅	1,292㎡/1,308㎡	乙貞69号	耕作跡
27次	伊勢町字伊勢里323-3	平成5年9月21日～平成5年10月15日迄	共同住宅	500㎡/998㎡	乙貞71号	弥生後期の竪穴住居2棟・土壌6基。
28次	伊勢町字南東浦84-1 他	平成5年10月26日～平成7年5月31日迄	区画整理	10,000㎡	乙貞72.73.74.75号 守文報第63.77.80冊	弥生後期の大型建物・区画溝・方形周溝墓。 鎌倉時代の掘立柱建物・区画溝他
29次	伊勢町字西浦531他	平成5年10月 日～平成6年1月 日迄	公共下水	606㎡	乙貞73号表	大溝
30次	伊勢町字高関460	平成6年5月23日～平成6年5月27日迄	共同住宅 東和不動産	400㎡	乙貞79号表	弥生中期の方形周溝墓。
31次	伊勢町字伊勢里322	平成7年1月24日～平成7年2月17日迄	公共下水	200㎡	乙貞85号表	弥生後期から鎌倉。
32次	伊勢町字伊勢里257	平成7年9月15日～平成 年 月 日迄	個人住宅	396㎡	守文報第61冊	井戸（近世）
33次	伊勢町字大苗代302 304-7	平成7年12月20日～平成8年1月31日迄	共同住宅 伊藤工務	500㎡/1312.9㎡	乙貞84号	縄文時代の土壌・柱穴。
34次	伊勢町字伊勢里525	平成8年3月4日～平成8年3月22日迄	個人住宅	346㎡	乙貞85号 守文報第61冊	鎌倉時代の掘立柱建物・溝・土壌
35次	二町町字北上代7-5、9-2	平成8年7月22日～平成8年8月26日迄	宅地造成 高森ハウス	336㎡/2,094㎡	乙貞88号	弥生後期の方形周溝墓・竪穴住居。
36次	伊勢町字大將軍516-1	平成8年11月13日～平成8年11月26日迄	個人住宅	120㎡/218㎡	乙貞90号 守文報第61冊97年3	弥生後期の周壁溝が巡る五角形住居。 中世の溝。
37次	伊勢町字西浦520 521	平成8年11月13日～平成8年11月21日迄	共同住宅	117㎡/368㎡	乙貞90号	溝3条・土壌2基・柱穴。
38次	伊勢町字南代104	平成8年11月20日～平成8年12月7日迄	共同住宅	117㎡/316㎡	乙貞90号	溝5条・土壌1基。
39次	伊勢町字伊勢里	平成9年1月31日～平成9年2月14日迄	個人住宅	80㎡/368㎡	乙貞91号 守文報第66冊98年3月	溝3条・土壌2基・柱穴。
40次	伊勢町字南代3街区9	平成9年4月24日～平成9年6月13日迄	共同住宅	323㎡/1,148㎡	乙貞93号	旧河道。
41次	伊勢町字西浦548-2	平成9年5月16日～平成 年 月 日迄	個人住宅	25㎡	守文報第66冊 98年3月	中世の土壌。
42次	伊勢町字西浦548-1	平成9年6月26日～平成 年 月 日迄	個人住宅	25㎡	守文報第66冊 98年3月	古墳時代前期の溝。 中世の土壌。

調査回数	所在地	調査期間	調査原因	面積	参考文献	調査概要
43次	伊勢町字南代14街区4	平成9年8月4日～平成9年8月26日迄	個人住宅	374㎡/745㎡	乙貞94号 守文報第66冊98年3月	掘立柱建物4棟、中世の井戸1基。
44次	伊勢町字南代14街区7	平成9年10月8日～平成9年11月6日迄	共同住宅	220㎡/768㎡	乙貞95号	弥生竪穴住居1棟・独立棟持付大型建物(SB-4)・土壇2基・柱穴多数。中世の溝。
45次	伊勢町字伊勢里10街区4	平成9年11月22日～平成9年12月24日迄	個人住宅	433㎡/500㎡	乙貞96号 守文報第66冊98年3月	弥生溝1条。中世区画溝・掘立柱建物1棟、井戸1基 柱穴多数
46次	伊勢町字中東浦80	平成10年1月22日～平成10年3月4日迄	確認調査	100㎡	乙貞97号 伊勢遺跡確認調査報告書I 2003/3	弥生後期の竪穴住居7棟・柱穴多数・土壇。
47次	伊勢町字稗田396	平成10年3月13日～平成10年3月14日迄	宅地造成	60㎡/2,200㎡	乙貞97号	溝1条、古墳時代後期柱穴1個。
48次	伊勢町字南東浦91	平成10年5月21日～平成10年6月19日迄	確認調査	150㎡	現説資料98.6.14 伊勢遺跡確認調査報告書I 2003/3	独立棟持付大型建物1棟(SB-5) 柱根2出土・柱穴多数。中世の溝1条。
49次	阿村町字上番田143-1	平成10年9月16日～平成10年10月23日	工場建設 石田の秤	1,856㎡	伊勢遺跡確認調査報告書I 2003/3	竪穴住居・溝。
50次	伊勢町字南東浦92・93	平成10年10月12日～平成10年11月12日迄	共同住宅	800㎡/1,246㎡	伊勢遺跡確認調査報告書I 2003/3	溝・土壇・柱穴。 中世の掘立柱建物群。
51次	伊勢町字中東浦79-1	平成10年11月2日～平成10年11月20日	確認調査	500㎡	伊勢遺跡確認調査報告書I 2003/3	弥生後期の旧河道。
52次	阿村町156	平成10年11月20日～平成10年12月25日迄	確認調査	500㎡	乙貞102号 現説資料98.12 伊勢遺跡確認調査報告書I 2003/3	竪穴住居5棟・大型建物(SB-10)・溝・柱穴。
53次	阿村町157-1	平成10年12月4日～平成10年12月18日迄	確認調査	500㎡	乙貞102号 伊勢遺跡確認調査報告書I 2003/3	竪穴住居2棟・柱穴・溝。
54次	伊勢町字南代589	平成11年2月8日～平成11年2月18日迄	共同住宅	500㎡	乙貞103号 伊勢遺跡確認調査報告書I 2003/3	竪穴住居1棟・溝・柱穴。
55次	伊勢町字南代254	平成11年5月13日～平成11年5月17日迄	共同住宅	200㎡	乙貞109号表	旧河道。
56次	伊勢町字中東浦78	平成11年5月10日～平成11年7月8日迄	確認調査	800㎡	乙貞105号 今回の報告分 現説資料99.7.3	SB-1とSB-11の柱穴の切り合いを確認。竪穴住居3棟・溝・柱穴多数。
57次	阿村町字上番田143-1	平成11年5月10日～平成11年8月25日迄	工場建設 石田の秤	2,000㎡/3,288.99㎡	乙貞106号 守文報第号	弥生後期竪穴住居1棟。古墳時代前期竪穴住居1棟・溝5条・旧河道。
58次	阿村町155 158-1	平成11年8月27日～平成11年9月14日迄	確認調査	400㎡	乙貞106号 今回の報告分	大型建物(SB-10)・竪穴住居の再調査。
59次	阿村町163	平成11年9月16日～平成11年9月30日迄	確認調査	200㎡	今回の報告分	溝・竪穴住居1棟。
60次	阿村町155 158-1	平成11年9月27日～平成11年12月14日	確認調査	700㎡	乙貞107号 今回の報告分	竪穴住居11棟・溝3条・土壇・柱穴。
61次	阿村町158-1	平成12年1月4日～平成12年1月18日迄	里道 改良工事	100㎡	今回の報告分	竪穴住居3棟・溝・柱穴。
62次	伊勢町56	平成12年2月1日～平成12年3月21日迄	確認調査	400㎡	乙貞109号	竪穴住居1棟・焼土塊遺構・旧河道。
63次	伊勢町62	平成12年2月21日～平成12年3月21日迄	確認調査	500㎡	今回の報告分	竪穴住居・柱穴・土壇。
64次	伊勢町56 59-1	平成12年6月26日～平成12年7月6日迄	確認調査	400㎡	乙貞113号 今回の報告分	旧河道・土壇。
65次	伊勢町字南代646 647	平成12年8月22日～平成12年8月30日迄	共同住宅	250㎡	守埋文平成12年度年報	旧河道・攪乱土壇。
66次	阿村町142-1	平成12年9月11日～平成12年9月29日迄	確認調査	400㎡	乙貞113号 今回の報告分	大溝1条・溝3条・土壇・柱穴。
67次	伊勢町171-1	平成12年10月30日～平成12年12月9日	確認調査	400㎡	乙貞114号	竪穴住居1棟・焼土塊再調査。
68次	伊勢町284	平成12年11月21日～平成12年12月4日	確認調査	500㎡	乙貞114号 今回の報告分	旧河道・大溝。
69次	伊勢町75	平成13年1月15日～平成13年1月31日迄	確認調査	200㎡		遺物包含層・溝。

調査次数	所在地	調査期間	調査原因	面積	参考文献	調査概要
70次	伊勢町字南代607	平成13年2月2日～平成13年2月15日迄	個人住宅	150㎡	守文報平成13年度国庫補助	旧河道。
71次	伊勢町字森ヶ下 426 427	平成13年5月23日～平成13年7月19日迄	宅地造成 高森ハウス	500㎡/ 2,701.95㎡	乙貞117号 現説資料01.7.14	古墳時代前期～奈良の掘立柱建物7棟・溝。
72次	伊勢町259	平成13年7月2日～平成13年7月6日迄	共同住宅	250㎡		旧河道・溝。
73次	伊勢町613 614	平成13年8月20日～平成13年8月29日迄	共同住宅	250㎡		旧河道・柱穴。
74次	阿村町166-1 167	平成13年9月5日～平成13年12月21日迄	確認調査	800㎡	乙貞120号 現説資料01.12.17	大型竪穴住居1棟・榑持柱付大型建物2棟(SB-9・12) 竪穴住居2棟、柱穴・土塚多数。
75次	伊勢町字伊勢里 315-1 316-1	平成14年1月7日～平成14年3月29日迄	宅地造成 (榑松屋)	700㎡/ 2,118㎡	乙貞121号 現説資料02.3.30 伊勢遺跡発掘調査報告書03.3	五角形住居を含む竪穴住居17棟・溝・柱穴。
76次	伊勢町字南東浦602-1	平成14年2月7日～平成14年2月8日迄	個人住宅 西村不動産	376㎡		掘立柱建物・中世の柱穴。
77次	伊勢町字南代633	平成14年6月18日～平成14年6月24日迄	事務所建築	723㎡		旧河道・溝。
78次	伊勢町字南代606	平成14年6月18日～平成14年6月24日迄	共同住宅	150㎡	乙貞	弥生後期の竪穴住居。
79次	阿村町184・185	平成14年7月29日～平成14年8月2日迄	共同住宅	150㎡/ 446㎡	乙貞124号	弥生後期の竪穴住居。
80次	阿村町字168・170	平成14年9月18日～平成14年10月31日迄	確認調査	500㎡	乙貞127号	弥生後期の竪穴住居・区画溝、柱穴等。
81次	阿村町166-1	平成14年10月1日～平成15年3月15日迄	確認調査	400㎡	乙貞127号 現説資料03.3.	弥生後期の大型竪穴建物、独立棟持柱付き建物。
82次	伊勢町字大將軍516-2	平成14年11月11日～平成14年11月14日迄	個人住宅	410㎡		弥生後期の竪穴住居、近世の溝・柱穴等。
83次	伊勢町字森ヶ下	平成14年11月18日～平成14年12月6日迄	宅地造成	200㎡/ 1,336㎡	乙貞126号	古墳時代の溝、柱穴等。
84次	伊勢町字井上677	平成15年2月12日～平成15年3月7日迄	共同住宅	390㎡	乙貞127号	弥生後期の溝。
85次	伊勢町字南代648・649	平成15年2月28日	分譲住宅	885㎡		撥乱。
86次	伊勢町字南代615・616	平成15年3月12日～平成15年3月14日迄	共同住宅	666㎡		旧河道・溝・撥乱。
87次	伊勢町字南代624・625	平成15年3月18日～平成15年3月19日迄	共同住宅	835㎡		旧河道
88次	伊勢町字南代624・625	平成15年8月4日～平成15年8月20日迄	共同住宅	200㎡/ 836.78㎡		87次調査分の再調査。旧河道・溝等を検出。
89次	伊勢町字南代642・643	平成15年8月25日～平成15年8月29日迄	共同住宅	250㎡/ 805㎡		撥乱坑が全体に広がる。
90次	伊勢町字南代663-2	平成15年10月9日～平成15年10月15日	個人住宅	90㎡/ 231㎡		旧河道・撥乱坑。
91次	伊勢町字中東浦62	平成15年11月23日～平成16年2月21日迄	確認調査	400㎡/ 1,223㎡	乙貞132・133号 現説資料04.2.	竪穴住居・柱穴・土塚・中世の掘立柱建物
92次	伊勢町字二町出324・325	平成15年9月26日～平成16年10月15日迄	共同住宅	300㎡/ 835.78㎡		中世の溝及び柱穴を検出。
93次	伊勢町字伊勢里320-3	平成16年2月26日～平成16年3月1日	個人住宅	101.27㎡/ 465㎡	乙貞134号	方形周溝墓と見られる溝。



挿図2 伊勢遺跡全体図

第2章 伊勢遺跡の調査成果

第1節 第56次調査の成果

1 調査の経緯と経過

伊勢遺跡の中心部において平成4年9月、国内最大級の大型高床建物（SB-1）が発見された。発見当初より、柱穴の配置からみて同建物が総柱式建物であるのか、二棟の大型建物が切り合っているのか議論がわかれていた。いずれの場合でも伊勢遺跡の歴史的価値を変更するものではないが、SB-1を中心とした方形区画の広がりや変遷について確認する必要があった。そこでSB-1が検出された地点の北東側の水田地（伊勢町字中東浦78番地）について、地権者である伊勢町在住の小田宏氏の承諾を得て確認調査を実施した。確認調査は平成11年5月10日～同7月8日の期間、約800㎡を対象に実施した。確認調査ではSB-1の北側桁柱の切り合い関係及び柵列の確認に努めた。

2 検出した遺構

耕作土・床土直下の黄色シルト上面において遺構検出を行った。調査の結果、弥生時代後期の大型建物・竪穴住居・土壇、平安時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物等を検出した。平均遺構検出面は標高98.6mであった。遺構面では、現在の水田区画に沿った東西方向の小溝が検出されたが近世の耕作痕とみられる。また、調査区中央で近代の暗渠とみられる十字の小溝を検出した。以下、主な遺構について概要を記す。

SB-1 調査区南端で弥生時代後期の大型建物SB-1の桁柱2つを検出した。SB-1の柱穴配置は2間×4間で床面積88㎡を測る大型建物と推定されたが、北東側桁柱の2つは未検出であった。今回の調査ですべての柱穴が確認されたわけである。P-11は長径2.1m以上、幅0.7mを測り、地山ブロックを含む黒褐色粘質土の堆積がみられた。土色や地山ブロックを多量に含む点で、SB-1の他の柱穴と共通する。平面形状は北側にむかって幅が狭くなる傾向がみられ、北側に斜路をもつことが推測された。P-12は長径1.7m、幅0.9mを測る。やはり北側に向かって幅が狭くなっており、北側に斜路をもつことが推測される。やはり地山ブロックを含む黒褐色粘質土の堆積が見られたが、柱根位置にあたる部分では地山ブロックを含まない暗黒褐色粘土の堆積が長径80cm、短径45cmの範囲で確認された。このような堆積状況はP-11ではみられなかった。今回の調査では、第21次調査区で検出されたP-8についても一部拡張し調査を行った。その結果、P-8は長径1.8m、幅0.6mであることが判明した。P-1～5・7・9と同じく南側に斜路をもつことがわかる。P-8はSB-11の柱穴と見られるP-dの柱掘方を切っており、前後関係があることが確認された。さらに、P-11とP-fの間にも切り合い関係が確認された。SB-1に先行してSB-11が存在したことが明らかになった。SB-1の規模は桁行11.3m（柱間距離2.8m）、梁行7.6m（柱間距離3.8m）を測り、床面積86㎡であることが確定した。

SB-11 SB-1に切られた1間×2間の建物の存在を確認した。桁行4.4m、梁行6.1m、床面積26.8㎡を測る大型の柱掘方を持つ建物である。今回の調査で新たに3つの柱穴（P-d・e・f）を検出した。P-dはSB-1のP-8に切られた状態でその一部を検出した。長径1m以上、幅0.7mを測り楕円形の柱穴と推測される。断面観察の結果、大きな地山ブロックの塊がみられ、埋め戻したのちSB-1が造営されたことが推測された。柱根位置は北側とみられ、南側に斜路をもっていたと考えてよい。P-eはT-1南隅でその一部を検出したものである。地山ブロックを含む黒褐色粘質土の堆積がみられ、P-dと色調・土質と共通していた。幅0.7m長径約2mと推測される。P-d

と同様に南側に斜路をもつとみられる。P-fはSB-1のP-11に切られた状態で検出された。東西方向に長い柱穴で長径1.5m以上、短径1.1mを測る。柱穴の周囲に汚れがみられ、柱穴の南側が不整形となる。地山ブロックが含まれており、埋め戻し後SB-1の造営の際、整地したためではないかとみられる。SB-1とSB-11の桁行軸には5°の差がみられるが、その時間差は僅かなものであったと思われる。

SB-③ T-1東隅においてその一部を検出した。5間×1間以上の掘立柱建物で、南北9.8m、東西3m以上の総柱式建物とみられる。柱穴間の距離は南北1.8m、東西2mを測る。砂を含む灰褐色粘質土の堆積がみられ、弥生の遺構とは全く異なる土質・色調であった。柱穴の直径は約30cm前後でやや小型である。図化できなかったが、出土土器片から平安時代末から鎌倉時代にかけての建物とみられる。

SB-④ T-1南隅から第2次調査区にかけて桁行4間×梁行3間の掘立柱建物を検出した。東西9m、南北6.5mを測り、柱間距離は2.2~2.4mである。SB-③と同じく、砂を含む灰褐色粘質土の堆積がみられた。柱穴は直径30~50cmほどあり、SB-③より一回り大きい。出土土器から平安時代末頃の建物と考えられる。SB-③と比較して約9°の建物軸の振れがあった。

SB-⑤ T-1とT-2にまたがる位置に3間×4間の掘立柱建物が想定される。柱間距離は1.5m前後で総柱式の建物とみられる。いくつかの柱穴は削平されて消失していると思われる。建物に平行して北東側2.3m離れた位置に柱列がみられるが、庇あるいは塀が想定される。柱穴の土色・土質から鎌倉時代の建物とみられる。

SH-1a T-1中央において検出した。SH-2に切られ、SH-1bを切っている。7m×7.5mを測る隅丸方形プランの竪穴住居である。暗茶褐色粘質土の堆積がみられ、埋土から弥生土器片、石器、管玉未製品などが出土した。弥生後期後半の竪穴住居と推定される。

SH-1b SH-1aにその大半が切られた状態で検出した。一辺4.3mを測るやや小型の方形竪穴住居と推定される。埋土はSH-1aと共通する。

SH-2 T-1西隅において、SH-1aを切った状態でその一部を検出した。一辺5.3mを測る方形プランの竪穴住居とみてよい。やや明るい灰褐色粘質土の堆積が認められた。弥生後期後半の竪穴と見られる。

SH-3 T-2西隅において検出した。かなり削平されており、周壁溝の輪郭が遺構検出面で確認された。東西6.5m、南北5.3mを測る方形プランの竪穴住居である。暗黒褐色粘質土の堆積がみられ、弥生後期の竪穴住居と推定される。床面に4本の支柱穴が確認されたほか、中央に不定形の落ち込みが検出されたが、後期の住居に多くみられる中央土坑とみられる。SH-3の周辺には黒褐色粘質土の柱穴が多数検出されたが、建物等を復元するには至らなかった。

この他、T-1の北隅においても同様の埋土をもつ落ち込みが一部検出されたが、竪穴住居の一部である可能性がある。

SD-1 T-1南側で東西方向に伸びる溝を約5mにわたり検出した。幅約30cmほどで、所々途切れており浅い溝と思われる。やや砂を含む暗茶褐色粘質土の堆積がみられ、弥生後期の遺構と推定される。SB-1北側の桁柱の延長上に伸びており、関連遺構である可能性が高い。さらに、東側延長には大型建物の柱穴埋土と共通する土坑(SK-1)が一部検出されている。径1m以上と推定され、建物柱穴の可能性もある。

柱列1 T-1中央において東西方向にのびる柱列を検出した。黒褐色粘質土の堆積がみられ、柱間距離は約2m前後である。位置関係からすると、第2次調査地点で検出された外側の柵の延長部にあ

たる可能性がある。第18・21次調査で検出された内側の柵の想定ライン上には、SH-1・2に切られた土坑（SK-1・2）や幾つかの柱穴が検出されたが、柱列を明確化するには至らなかった。

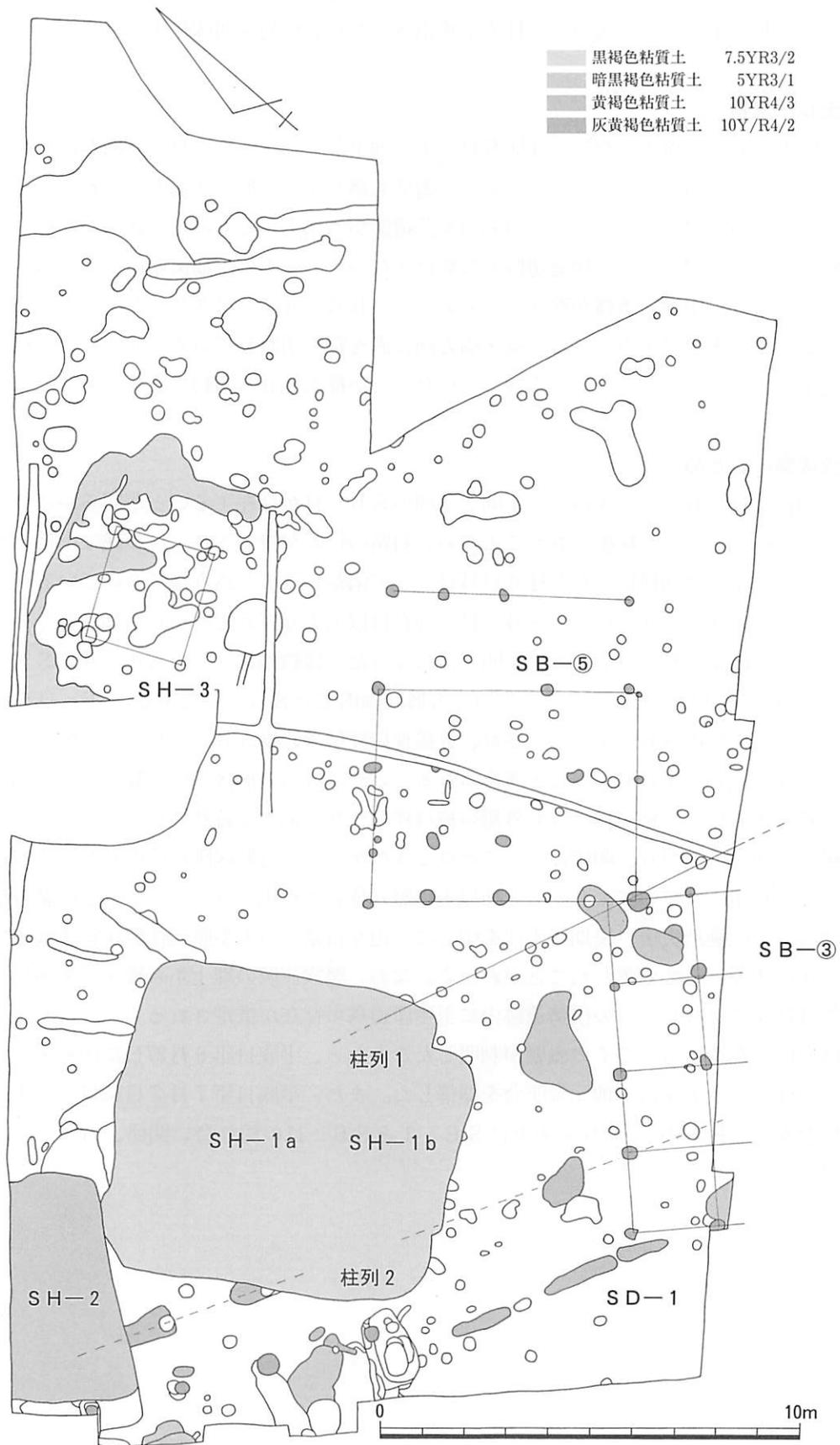
3 出土した遺物

T-1中央において検出した竪穴住居SH-1の埋土から弥生土器片及び石器が出土した。56-1は甕下腹部片で、櫛描波状文が施されている。器壁も薄く弥生後期の遺物とみられる。56-2は磨製扁平片刃石斧の刃先部分である。弥生中期の集落遺跡から出土するものと形式的に類似しており、後期の遺物であるか不明である。伊勢遺跡では数は少ないものの弥生中期後半の弥生土器や磨製石斧などが出土しており、中期の遺構が存在するものとみられる。56-3はグリーンタフと呼ばれる北陸産の石材で、管玉の未製品とみられる。縦・横方向に溝を穿ち切断している。56-2と同様に同住居に伴う遺物か不明であるが、玉づくりを行っていたことが推測される遺物である。

4 調査成果のまとめ

今回の調査ではSB-1に先行して1間×2間のSB-11が存在することが明らかになった。さらにSB-1の柱穴すべてが検出されたことから、斜路の位置が特定され、柱の建て上げ方が明らかになった。SB-1は今回検出された柱穴以外はすべて南から落とし込み建てあげているが、P-11・12は北から南へと建てあげている。SB-11の存在は以前より柱穴配置から指摘されていたが、2カ所で切り合いが確認されその前後関係が明らかになった。建物軸は5°の差があり、SB-11は方形区画内のSB-3の方向に一致する。当初、方形区画内ではSB-3を中心にSB-11を伴って構成されていたが、その後SB-1が造営され、近接棟持柱付き建物SB-2が西側に配列され、SB-3もその構成に取り込まれていったと考えられる。このように方形区画内の建物は2時期にわたり変遷する公算が大きい。二重の柵のうち外側の柵は柱列1が対応する蓋然性が高いが、内側については竪穴住居等に切られており、明確にすることはできなかった。方形区画が廃絶したのち後期後半には居住地として利用されていて、今回も3棟以上の竪穴住居が検出されている。第2次調査や第18・21次調査では方形区画消失後、後期後半代を中心に一辺9m余りの大型竪穴住居が営まれているが、この場所が居住空間として変遷したことがわかる。なお、竪穴住居の埋土から管玉の未製品が出土したが、時期は特定できないものの伊勢遺跡内に玉生産遺構の存在が推定される。

方形区画内の変遷についてその概要が判明したことから、平成11年6月27日に伊勢・阿村町を対象に約40名の住民の参加を得て地元説明会を開催した。また、平成11年7月3日には一般市民を対象に現地説明会を行い約150名の市民の方々にSB-1とSB-11の切り合い関係、方形区画内の変遷について見学頂いた。



挿図 3 第56次調査全体図

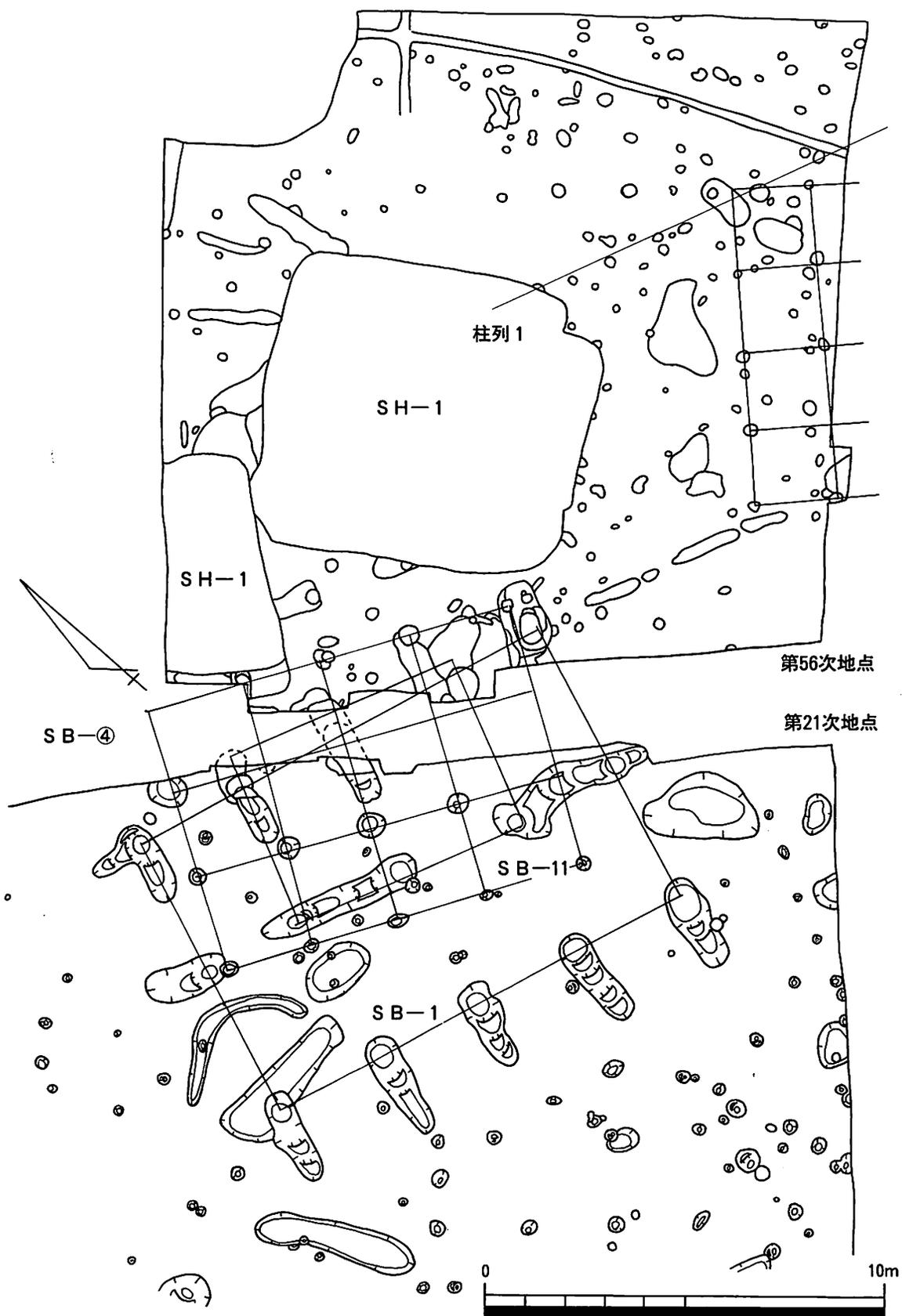
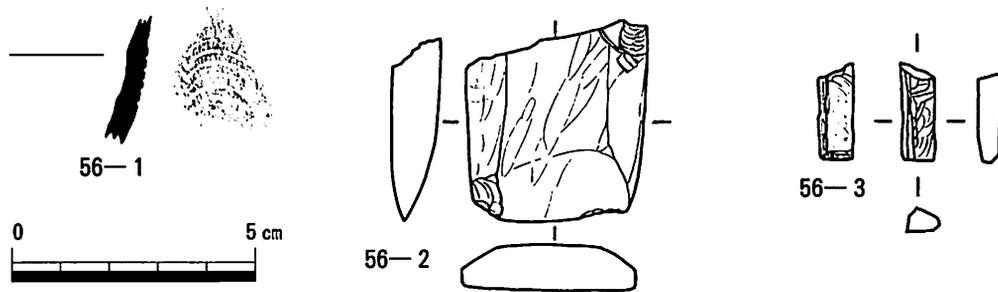
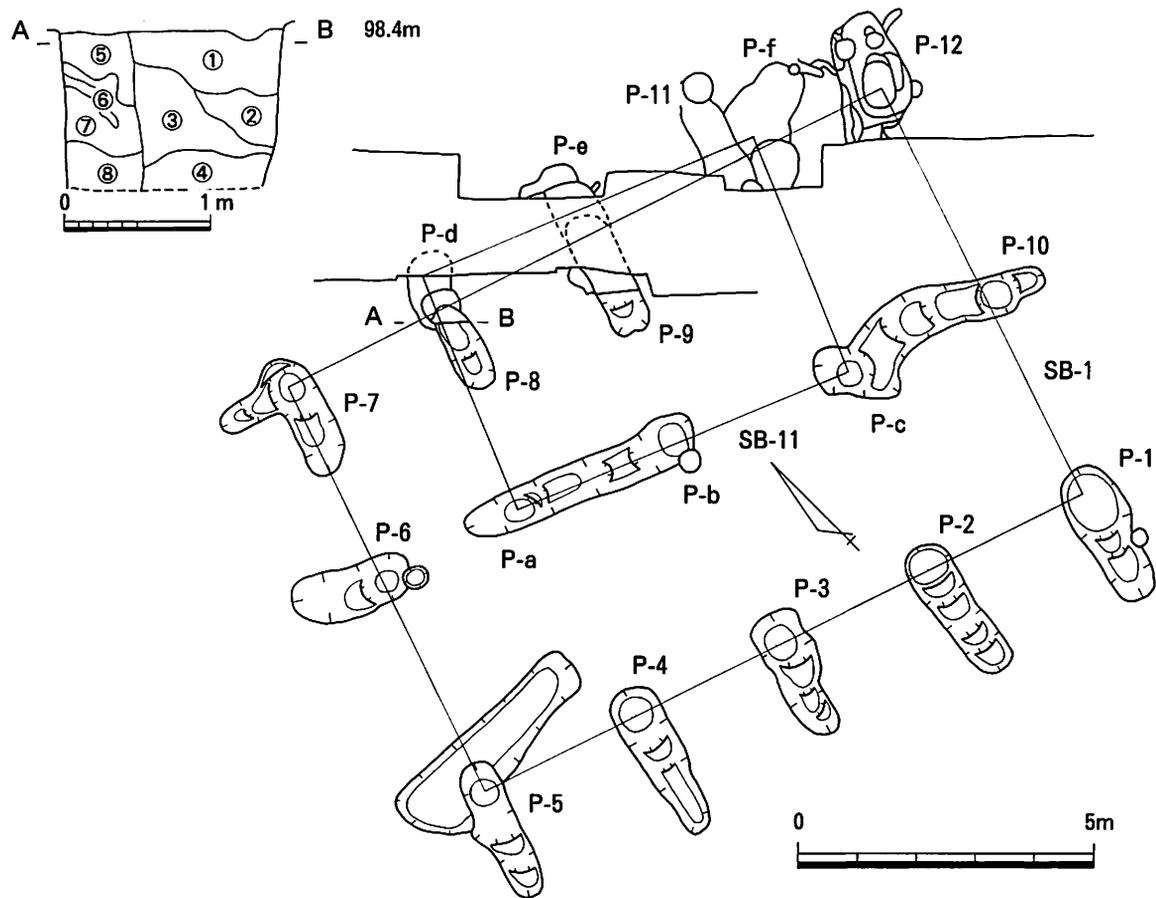


插图 4 第21・56次調査平面図



挿図5 第56次調査出土遺物

- ①茶褐色粘質土（地山ブロック+砂含む）
- ②灰黄褐色粘質土（砂含）
- ③暗黄褐色粘質土（砂含）
- ④暗灰褐色粘質土
- ⑤黄灰色粘質土
- ⑥明黄色シルト（地山ブロック）
- ⑦暗茶褐色粘質土
- ⑧黄褐色粘質土



挿図6 SB-1平面図

第2節 第58次調査の成果

1 調査の経緯と経過

平成10年12月阿村町字大洲156番地の畑地において楼観とみられる大型建物S B-10が検出されたが(伊勢遺跡確認調査報告書I所収 平成15年3月刊行)、大型建物の西側については野菜が栽培されていたため、調査できなかった。未調査部分については年度を改め、再調査させていただくことを地権者である阿村町在住の野々逸夫氏より承諾を得た。再調査については平成11年8月27日から同9月14日の期間実施した。S B-10の柱穴全体の確認を目的とするものであった。また、2つの大型建物が重複している可能性があり、その把握に努めた。

2 検出した遺構および出土遺物

耕作土・床土直下の地山である黄灰色シルト上面において遺構検出を行った。遺構面の平均高は標高98.3mを測る。S B-10は竪穴住居S H-3・4に切られており、その詳細については竪穴住居の掘削以外にないが、遺構確認を目的とするため掘削は見送り、未調査部分の拡張と平面調査にとどめた。調査の結果、未調査部分のほぼ全体が中世とみられる旧河道によって切られていることが判明した。

旧河道 旧河道は現在の栗太郡条里に沿ってやや弓なりに蛇行する状態で検出された。北東から南西方向に流れていたとみられる。灰黄色砂含粘質土の堆積がみられ、第50・51次調査で検出された旧河道と同一の遺構とみてよい。旧河道の西側の肩口は急激に1m以上落ち込んでいくことが平成10年度の調査で判明している。しかし、旧河道の東側は肩口から70cmほどのところまで緩やかに落ち込み、それから深くなっていくことがわかった。肩口については10cmほどの堆積土をとり、古い遺構の存在について平面検出を行った。その結果、S B-10に係わる溝・柱穴等をその落ち際において部分的に検出することができた。

今回の調査によって、旧河道の幅が約17mもあることが判明した。栗太郡条里に沿って北東から南西に向かって伸びており、S B-10および方形区画の東側半分が壊されていることが推定される。旧河道の位置は現在の伊勢町と阿村町の境界となっており、坪境となる川であった可能性が高い。しかし、同調査地点より南側の51次調査ではその延長部が検出されているが、北側および東側では検出されていないことから伊勢町の神社の方向に向かって屈曲する可能性が高い。その場合は平安末から室町時代にかけて営まれた屋敷地の周りを囲む濠とも考えられ、今後集落と濠の構造について確認する必要がある。

S B-10 中世の旧河道によってS B-10の全体を確認することはできなかったが、S B-10にかかわる布掘り状の溝と柱穴の一部が明らかになった。S B-10は3間×3間(9m×9m)、床面積81㎡を測る大型総柱建物と推定される。四周に布掘り状の溝をもっている点に特徴がある。旧河道に切られた西側隅においてP-8を検出した。上15cmほどは削平されているが、建物内側に向かって膨らみをもつ柱穴の存在が確認された。布掘り溝との切りあいのラインは不明瞭であった。第52次調査成果とあわせて3間×3間、床面積81㎡を測る総柱式建物であることが確実となった。

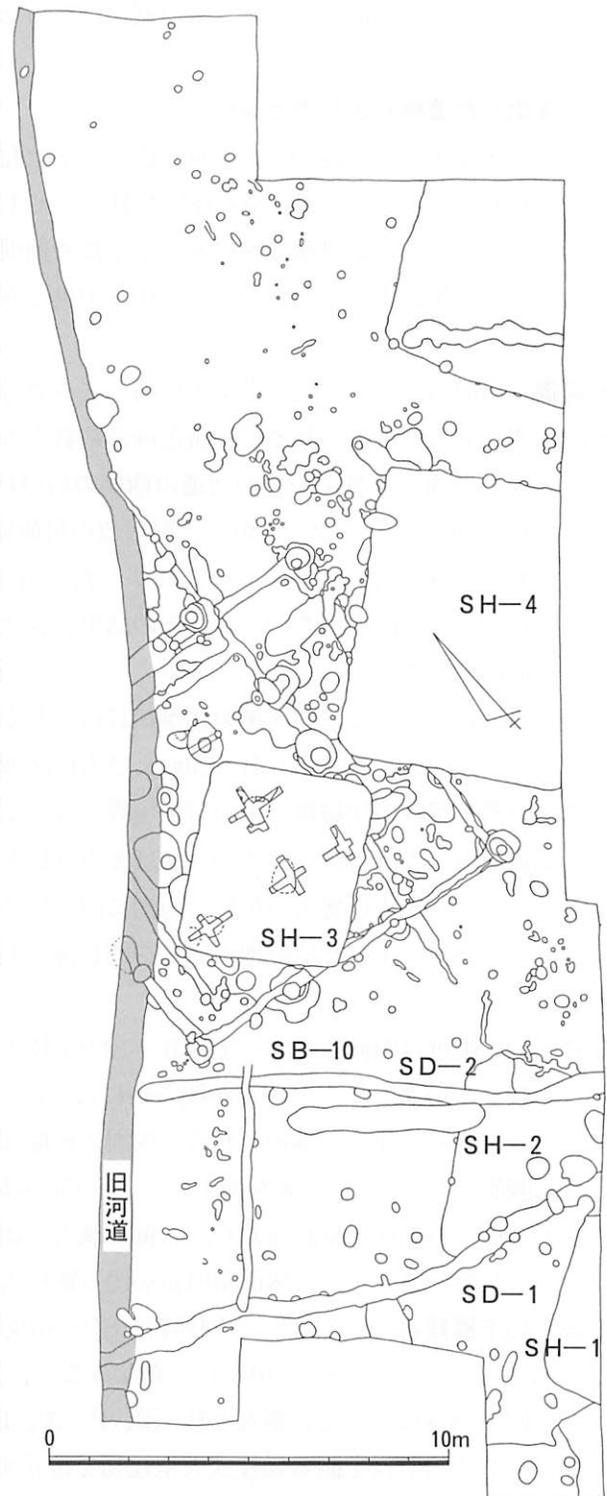
S B-10下層建物(SB-13) 同建物はSB-10及び竪穴住居に切られており、その検出は極めて困難であったが、柱列がSB-10と若干異なること、井桁状の溝が伴うことからその存在を想定していた。今回の調査によって、新たにP-④、P-⑦、P-⑩、P-⑫の存在が確認されたことから2間×2間、床面積約21㎡を測る総柱式大型建物を復元するに至った。旧河道に切られた状態でP-④を検

出したが、SB-10の布掘り溝との境界は不明瞭であった。直径約50cmの柱穴で、黒褐色粘質土の堆積がみられた。P-⑦は長径1.4m、短径1.2mを測る楕円形の柱穴で中央に直径40cmの柱根痕跡を残す。P-⑩は旧河道に切られた状態でその一部を検出した。短径0.7m、長径0.5m以上とみられ、楕円形の柱穴が想定される。P-⑫はSB-10の布掘り溝に切られその輪郭が不鮮明であるが長径1.4m以上、短径0.7mの長方形の柱穴と推測される。建物東辺のP-①の南側とP-⑪の北側には柱穴が存在しないことがわかっており、南北方向は3間とみてよい。P-①の東側にもう1間伸びる可能性があるが、柱穴距離が2.1mと想定すると、P-⑪の東側2.1mの地点には柱穴掘り方の乱れがないことから東側にのびることはないと思われる。さらにSB-10の布掘り溝と同じくSD-1がSB-14に伴うものとするれば、P-①～⑪の並びがそれに一致しており、同建物の東辺がこのラインにある蓋然性が高い。東西方向については2間あることは確実であるが、それ以西は旧河道に壊されていて検証できない。しかし、同一地点に方向を殆ど変えず正方形の総柱式建物SB-10が建て替えられていることを考えると、先行建物は2間×2間の正方形の建物であった蓋然性は高い。柱穴距離は異なるが、柱穴配置・方向・建物形式を同じくする大型建物が同一地点で建て替えられていたと推測される。井桁状の溝SD-1は、東辺については柱列と一致するが、北辺・西辺については柱列とは一致しない。SB-10のような布掘り溝とは異なる溝とみるべきであろう。P-⑦からは弥生土器58-1が出土した。くの字状に短く外反する甕の口縁部で、端部に面をもつ。肩部に縦刷毛が観察される。弥生後期の遺物と見られる。

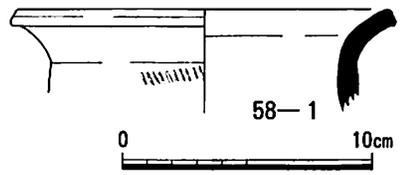
今回の調査では、北東側も拡張し平面検出を行ったが、遺構密度も希薄で建物や柵等の施設を確認するには至らなかった。

3 調査成果のまとめ

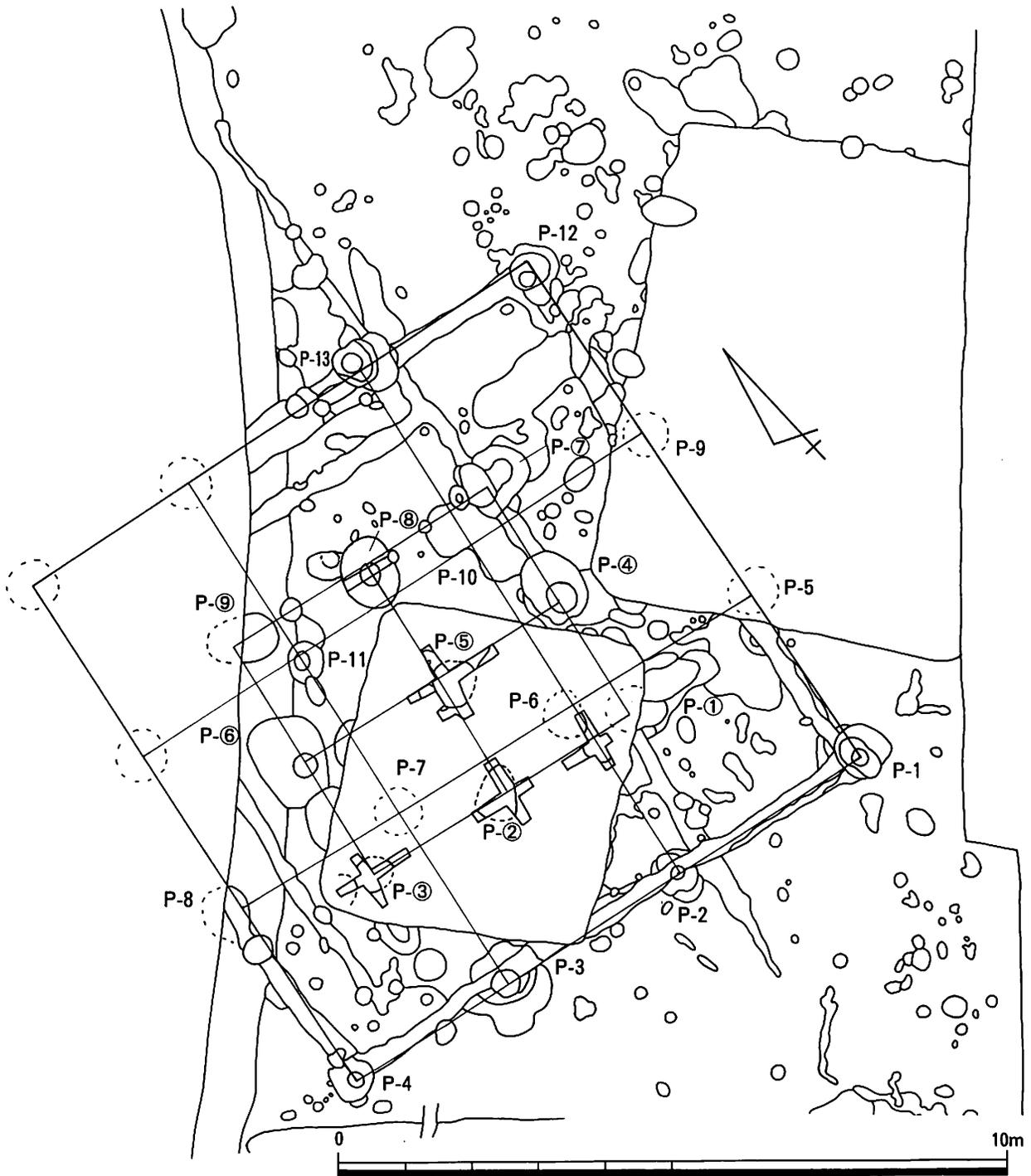
本調査によってSB-10の全体像が明らかになると期待されたが、中世の旧河道によって切られており確認することができなかった。しかし、先行する建物SB-13の規模や内容が明らかになった。柱間距離が2.1mを測る2間×2間の建物が先に存在し、その後、柱穴距離3mの3間×3間の建物が造営されたものとみられる。2つの建物は方向や地点が重なり合っており、その時間差は極めて短かったものとみられる。第56次調査によ



挿図7 第58次調査平面図



挿図8 第58次調査出土遺物



挿図9 SB-10平面図

て明らかになったように、方形区画内の2時期にわたる造営に対応し、建て替えられた可能性がある。ただ、同様な柱穴配置であり、同じ機能や性格をもつ建物であったことが想定される。SB-10・13ともに、伊勢遺跡の中心部を構成する重要な機能をもつ建物であったとみられる。

第3節 第59次調査の成果

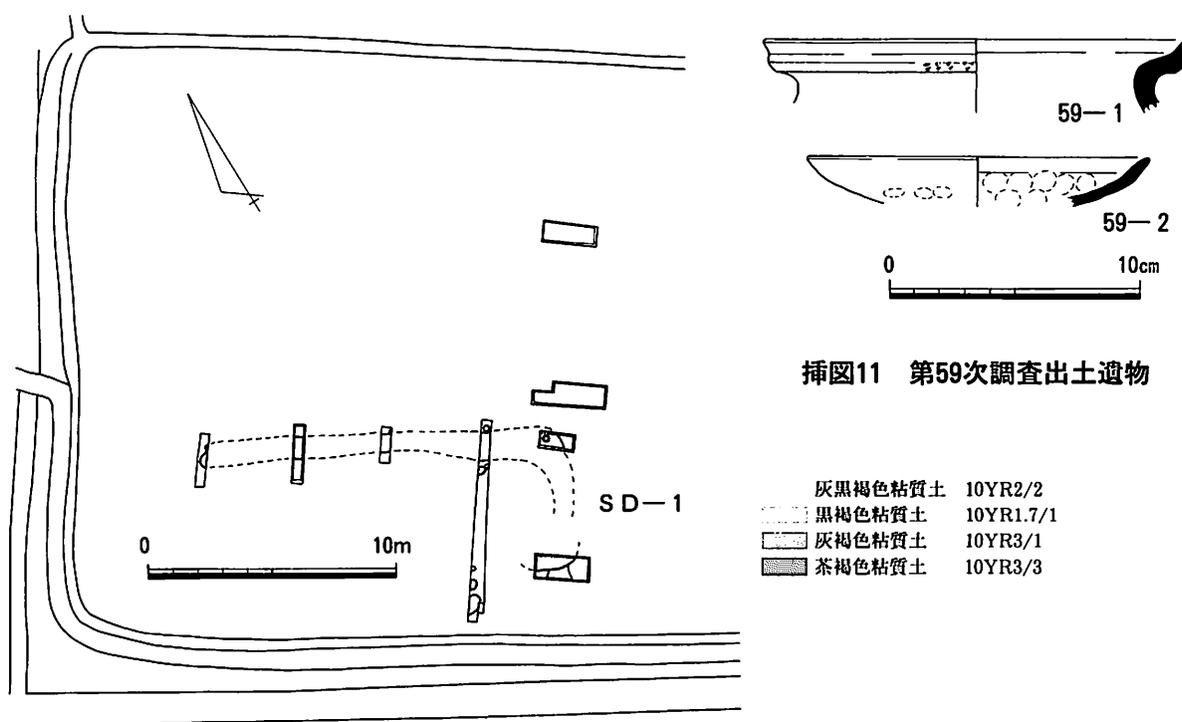
1 調査の経緯と経過

平成2年に実施した第18次調査で南東から北西方向に伸びる溝が検出された。この溝は幅約1m、深さ0.7mを測る深い逆台形をしており、弥生後期新段階の区画溝と推測された。方形区画内の建物が廃絶したのち、大型竪穴住居が営まれるようになるが、それに対応する時期の遺構とみられる。平成10年12月に阿村町字大洲157-1番地で行った第53次確認調査で南東から北西方向に伸びる溝SD-1を検出したが、時期・断面形ともに同一の溝である可能性が高いと判断された。第18・53次調査で検出された溝が同一であるとすれば、L字状に屈曲していることになる。第53次調査で検出された溝の延長部を確認するために地権者である阿村町在住の竹中昭蔵氏の承諾を得て、平成11年9月16日から同9月30日の期間、確認調査を実施した。

2 検出した遺構と出土遺物

耕作土・床土・茶褐色粘質土（遺物包含層）直下の黄色シルト上面で遺構検出を行った。遺構検出面の平均高は標高98.5mを測る。8つのトレンチを設けて区画溝の検出に努めた。

SD-1（区画溝） 第53次調査で検出された溝の延長上でSD-1を検出した。幅0.7～1mを測り、灰黒褐色粘質土の堆積がみられた。T-1では土坑SK-1によって切られていた。T-2では大きく北西側に屈曲しており、T-3、T-4では検出することができなかった。細長く設定したT-5では90°北西に振った状態で溝がのびていることが確認された。さらにT-6・T-7・T-8でも検出され



挿図11 第59次調査出土遺物

挿図10 第59次調査平面図

たが、T-8では地山が礫層となり途切れることが判明した。SD-1は第53次調査地点から北東方向に直線的に伸びたのち、北西方向へ屈曲することが判明した。SD-1の内側にあたるT-5西側では灰褐色粘質土が堆積した柱穴等が検出されたが、その外側では遺構が検出されなかった。T-5の柱穴からは土師皿59-2が出土しており、中世の遺構であることが予想された。SD-1からは受口状口縁甕59-1が出土した。短く外反する第1口縁部から短く上方向に立ち上がる。頸部には列点文が施され、後期新段階の特徴がみられる。

3 調査成果のまとめ

本調査によってL次状に屈曲するSD-1が同調査地点でコの字状にのびていることが判明した。出土土器などから弥生後期新段階の遺構と考えられる。第18次調査で検出された地点から北東約110mの地点でコの字状に折れている。方形区画の大型建物群が廃絶したのち、SD-1は後期新段階に展開する大型竪穴住居群を方形に区画する溝である可能性が高い。

第4節 第60次調査の成果

1 調査の経緯と経過

平成10年度に大型建物SB-10が見つかり、その後の調査で東側および北側については遺構の広がり確認されたが、その南側については未調査であった。さらに第53・59次調査で検出されたSD-1の延長部についても確認する必要がある。そこで地権者である阿村町在住の竹中孝一氏の承諾を得て阿村町字大洲155・158-1番地の水田地で調査を実施した。確認調査は約700㎡を対象に平成11年9月27日～同12月14日までの期間実施した。

確認調査では、遺構面の深さや弥生後期を中心とする遺構の広がりについて把握することに努め、遺構の有無について調査を行った。平均遺構検出面は標高98.2mを測る。

2 検出した遺構と出土遺物

調査対象地は2つの水田地に分かれており、155番地はT-1・2のトレンチを設け、158-1番地の水田地にはT-3を設定し調査を進めた。

T-1

SH-1 T-1中央において検出した。SH-2、SD-2・3に切られていた。南北5.6m、東西6mを測る方形プランの竪穴住居である。暗赤褐色粘質土の堆積がみられ、遺構面から弥生土器60-1が出土した。絞られた高坏脚中部で、外面に篋磨きが施される。杯部との接合は挿入式で、弥生後期新段階の遺物とみられる。

SH-2 T-1南西隅において検出した。SH-3・7に切られSD-2にも切られている。南北5.2m、東西4.7mを測る方形プランの竪穴住居である。赤褐色粘質土の堆積がみられ、埋土からは60-2・3が出土した。60-2は受口状口縁甕で、屈曲が緩く在地の典型的な甕ではない。口縁部には列点文が施される。60-3は受口状口縁甕の肩部で、在地特有の胎土の特徴をもつ個体である。肩部に櫛描直線文が施されている。2点ともに後期新段階の遺物とみられる。

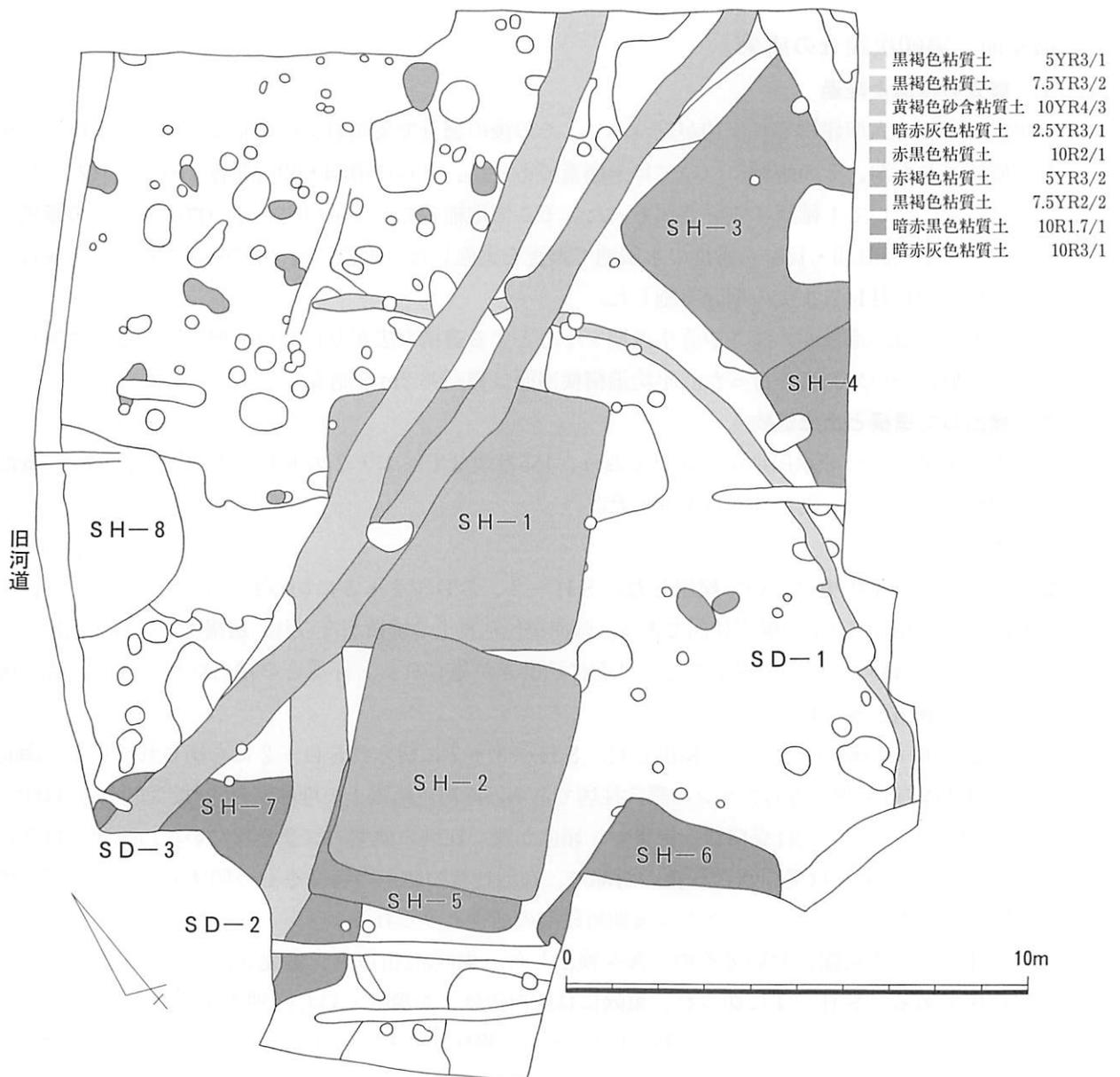
SH-3 T-1東隅においてその一部を検出した。東西5.2m以上、南北5m以上の方形プランの竪穴住居である。SH-4に切られ、東隅には灰白色砂土が覆っていた。埋土中より弥生土器60-4が出土した。やや突出するドーナツ状の上げ底をもつ甕底部である。外面に右上がりの叩き目が残る。弥生後期の遺物とみてよい。

SH-4 SH-3を切ってその南側で一部を検出した。東西2.2m以上、南北3.8m以上の方形プラ

ンの竪穴住居である。黒褐色粘質土の堆積がみられた。遺構検出面で60-5~8の遺物が出土した。60-5は受口状口縁甕で、第2口縁部が直立しておりやや古い特徴を残している。口縁部外面は無文であった。60-6は高坏口縁部で、やや深い杯部を持つ点に特徴がある。内外面に縦方向の篋磨きが施されていた。60-7はやや小型の高坏杯部の一部である。口縁との接合部の稜はやや甘く、古墳時代前期の遺物とみられる。60-8はやや小型の器台杯部である。外方へ短く直線的に伸びる杯部で、上下端を拡張するものと見られる。文様等は観察されなかった。平面検出時に出土した遺物であるがやや新しい特徴をもつ遺物がみられた。

SH-5 SH-2・SD-2に切られてその一部を検出した。SH-7を切っている。東西4.6m以上の方形プランの竪穴住居とみられる。弥生後期の竪穴住居とみられる。

SH-6 T-1南隅においてその一部を検出した。T-2から伸びるSD-4に切られていた。東西4m、南北4m以上の規模で、東コーナーがやや広角に開くため多角形住居の可能性もある。ただ、



挿図12 第60次調査T-1平面図

伊勢遺跡内の五角形住居は長辺6m以上ある大型のものが多く、他の遺構が切っている可能性も否定できない。平面検出時に60-9が出土している。短く外反する壺口縁部で、外面に縦刷毛が施されている。古墳時代前期の遺物とみられる。時期的にはSH-4出土遺物と同時期とみられる。

SH-7 T-1西隅においてその一部を検出した。SH-6、SD-2・3に切られていた。南北4.8m、東西5.5m以上の方形プランの竪穴住居と見られる。切り合い関係ではSH-1とともに古い時期の遺構とみられる。暗赤褐色粘質土の堆積が見られた。

SK-1 T-1西隅においてその一部を検出した。直径4.5mほどの円形の土坑である。暗赤褐色粘質土の堆積がみられた。小型の竪穴住居の可能性もある。平面検出時に60-10~12の土器が出土した。60-10は突出しない平底の甕底部で、外面に細かい刷毛目を残す。在地の甕ではない。60-11は平底の壺底部とみられる。円盤状の底部から積み上げて整形していったことが推測される。60-12は受口状口縁甕の底部と見られる。外面に縦方向の粗い刷毛目が観察される。これらの底部は特徴をもつものではなく時期的には不明である。しかし60-12は上げ底が緩く、余り新しいものではない。弥生後期の遺物とみられる。

SD-1 調査区中央において弧状に巡る溝を約20mにわたり検出した。検出状況から円弧の直径は20m前後と推定される。黒褐色粘質土の堆積がみられた。SD-2~4に切られているが、竪穴住居との切り合い関係は確認できなかった。SH-1・2・5・7のまわりを囲むように巡っており、北陸地方などにみられる竪穴住居を囲む区画溝とみられる。

SD-2 調査区中央において北東方向から南西方向に伸びる溝を検出した。幅0.9mを測り、約2.1mにわたって検出した。やや弓なりに調査区中央で僅かに屈曲している。位置関係や土色・色調から18・53・59次調査で検出されたSD-1と同一の遺構とみられる。黒褐色粘質土の堆積がみられた。平面検出時に60-13~15の遺物が出土した。60-13は受口状口縁甕の肩部で、肩部に櫛描直線文が施されている。60-14は高坏の脚中部で、円筒状を呈する。外面に櫛描直線文が施されている。杯部との接合は挿入式で、形式的には後期中葉まで遡る可能性がある遺物である。60-15もかなり絞られた高坏脚中部で、緩やかに開脚するものとみられる。形式的には60-14よりも新しいものである。同溝は既往の調査から後期新段階に埋没したと推定されるが、竪穴住居はそれ以前の遺構と考えられる。

SD-3 調査区中央を南北方向に横切る形で約21mにわたって検出した。幅0.6~0.9mを測り、黄褐色粘質土の堆積がみられた。切り合い関係では耕作痕を除いて最も新しい遺構で、中世の農業用の溝とみられる。

SD-4 T-1の南隅でその一部を検出した。T-2でその延長部を検出している。灰黄色の砂を含む粘質土の堆積が確認された。SD-3に平行するもので、ほぼ同時期の遺構とみられる。平面検出時に60-15が出土している。やや突出する壺底部である。土色・土質からみて中世の遺構とみられることから混入品と考えてよい。

調査区北隅及び南隅において柱穴、土坑を多数検出した。赤褐色粘質土及び黒褐色粘質土の堆積がみられた。弥生後期と見られるSD-1に切られるものや、切っているものがあり一定の時間幅をもつものと見られる。しかし、掘立柱建物等の遺構を復元するには至らなかった。また、調査区南西辺において59次調査で確認した旧河道肩部の延長部分を検出した。おおよそ現況の水田区画に平行していることが判明した。

T-2

T-1南隅において一部検出したSD-4の広がりを確認するために設けたトレンチである。その結果、東西方向に伸びる幅約1mを測る溝SD-1を検出した。砂を含む黄灰色粘質土の堆積が見られた。

黒褐色系の粘質土が堆積した柱穴・土坑を切っており中世の遺構とみられる。SD-1の周辺から柱穴・土坑等を検出したが、建物等を復元するには至らなかった。なおT-2南辺に南西側にむかって深く落ち込んでいく境界を検出した。南西側の水田は地形的にも1m以上低くなっているが、18・49・57次調査で確認された古墳時代から古代にかけての旧河道がこの場所に想定され、その肩部と考えられる。T-2の平面検出時に60-17~19が出土した。60-17は絞られた頸部から屈曲し外上方に直線的に立ち上がる。広口壺の頸部と思われ、頸部内面に横刷毛が観察される。60-18は壺底部で、突出しない小さな平底をもつ。60-19はやや突出するドーナツ状の上げ底で、壺底部とみられる。調整等は不明であるが、底部の整形などはやや粗雑である。

T-3

T-2から東へ20m程離れた地点にT-3を設定した。

SH-8 調査区中央北側においてその一部を検出した。南北3.6m以上、東西6mを測る方形プランの竪穴住居とみられる。黄黒褐色粘質土の堆積がみられた。

SH-9 SH-8に切られた状態でその一部を検出した。南北3.8m以上、東西7.8mを測る方形プランの竪穴住居とみられる。暗赤褐色粘質土の堆積がみられたが、これを切ってL字状の溝が検出されたことから別の竪穴住居が存在する可能性もある。さらに、SH-9の南側にも同色・同質の堆積土による一辺4.4mほどのコの字状の溝を検出した。これらの溝は竪穴住居が削平され、周壁溝だけが残った可能性もある。

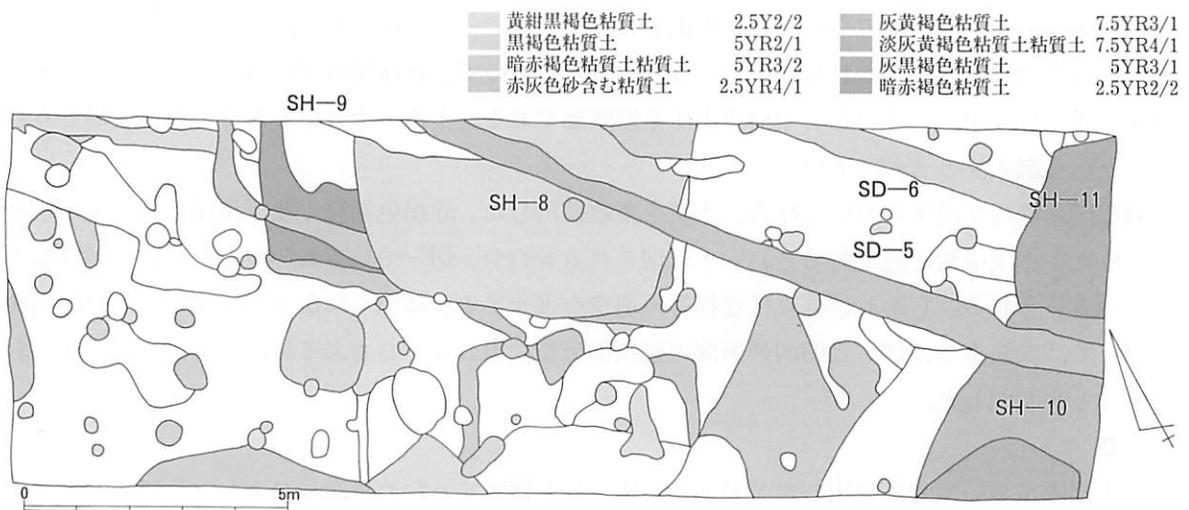
SH-10 T-3南隅においてその一部を検出した。一辺4m以上の方形プランの竪穴住居とみられる。灰黄褐色粘質土の堆積がみられた。

SH-11 T-3南東隅において、SH-10に切られた状態でその一部を検出した。一辺3.6m以上の竪穴住居とみられる。プランにやや歪みがみられ、方形住居かどうか不明である。黒褐色粘質土の堆積がみられた。

SD-5 T-3中央において南北方向に伸びる溝を約13mにわたり検出した。幅約70cmを測る溝でSH-8・10を切っている。砂を含む灰白色粘質土の堆積がみられ、中世以降の溝と考えられる。

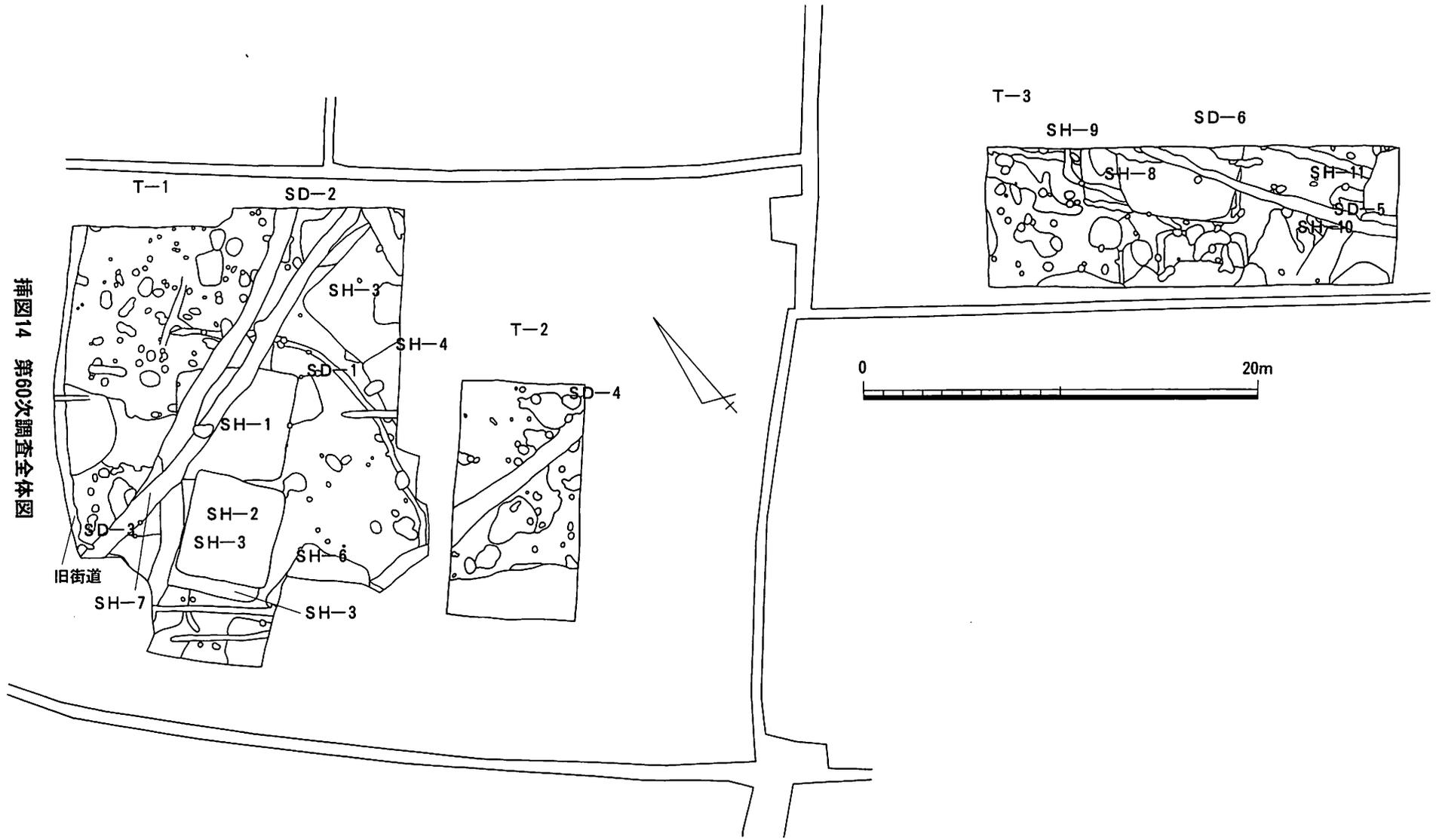
SD-6 T-3東隅においてその一部を検出した。幅約50cmを測る溝で約5mにわたり検出した。SH-11に切られ、黒褐色粘質土の堆積がみられることから弥生後期の遺構である可能性が高い。

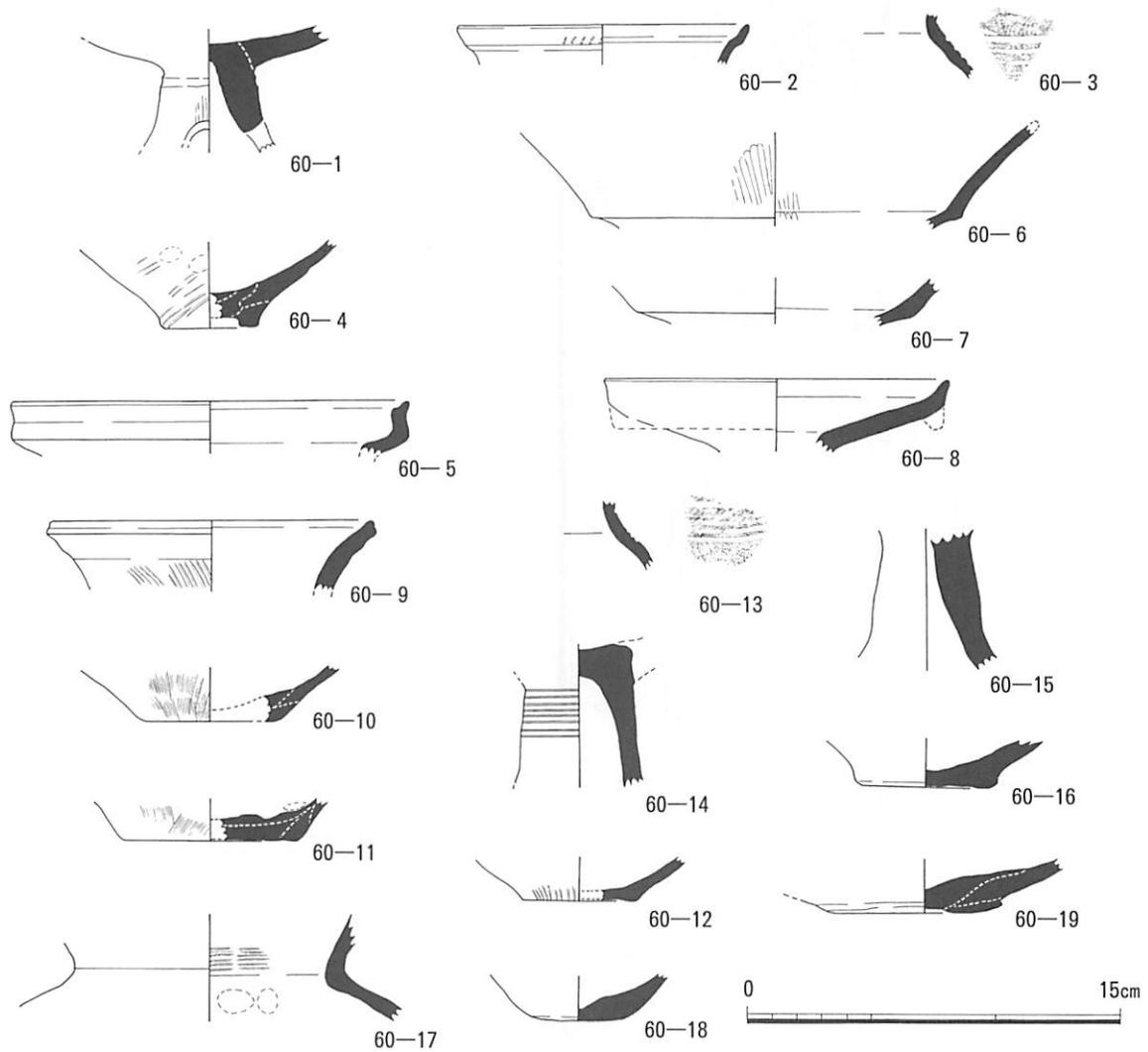
T-3でも多数の柱穴や土坑が検出されたが、建物など明確な構造物を復元するには至らなかった。



挿図13 第60次調査T-3平面図

插图14 第60次調査全体図





挿図15 第60次調査出土遺物

3 調査成果のまとめ

今回の調査によって後期新段階に埋没する区画溝が第53次地点からやや蛇行しながらも、ほぼ直線的に南西方向にのびていることがわかった。後期新段階の大型竪穴住居群をコの字状に囲む区画溝である可能性が高くなった。T-1中央では円弧状に巡る溝を検出したが、その中で検出された竪穴住居群のいずれかに伴うものとみられる。このような溝は弥生末から古墳時代初頭の下長遺跡にも発見されており、北陸など日本海沿岸地域との係わりを示すものと考えられる。今回の調査でも多数の竪穴住居が検出されたが、方形区画内の大型建物が廃絶したのち、弥生後期新段階から古墳時代初頭にかけて竪穴住居が多数営まれていることが判明した。特に区画溝の内側には一辺9 mにおよぶ大型竪穴住居が幾つも検出されており、方形区画に替わる空間として機能していたことが想定される。竪穴住居群は大洲地区から第2調査地点にかけて多数検出されているが、出土土器から弥生後期新段階から庄内式併行期にかけて営まれていたと考えられる。

第5節 第61次調査の成果

1 調査の経緯と経過

平成11年12月、阿村町と伊勢町をつなぐ里道改良工事が行われていることが判明した。学童の通学

路となっている里中道に擁壁を入れる小規模な工事であったが、都市計画課に工事の中止と発掘通知を提出し、発掘調査が必要であることを申し入れた。都市計画課から発掘通知が提出されたのを受けて、平成12年1月4日～同1月18日までの期間、緊急調査を実施した。既に幅60cm、長さ約27mに渡りコンクリートが流し込まれており、それ以上の掘削はないことから、周辺部の遺構検出を行い遺構の広がりを確認することに努めた。

2 検出した遺構及び出土遺物

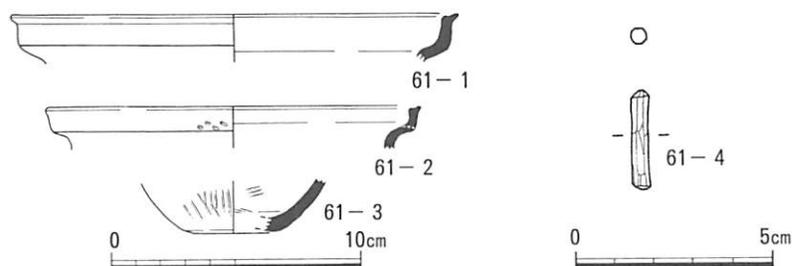
調査の結果、弥生後期の竪穴住居4棟を含む溝、柱穴、中世の掘立柱建物を検出した。

SH-1 調査区東側で一辺7m以上の方形プランとみられる竪穴住居が検出された。黒褐色粘質土の堆積がみられ、南側にむかって広がっていく様子が確認された。

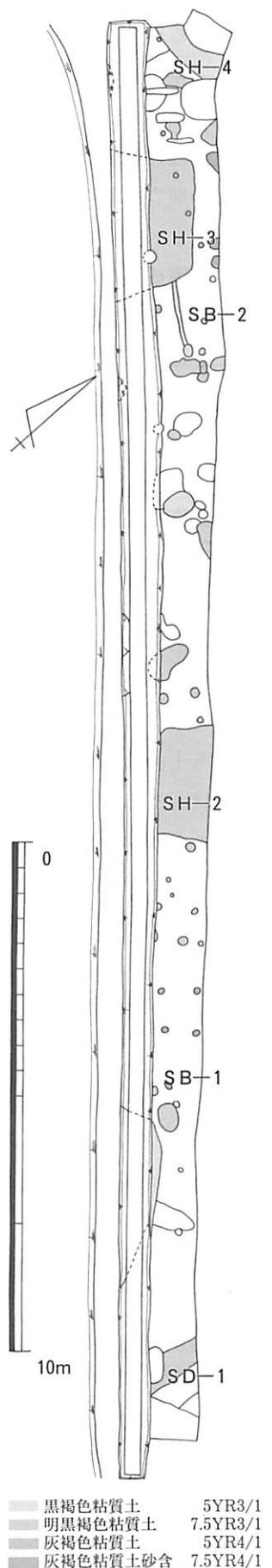
SH-2 調査区中央で東西方向約4.2mの落ち込みを検出した。南壁断面にかかっていないことから、南西側60cm以内にコーナーをもつ方形プランの竪穴住居とみられる。やや明るい黒褐色粘質土の堆積がみられた。平面検出の際、受口状口縁甕61-1が出土した。第2口縁部は直立し、端部は外方へつまみ出されている。口縁部は無文であり、古墳時代初頭の遺物とみられる。平面検出時に受口状口縁甕61-2が出土した。第2口縁部は直立し、端部は上方から押圧し外端にやや肥厚する。口縁部には列点文がほどこされている。後期中葉の遺物とみられる。61-3は在地の甕底部である。内外面に粗い刷毛目が施されている。

SH-3 調査区北西側で東西5.1m、南北2.5m以上の竪穴住居を検出した。南壁断面との接合をみると東西辺ともに南西側にむかって広がっていく様子が窺われ、五角形住居になる可能性もある。SH-2と同じくやや明るい黒褐色粘質土の堆積がみられた。平面検出時、石製品61-4が出土した。小さな円筒形を呈し、外面に縦方向の削りを施し、上下端は横方向に削り切断している。

SH-4 調査区北隅においてその一部を検出した。SH-1と同じく黒褐色粘質土の堆積がみられ、南辺に丸みをもつことから円形の竪穴住



挿図17 第61次調査出土遺物



挿図16 第61次調査全体図

居である可能性が高い。

SD-1 調査区東隅において南北方向に伸びるとみられる溝を検出した。幅約1m程あり、やや明るい黒褐色粘質土の堆積がみられた。

掘立柱建物 調査区中央で、砂を含む灰褐色粘質土が堆積した5つの柱穴を検出した。1間以上×2間の掘立柱建物の可能性がある。調査区西側でも灰褐色粘質土の柱穴が5つ並んで検出されたが、1間以上×4間以上の建物である可能性が高い。

3 調査成果のまとめ

狭い面積の調査であったが、この地域にも竪穴住居等が幾つも営まれていることが判明した。SH-4などは方形区画内の大型建物の時期に並行するものとみられる。また中世の掘立柱建物の存在が予想され今後、遺跡北東部の遺構の広がりを把握していく必要がある。

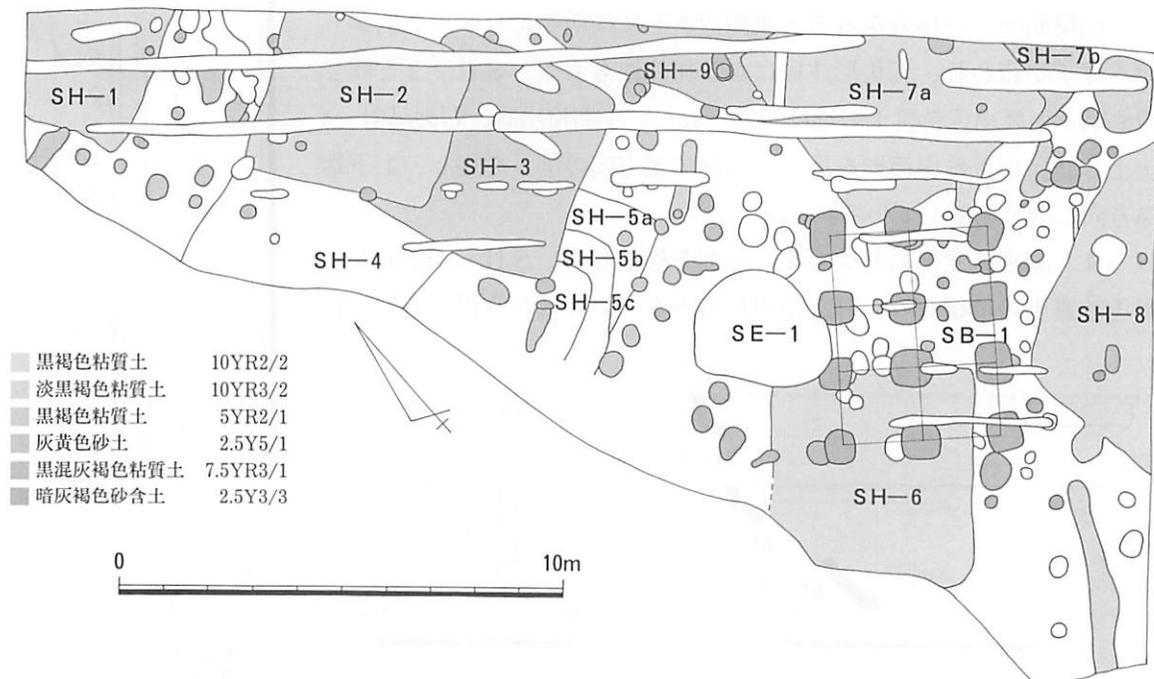
第6節 第63次調査の成果

1 調査に至る経過

61次調査成果を受けて、方形区画北東部の遺構の広がりを把握する必要性があり、地権者である古高町在住の新野輝子氏の承諾を得て確認調査を実施した。調査は平成12年2月21日から同3月21日の期間、約300㎡を対象に行った。

2 検出された遺構

調査は耕作土・床土を除去し、厚さ約15cmの灰黄色砂土（旧耕作土・床土）を掘削した後、黄色シルト上面で遺構検出を行った。調査対象地の南西側は表土を除去すると礫層となり、遺構検出が難しい状況であった。地形的には南西側に向かって緩やかに落ち込んでおり、中心部の方形区画より高いことがわかった。平均遺構検出面は標高98.5mを測る。上層では現在の水田区画に沿った方向で耕作痕を多数検出した。



挿図18 第63次調査全体図

SH-1 調査区北隅においてその一部を検出した。東西3.5m以上、南北3.1m以上の方形プランの
竪穴住居である。暗黒褐色粘質土の堆積がみられた。

SH-2 SH-1の南東側で、SH-3・4を切った状態で検出した。南北4.3m、東西3.7mを測
る小型の竪穴住居である。黒褐色粘質土の堆積が見られた。

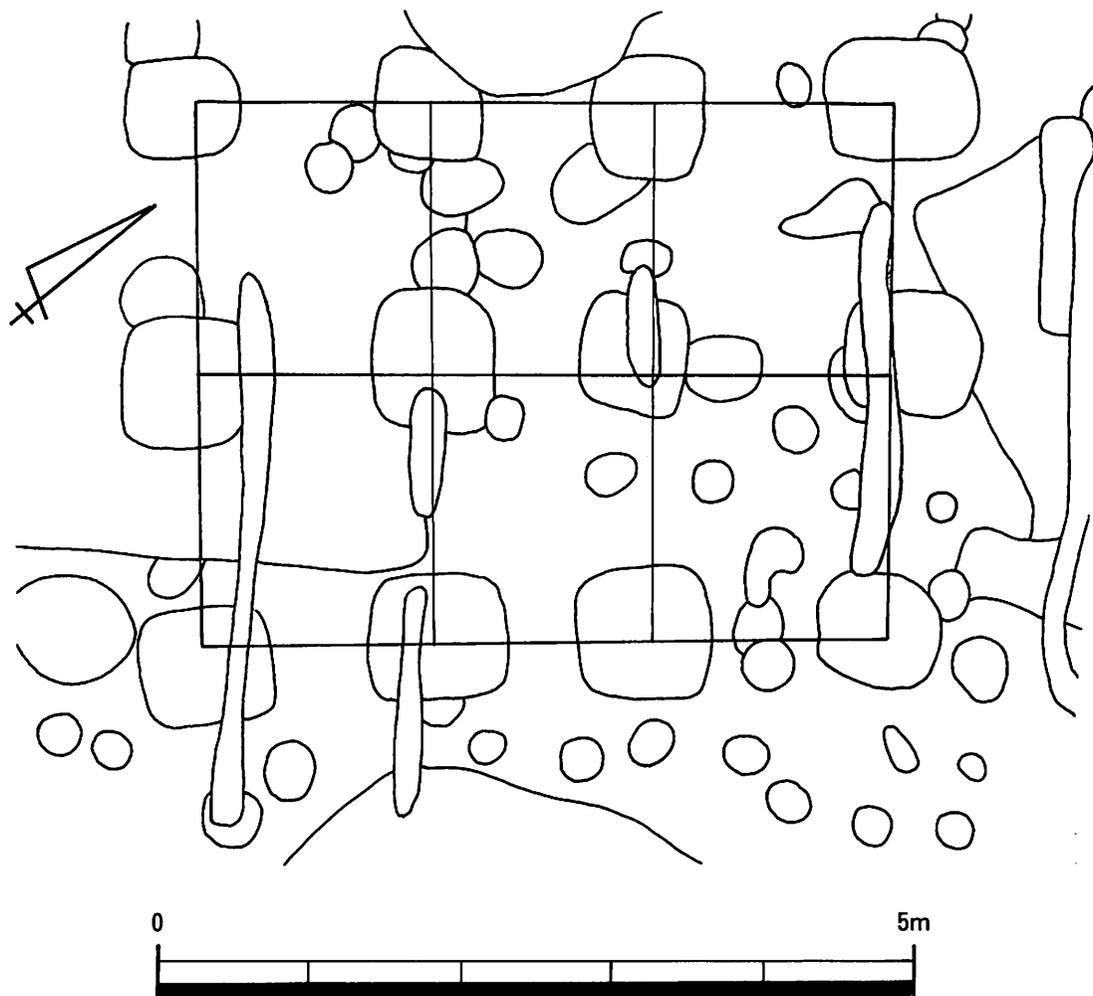
SH-3 SH-2に切られ、SH-4・5を切った状態で検出した。南北4.2m、東西4.6mを測る
小型方形プランの竪穴住居とみられる。やや明るい黒褐色粘質土の堆積がみられた。

SH-4 SH-2・3に切られ、SH-5を切った状態で検出した。南北4.8m、東西3.5m以上の
中型の竪穴住居とみられる。SH-1と同じく暗黒褐色粘質土の堆積がみられた。

SH-5 SH-3・4に切られた状態でその一部を検出した。南北3.5m以上、東西3.2m以上の方
形プランの竪穴住居とみられる。礫を多く含む黄褐色粘質土の堆積がみられた。その外側に同質の埋
土であるが、二重の輪郭が観察され、住居の拡張あるいは切り合いがある可能性がある。

SH-6 調査区南西隅において検出した。東西3.9m、南北3.5mを測る小型方形プランの竪穴住居
である。SH-2と同じく黒褐色粘質土の堆積が見られた。

SH-7 調査区南東側でその一部を検出した。一辺4.0mを測る小型方形プランの竪穴住居である。
SH-2・6と同じく黒褐色粘質土の堆積が見られた。東辺の外側には埋土がSH-3と同じ遺構の



挿図19 SB-1平面図

輪郭がみられ、別の竪穴住居が存在する可能性がある。

SH-8 調査区東隅においてその一部を検出した。短辺5mを測る竪穴住居とみられる。西隅と北隅コーナーが広角に開くことから五角形住居の可能性が高い。黒褐色粘質土の堆積がみられた。

SH-9 調査区中央北隅においてその一部を検出した。SH-7に切られており、SH-3と同じくやや明るい黒褐色粘質土の堆積が見られた。一辺5.5m以上の竪穴住居と推定される。

SB-1 調査区南東側においてSH-6を切った状態で検出した。2間×3間(3.6m×4.7m、床面積約17㎡)の総柱式高床建物である。柱間距離は梁行1.8m、桁行1.6mと桁行がやや狭くなっている。柱穴は一辺0.8mを測る方形の掘り方で、砂を含む暗灰褐色土の堆積がみられた。同規模・同形式の建物が伊勢遺跡の西端にあたる71次調査で検出されている。周辺部の調査成果から、奈良時代末から平安時代にかけての建物跡と推定される。

SE-1 調査区中央でSH-6及びSB-1を切った状態で検出した。長径3m、短径2.5mを測る楕円形の遺構である。明るい砂を含む黄褐色土の堆積がみられた。中世の井戸跡と思われる。

この他、多数の柱穴、土坑を検出した。これらの遺構は土色・土質から3種類ほどに分けられる。一つは弥生後期から古墳時代初頭の黒褐色粘質土の埋土をもつ一群のもので、竪穴住居と同時代の遺構と見られる。これとは異なり、暗灰褐色粘質土の堆積がみられる柱穴の一群があり、SB-1と同時代の遺構とみられる。いま一つは、灰黄色砂土の埋土をもつもので、SE-1と同じ中世の遺構である。この地域には大きく分けて3時期の遺構が濃密に営まれていることが判明した。

3 調査成果のまとめ

今回の調査では多数の竪穴住居が確認された。しかも切り合い関係或いは拡張が著しく、長期にわたって集落が営まれていた様子が窺われた。方形区画のある伊勢遺跡中心部でも大型建物が廃絶した後、竪穴住居が多数営まれており、今回の調査成果と同じ状況であった。その地点から約100m離れており、中心部の遺構の密度が極めて高いことが想定される。このような竪穴住居の検出状況をみると大型建物の廃絶後、これらの竪穴住居が後期新段階だけでおさまるとは考えがたく、庄内式併行期まで継続し営まれていたと考えられる。竪穴住居からみて、伊勢遺跡は後期末で急速に消滅するものではないことが推定される。

さらに奈良時代から平安期の掘立柱建物が検出され、古代の集落が重複している。また中世にも集落が形成されており、井戸も掘削されている。今回の調査によって、伊勢遺跡中心部には、各時代の遺構が営まれていることが判明した。

第7節 第64次調査の成果

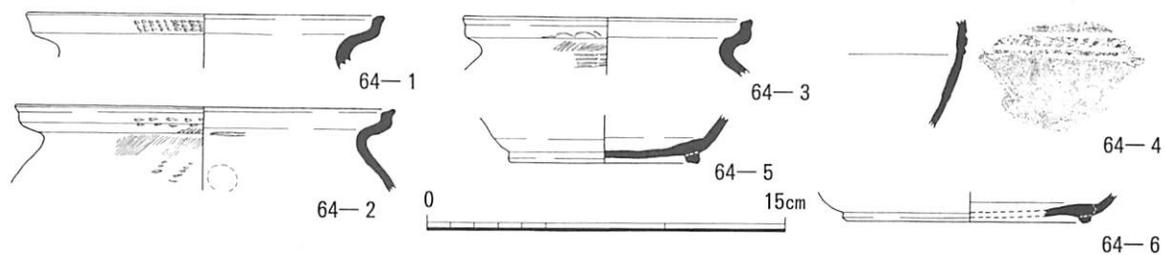
1 調査に至る経過

平成11年度の調査成果によって、伊勢遺跡の北側の遺構の広がり課題として浮かび上がり、平成12年度は大型建物が集中する方形区画の北東側の広がりについて確認調査を行った。

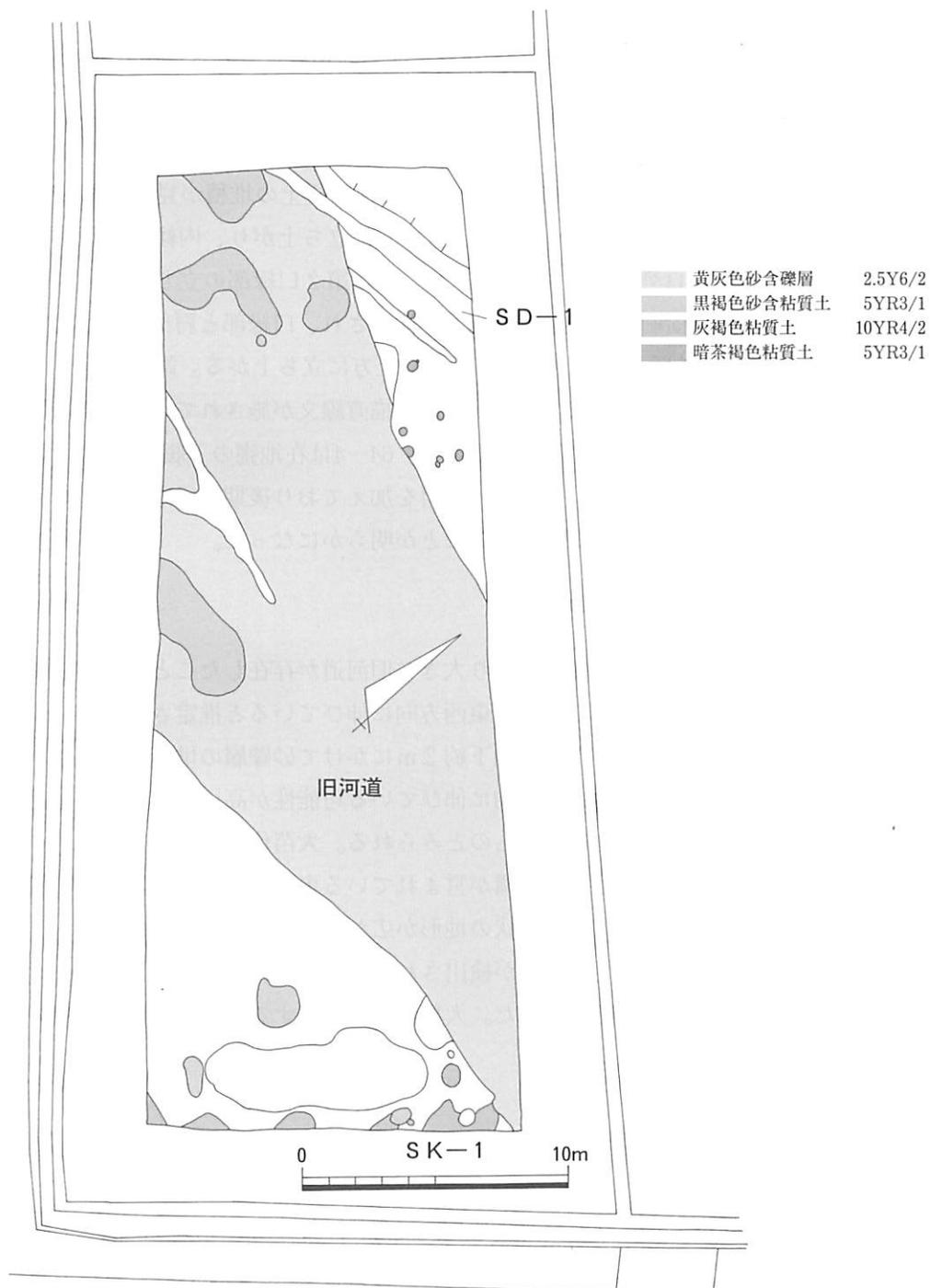
地権者である古高町在住の新野輝子氏の承諾を得て、伊勢町日吉神社の北側、伊勢町56・59-1番地の水田地で確認調査を実施した。平成12年6月26日～同7月6日までの期間、約500㎡を対象に調査を行った。

2 検出した遺構と出土遺物

耕作土・床土直下の黄色シルト上面で遺構検出を行った。遺構検出面は平均標高98.6mであった。



挿図20 第64次調査出土遺物



挿図21 第64次調査全体図

旧河道 1 調査区中央において幅約13mを測る旧河道を東西方向に約37mにわたって検出した。砂礫を多く含む黄灰白色土の堆積がみられた。中世の遺構とみられる暗茶褐色粘質土が堆積した柱穴・溝を調査区北隅において検出したが、これらの遺構を切っていることから中世以降の川跡と考えることができる。旧河道が埋没した後に近代の耕作痕や溝が切っており、比較的新しい川とみられる。遺構検出時に中・近世の陶器片などとともに64-5・6が出土した。ともに須恵器皿の底部で、8世紀末の年代が想定される。63次調査でも方形の大きな柱穴をもつ総柱式建物が検出されており、周辺にこの時期の遺構が存在する可能性が高い。

旧河道 2 調査区北隅において東西方向に伸びる肩口を一部検出した。明るい黄灰色シルトの堆積が見られ、地形的にも大きく落ち込んでいく様子が窺われた。

SD-1 旧河道1を切って東西方向に伸びる溝を約10mにわたり検出した。幅0.7mを測り、明るい砂を含んだ黄白色粘質土の堆積がみられた。近代の農業用水路とみられる。

旧河道の南側で不定形の落ち込みを多数検出している。トレンチ南東壁隅においてSK-1を検出した。長径2.5m程の不定形の落ち込みで、暗茶褐色粘質土の堆積が見られた。埋土中より受口状口縁甕64-1~4が出土した。64-1は外上方に直線的に立ち上がり、内傾する面をもつ。第1口縁部内面に稜をもち、外面には列点文が施される。64-2は第2口縁部の立ち上がりが短く、端部をややつまみ出す。頸部内面に横刷毛、外面に縦刷毛が観察され、口縁部と肩部に列点文を施している。64-3は第1口縁部が短く外反し、第2口縁部も短く上方に立ち上がる。端部は面をもつだけで、つまみ出されない。口縁部には櫛描波状文、肩部には櫛描直線文が施されている。3点とも口縁部のつまみ出しが弱く、弥生後期中段階の遺物とみてよい。64-4は在地甕の下腹部で、貼付け突帯が施される。突帯は中央分割する沈線を施し、縦方向の刻目を加えており後期中段階の特徴を備えている。この時期の遺構が同調査地点にまで広がっていることが明らかになった。

3 調査成果のまとめ

今回の調査によって、この地域にかなり大きな旧河道が存在したことが判明した。旧河道1は阿村町から伊勢町の現集落の中心にむかって東西方向に伸びていると推定されるが、伊勢町永願寺の南側で試掘調査を行った際、表土直下から地下約2mにかけて砂礫層の堆積が確認されている。旧河道1の延長線上にあたり、東西方向に直線的に伸びている可能性が高い。旧河道2は北側に向かって地形的に低くなっており、それに対応するものとみられる。大苗代地区では表土直下で方形周溝墓や竪穴住居が検出されており、微高地上に遺構が営まれている事がわかっている。別の微高地が存在するのか、今回の調査地点より北方に沼沢地状の地形が広がっていることが予想される。

旧河道1の南側では弥生後期の土坑が検出されたことから、少なくとも本調査地点までは弥生後期の遺構が広がっていたことが想定された。大型建物が集中する伊勢遺跡の東半部の北東側の境界をこの地域に想定することができる。

第8節 第66次調査の成果

1 調査に至る経過

平成5年、道路建設に先立ち大洲遺跡第3次調査が行われた。本調査によって弥生後期の大型掘立柱建物や、後期から古墳時代初頭の竪穴住居が多数検出された。それとともに2条の大溝が検出されたが、この大溝を境に弥生時代の遺構が見られなくなることが判明した。内側の大溝は幅6~7m、深さ2mをこえる大規模なもので、東西方向に伸びる舌状の丘陵部の背後を南北方向に切断している。

伊勢遺跡の東端を区切る施設とみられ、その広がりをおさえる必要があった。大溝の延長部を確認するために、地権者である阿村町在住の竹中信蔵氏の承諾を得て確認調査を実施した。確認調査は平成12年9月11日～同9月29日の期間、約400㎡を対象に実施した。

2 検出した遺構

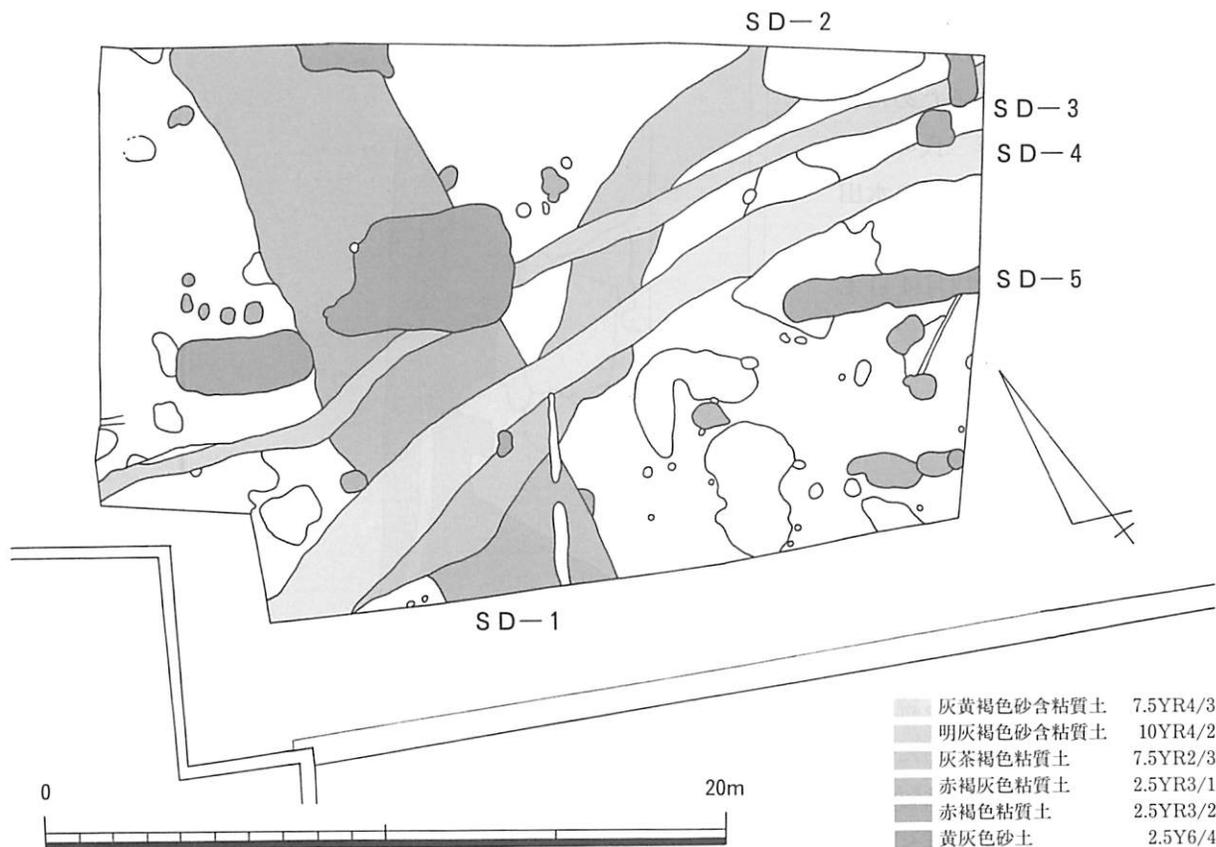
耕作土・床土直下の黄色シルト上面において遺構検出を行った。検出面の平均標高は99.2mであった。

SD-1 調査区中央において、幅5～5.6mを測る大溝を南北方向に約18mにわたって検出した。暗赤褐色粘質土の堆積がみられた。同調査地点は伊勢遺跡の中でも最も高所にあたり、かなり削平されていることが想定される。位置関係から、大洲第3・5地点で6～7mあった大溝と同一遺構とみてよいが、削平を受け上端幅が狭くなっているものとみられる。

SD-2 SD-3・4に切られSD-1を切り、東西方向に伸びる溝を検出した。蛇行しながら49次調査地点へ伸びている。49次調査でSD-5と呼ぶ溝を検出したが、それに接続する溝とみられる。暗灰褐色粘質土の堆積がみられた。古墳時代前期の溝と考えられる。

SD-3 調査区中央で東西方向に伸びる溝を検出した。49次調査でSD-1とした溝に接続すると考えられる。幅50～70cmほどの溝で、砂を含む灰褐色粘質土の堆積がみられた。

SD-4 SD-3に並行して東西方向に伸びる溝を検出した。49次調査でSD-2・3と呼んだ溝に接続するとみられる。東側では幅1m前後であるが、西隅では2.1mほどあり、49次調査地点では2つに分流するものと考えてよい。砂を含む灰黄褐色粘質土の堆積がみられた。



挿図22 第66次調査全体図

全体に遺構密度が希薄で、近代の新しい落ち込みなどが検出された。ただ、SD-1の西側では弥生時代の遺構とみられる赤褐色粘質土が堆積した柱穴・土坑が検出されており、同溝が遺跡の境界となっている様子が窺われた。

3 調査成果のまとめ

今回の調査では予想通り、大洲第3・5次調査で検出された大溝が確認された。ほぼ国家座標軸の方位に一致する方向で直線的に伸びていることが判明した。大溝周辺の遺構状況からも同溝が遺跡の境界として機能していることが窺われる。

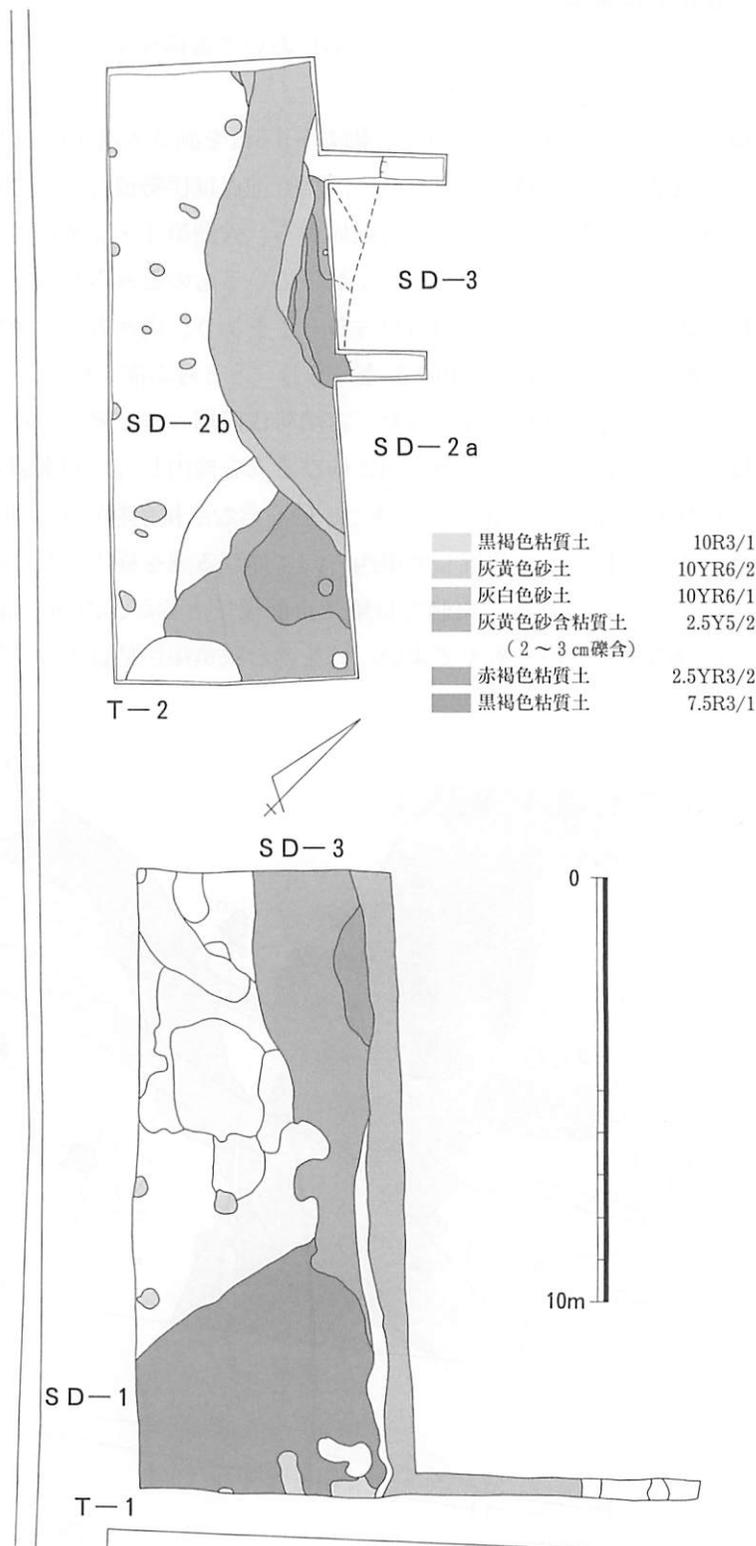
第9節 第68次調査の成果

1 調査に至る経過

第66次調査によって南北方向に伸びる大溝の南側延長部が確認された。これより10mほど南側の地点で古墳時代から奈良時代にかけての旧河道に切られるものと予想される。次に大溝の北側延長部を確認するために、阿村町在住の今井孝二氏の承諾を得て、阿村町284番地の水田地で確認調査を実施した。平成12年11月21日～同12月4日までの期間、約400㎡を対象に調査を行った。

2 検出した遺構

耕作土直下の黄色シルト上面で遺構検出を行った。平均遺構検出面は標高99.15mであった。**SD-1** T-1南隅において、大洲第3・5次地点から続くと予想される大溝を検出した。幅6m以上あり、黒褐色粘質土の堆積がみられた。北側はSD-2・3に切られていた。



挿図23 第68次調査全体図

SD-2 南東から北西方向に流れる溝を検出した。T-1 東隅では幅4.2m、T-2では1.5～2mの幅である。T-2でやや蛇行し、外側に同じく蛇行する溝の輪郭が確認された。灰白色細砂の堆積が見られ、水流のあったことがわかる。中・近世の溝とみられる。

SD-3 SD-2の下層において幅6.7mを測る溝を検出した。SD-2に重複して北西方向に伸びている。明るい灰褐色砂土の堆積がみられた。

SD-2・3は第67次調査でも確認されており、伊勢町の日吉神社東側付近まではほぼ直線的にのびていることが予想される。栗太郡地割りに沿っており、農業用水路であった可能性が高い。

T-2の西側では黒褐色粘質土の堆積した柱穴群が検出されており、弥生後期の遺構がこの周辺まで営まれていることが想定された。

3 調査成果のまとめ

本調査地点では予想通り、南北方向に伸びる大溝が検出された。この大溝は南北方向に150m以上にわたり直線的に伸びていることが判明した。伊勢遺跡の後背部の丘陵を直線的に切断し、伊勢遺跡の東側の境界として機能していたと見られる。伊勢遺跡中心部の方形区画内の建物や楼観とみられるSB-10の方位にも一致しており、遺跡構成の軸線が明確な南北方向を意識するものであったと考えられる。

第10節 大洲遺跡第6次調査の成果

1 調査に至る経過

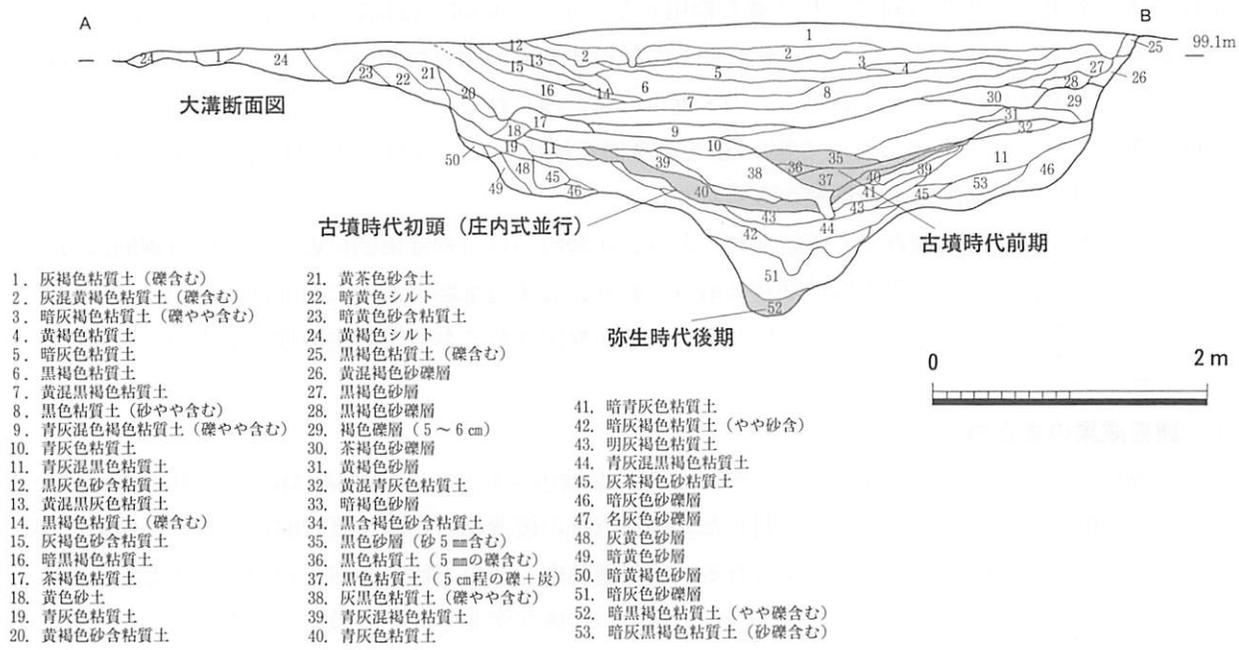
平成8年5月、民間の宅地造成に先立ち、阿村町字大洲138-1番地の水田地について発掘調査を行った。調査対象面積は342㎡で、平成8年5月10日に調査を開始し同7月3日に終了した。伊勢遺跡の東側を区切る大溝の存在が明らかになった調査であり、一連の確認調査にも深く係わるため、その概要について収録した。

2 検出した遺構

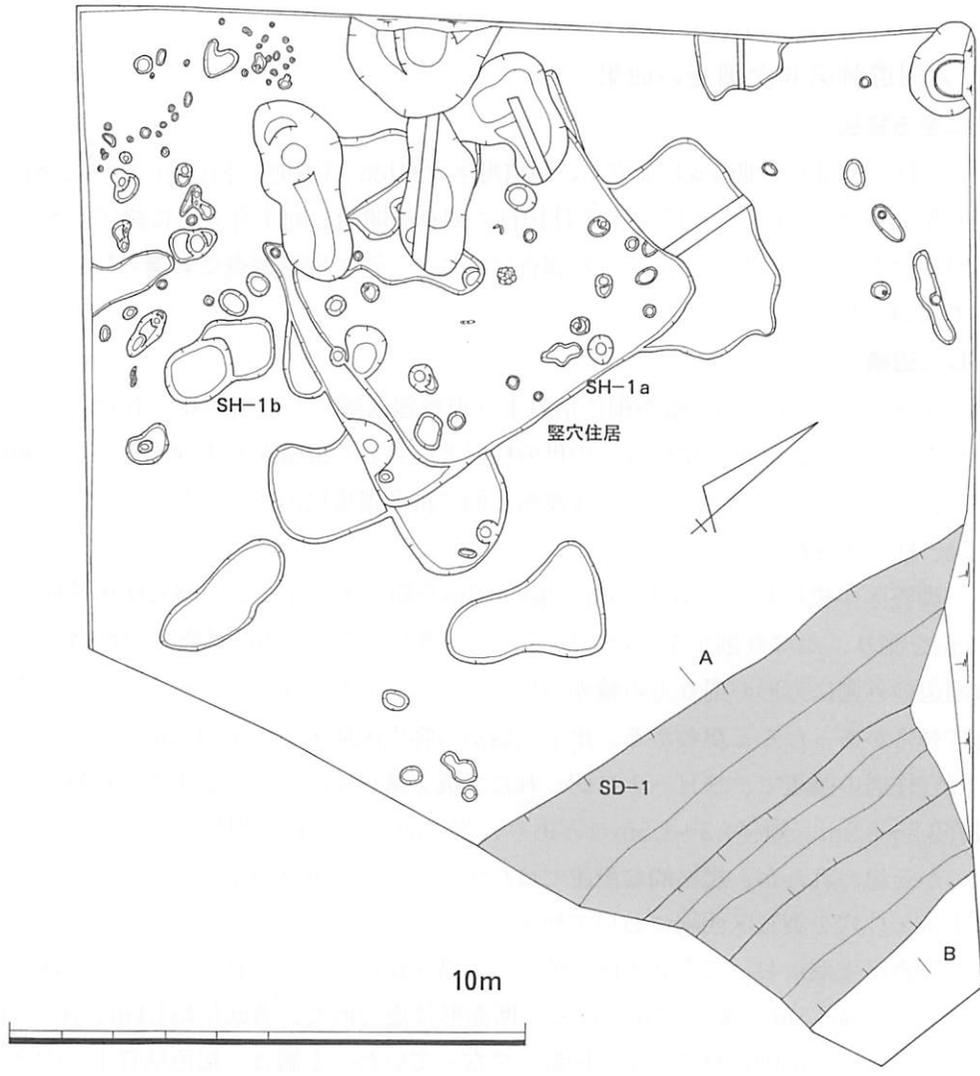
耕作土・床土直下に約10cmの暗茶褐色粘質土（遺物包含層）の堆積が見られた。その上面において遺構検出を行った所、近世の耕作痕、中世の柱穴とみられる遺構を若干検出した。上層の調査を終了したのち、遺物包含層を除去し灰白色砂礫層上面で再度遺構検出を行った。その結果、大溝、竪穴住居、土坑、柱穴等を検出した。

SH-1 調査区中央において南北5.3m、東西6.3mを測る方形プランの竪穴住居を検出した。残存壁高は5cmを測り、かなり削平をうけていることが窺われる。黒褐色粘質土の堆積がみられた。SH-1の南辺の外側に方形の掘り方の輪郭が見られ、床面にも2種類の支柱穴の配置が確認されたことから建て替えがあったことがわかる。出土土器から弥生後期末から庄内式併行期の竪穴住居と考えられる。竪穴住居の西辺で、SH-1に切られた土坑3基を検出した。暗黒褐色粘質土の堆積がみられた。長径2.5～3.5m、短径1.2～1.5mほどあり、深さ50～80cm程の規模であった。大型建物等の柱穴ではないかと思われたが、規格的な配置ではなかった。弥生後期中葉の遺構とみられる。同様な埋土をもつ土坑・柱穴を調査区西隅において検出しているが、建物等を復元するには至らなかった。

SD-1 調査区東隅において南北方向に伸びる大溝を検出した。SH-1と約6m離れた位置ではほぼ平行している。幅6.5m、深さ2.1mを測る。断面形は逆台形で、溝底に幅1.1m、深さ0.9～1.0mほどのV字形をした溝が掘削されていて2段掘りになっていた。上層は灰褐色粘質土、中層は黒褐色粘質土、下層は暗青灰色粘質土の堆積が見られた。中層の黒褐色粘質土からは古墳時代前期の古式土師器が出土しており、この時期まで地形的に窪んでいたことが想定される。下層及び最下層からまとまっ



- | | | |
|---------------------|----------------------|---------------------|
| 1. 灰褐色粘質土 (礫含む) | 21. 黄茶色砂含土 | 41. 暗青灰色粘質土 |
| 2. 灰混黄褐色粘質土 (礫含む) | 22. 暗黄色シルト | 42. 暗灰褐色粘質土 (やや砂含) |
| 3. 暗灰褐色粘質土 (礫やや含む) | 23. 暗黄色砂含粘質土 | 43. 明灰褐色粘質土 |
| 4. 黄褐色粘質土 | 24. 黄褐色シルト | 44. 青灰混黒褐色粘質土 |
| 5. 暗灰色粘質土 | 25. 黒褐色粘質土 (礫含む) | 45. 灰茶褐色砂粘質土 |
| 6. 黒褐色粘質土 | 26. 黄混褐色砂礫層 | 46. 暗灰色砂礫層 |
| 7. 黄混黒褐色粘質土 | 27. 黒褐色砂層 | 47. 名灰色砂礫層 |
| 8. 黒色粘質土 (砂やや含む) | 28. 黒褐色砂礫層 | 48. 灰黄色砂層 |
| 9. 青灰混褐色粘質土 (礫やや含む) | 29. 褐色礫層 (5~6 cm) | 49. 暗黄色砂層 |
| 10. 青灰色粘質土 | 30. 茶褐色砂礫層 | 50. 暗黄褐色砂層 |
| 11. 青灰混黒色粘質土 | 31. 黄褐色砂層 | 51. 暗灰色砂礫層 |
| 12. 黒灰色砂含粘質土 | 32. 黄混青灰色粘質土 | 52. 暗黒褐色粘質土 (やや礫含む) |
| 13. 黄混黒灰色粘質土 | 33. 暗褐色砂層 | 53. 暗灰黒褐色粘質土 (砂礫含む) |
| 14. 黒褐色粘質土 (礫含む) | 34. 黒含褐色砂含粘質土 | |
| 15. 灰褐色砂含粘質土 | 35. 黒色砂層 (砂5mm含む) | |
| 16. 暗黒褐色粘質土 | 36. 黒色粘質土 (5mmの礫含む) | |
| 17. 茶褐色粘質土 | 37. 黒色粘質土 (5cm程の礫+炭) | |
| 18. 黄色砂土 | 38. 灰黒色粘質土 (礫やや含む) | |
| 19. 青灰色粘質土 | 39. 青灰混褐色粘質土 | |
| 20. 黄褐色砂含粘質土 | 40. 青灰色粘質土 | |

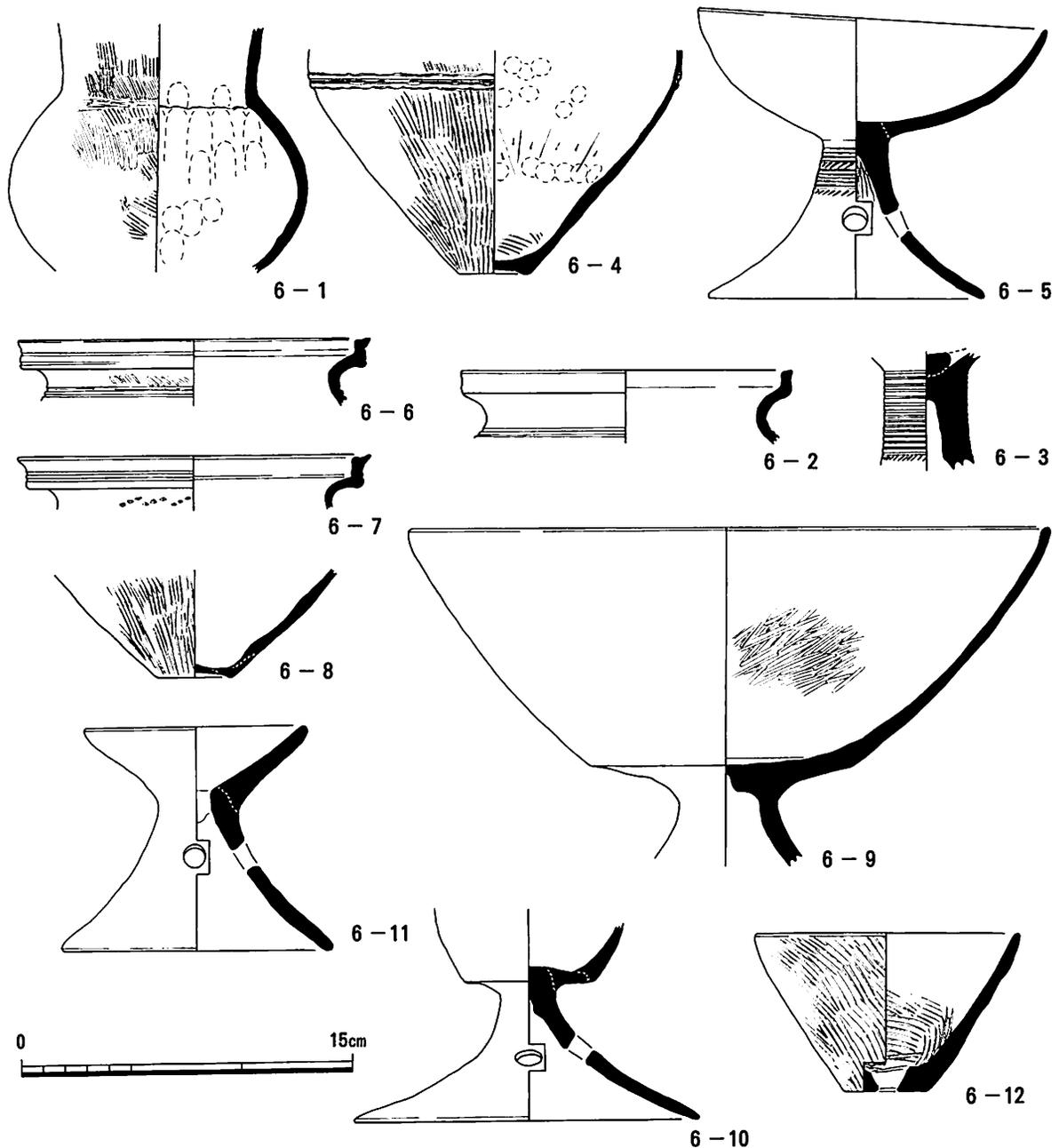


挿図24 大洲遺跡第6次調査全体図. SD-1断面図

て土器が出土している。

3 出土した遺物

SD-1 最下層から 6-1~5 の土器が出土した。6-1 は球形の体部から上方へ直線的に立ち上がる頸部をもつもので、長頸壺と見られる。外面に縦方向の刷毛を施し、内面は指ナデにより調整されている。6-2 は受口状口縁甕で、第 2 口縁部が直立し外端部へやや肥厚する。口縁部は摩滅しており不明であるが、肩部には櫛描直線文が施されている。6-3 は高坏脚中部で円筒状を呈している。脚中部上半には篋描直線文と刻目文が施されている。杯部との接合は挿入法によるが、杯部上方から円盤を充填した痕跡が認められる。6-4 は受口状口縁甕の底部で、小さな半弧状の上げ底をもつ。外面は粗い縦刷毛が施され、底部内面にも刷毛が残る。下腹部には貼付突帯が巡り、中央分割の沈線が施される。突帯の上には僅かながら櫛描波状文が観察される。6-5 は椀状高坏で、浅い椀状の杯



挿図25 大洲遺跡第6次調査出土遺物

部に緩やかに開く脚部が挿入されている。脚中部には直線文と刻目が交互に施されている。最下層から出土したこれらの土器は、後期の範疇に収まるものである。しかし、突帯には縦方向の刻目が省略されていること、6-1のように退化気味の長頸壺ないしは直口壺などの体部形状は後期末に通有であり、後期末にSD-1が埋没し始めたことが想定される。

SD-1下層からは6-6~12の土器が出土した。逆台形に掘られた溝の最下層からやや浮いた位置からまとまって遺物が出土している。6-6・7は受口状口縁甕で、6-6は第2口縁部が直立し端部は外方へややつまみだされている。口縁部には2条の篋描沈線文が加えられ、肩部には櫛描直線文がほどこされる。6-7は第2口縁部が直立し、端部が大きく外方へつまみ出されている。口縁部には2条の篋描沈線文、肩部には櫛描列点文が施される。最下層から出土した6-2と比較すると形態や文様素においてやや新しい要素が見られる。6-8は在地の甕底部で、立ち上がりが緩く縦刷毛とともに横刷毛が部分的に観察される。6-9は深い杯部をもつ高坏で、やや内湾気味に立ち上がる。内面に篋磨きが観察される。近江南部地域でも庄内併行期になると、後期以来の有段高坏から深い杯部をもつ高坏へ変換することがわかっている。6-10は小型の杯部をもつ高坏で低脚を特徴とする。6-9とともに東海地方との係わりのなかで出現する器種とみられる。6-11は小型の器台で、短く直線的に伸びる杯部には尖頭状にハの字状に開脚する脚部が付く。6-12は有孔鉢で逆台形を呈し、内外面ともに刷毛調整が加えられている。SD-1下層から出土した土器は、器種構成や個々の遺物の形態からみて最下層よりも明らかに新しい特徴が認められる。庄内式でもやや古い時期をあてることが妥当であろう。

中層からは布留式の甕などが出土しているが、SD-1断面をみると庄内併行期の堆積層を切り込む掘り方が観察され、古墳時代前期に再度掘削された様子が窺われる。

3 調査成果のまとめ

本調査によって伊勢遺跡の東限を区切る大溝（SD-1）の存在が明らかとなり、埋没時期が判明した。大溝の内側には竪穴住居や土坑・柱穴等が検出されており、ぎりぎりまで内側の空間が利用されていたことが窺われる。最下層から出土した土器から後期末には埋没が始まったと考えられるが、方形区画や楼観とみられるSB-10など南北方位を意識した建物軸に並行しており、後期中葉の遺構に係わりをもつ可能性もある。伊勢遺跡の開始期にあたる後期中葉にまでその掘削時期が遡ることも考えられる。

その後、下層には庄内併行期の遺物が廃棄されているが、大洲地区では庄内期の大型竪穴住居が幾つも検出されており、後期以降も集落が存続していることがわかっている。さらに古墳時代前期に再掘削されており、この時期までは小規模ながら集落があったことが予想される。

第3章 出土遺物観察表

次数	番号	出土地点	形式	法量 cm	形態的特徴	調整・文様	内外色調	備考
伊勢遺跡 56次調査	1	SK-1	甕胴部	-	受口状口縁甕の下部片。器壁が薄い。	縦方向の刷毛調整。櫛描波状文が施される。	内 淡橙色 5 YR 8 / 3 外 灰白色 5 YR 8 / 2	
	2	SH-1	磨製石斧	幅 3.6cm 厚 0.9cm	扁平片刃石斧。刃身は薄く、刃幅も小さい。刃先より3.5cm程で折れる。	全体に細かい研磨痕が見られる。	内 灰白色 10YR 7 / 1 外 灰白色 10YR 7 / 1	
	3	SH-1	玉未製品	幅 0.7cm 長さ 2.0cm	細い板状の石材。管玉の未製品とみられ2cm程の長さで折れる。	横・縦方向に穿溝切断の痕跡が観察される。	内 暗緑-ア 灰色 2.5GY 5 / 1 外 暗緑-ア 灰色 2.5GY 4 / 1	
伊勢遺跡 58次調査	1	SB-10 P-7	甕	口径(15.0cm)	絞りの甘い頸部からくの字状に短く外反する口縁部。端部に面をもつ。	頸部外面に粗い刷毛調整。	内 灰白色 10YR 8 / 2 外 灰白色 10YR 8 / 2	
伊勢遺跡 59次調査	1	SD-1	甕	口径(16.9cm)	直立する第1口縁部に小さく立ち上がる第2口縁が付く。	口縁部頸部に左上がりの列点文が施される。	内 浅黄橙色 10YR 8 / 4 外 浅黄橙色 10YR 8 / 3	
	2	T-4 P-1	土師皿	口径 15.7cm	浅い土師皿。端部は尖頭状に収める。	内外面に指頭痕。口縁部は横ナデ調整。	内 浅黄橙色 7.5YR 8 / 4 外 浅黄橙色 7.5YR 8 / 4	
伊勢遺跡 60次調査	1	SH-1	高坏脚部		絞られた脚中部をもち杯部との接合は挿入法に依る。	外面に縦方向のヘラ磨きが観察される。	内 浅橙色 10YR 8 / 4 外 にぶい 橙色 7.5YR 6 / 4	3方透かし。
	2	SH-2	甕口縁部	口径(12.0cm)	屈曲が甘く外上方に立ち上がる。	縦方向の列点文。	内 灰褐色 10YR 6 / 4 外 灰褐色 10YR 6 / 4	
	3	SH-2	甕肩部		受口状口縁甕の肩部。頸部内面に弱い稜線をもつ。	肩部に櫛描直線文。	内 浅黄橙色 10YR 8 / 4 外 浅黄橙色 10YR 8 / 4	
	4	SH-3	甕底部	底径(3.8cm)	やや突出するドーナツ状の上げ底。	外面に右上がりの螺旋印きが観察される。	内 褐灰色 2.5YR 8 / 2 外 灰褐色 7.5YR 5 / 2	外面に煤付着。
	5	SH-4	甕口縁部	口径(15.9cm)	立ち上がる。内斜する端面。	口縁部は無文。	内 灰黄褐色 10YR 6 / 2 外 灰黄褐色 10YR 4 / 2	
	6	SH-4	高坏坏部	-	杯身のやや深い有稜の高坏。	内外面に縦方向の磨き。	内 浅黄色 2.5YR 7 / 3 外 灰黄色 2.5YR 7 / 2	
	7	SH-4	高坏坏部		口縁部と杯身の間の稜線がやや甘い。	内外面とも不明。	内 にぶい黄橙色 10YR 7 / 3 外 にぶい黄橙色 10YR 7 / 4	
	8	SH-4	器台受部	口径(13.8cm)	中型品。口縁上下端を拡張し広い面を形成する。下端の拡兆部が剥離。	内外面とも不明。	内 にぶい黄橙色 10YR 7 / 3 外 にぶい 橙色 7.5YR 7 / 4	
	9	SH-6	壺口縁部	口径(13.0cm)	外上方に短く外反する口縁部をもつ。短い端面をもち上方に肥厚する。	外面に縦方向の刷毛調整。	内 にぶい 橙色 5 YR 7 / 4 外 にぶい 橙色 7.5YR 7 / 4	
	10	SK-1	甕底部	底径(5.3cm)	突出しない平底。	外面に目の細かい縦刷毛。	内 黄灰色 2.5YR 5 / 1 外 黒褐色 2.5YR 3 / 1	外面に黒斑。
	11	SK-1	壺底部	底径(7.0cm)	突出しない平底。	底部外面に磨削り。外面に細かい縦刷毛。	内 黄灰色 2.5YR 5 / 1 外 黄灰色 2.5YR 4 / 1	外面に黒斑。
	12	SK-1	甕底部	底径(5.4cm)	突出しない平底。	外面に縦刷毛。	内 灰色 7.5YR 4 / 1 外 灰色 7.5YR 4 / 1	
	13	SD-2	壺肩部		受口状口縁甕の肩部。	肩部に櫛描直線文。縦方向の細かい刷毛。	内 浅黄橙色 10YR 8 / 3 外 灰白色 2.5YR 8 / 2	
	14	SD-2	高坏脚中部		円筒状の脚中部。杯部との接合は挿入法による。	外面に櫛描直線文。	内 橙色 5 YR 7 / 6 外 浅黄橙色 7.5YR 8 / 4	
	15	SD-2	高坏脚中部		絞られた円筒状の脚中部。	内外面とも不明。	内 灰白色 2.5YR 8 / 2 外 浅黄橙色 10YR 8 / 3	
	16	SD-3	壺底部	底径(5.2cm)	やや突出するドーナツ状の底部		内 灰黄色 2.5YR 7 / 2 外 にぶい 橙色 10YR 7 / 4	
	17	T-2 拡張 平面	壺頸部	頸部径 (10.9cm)	絞られた頸部から上方に短く立ち上がる。	頸部内面に横刷毛。	内 黒色 5 YR 2 / 1 外 灰白色 2.5YR 7 / 1	

次数	番号	出土地点	形式	法量 cm	形態的特徴	調整・文様	内外色調	備考
	18	T-2 拡張平面	甕底部	底径(2.3cm)	小さな突出しない平底。	内外面とも不明。	内 灰白色 2.5YR 8 / 2 外 ぶい黄橙色 7.5YR 7 / 3	
	19	T-2 平面	甕底部	底径(5.2cm)	やや突出するドーナツ状の上げ底。	内外面とも不明。	内 灰白色 2.5YR 7 / 1 外 灰黄色 2.5YR 7 / 2	
伊勢道跡 61次調査	1	SH-2	甕口縁部	口径(17.8cm)	第2口縁部は直立し、端部は外方へつまみ出す。	口縁部は無文。内外面とも不明。	内 ぶい黄橙色 10YR 7 / 4 外 ぶい黄橙色 10YR 7 / 4	
	2	SH-4	甕口縁部	口径(14.8cm)	第1口縁部は直立する。端部は外方に脂厚する。	口縁部に列点文。	内 ぶい黄橙色 10YR 8 / 3 外 灰黄褐色 10YR 6 / 2	
	3	SH-4	甕底部	底径(3.3cm)	小さく突出しない平底。	外面に縦方向の粗い刷毛。	内 浅黄褐色 10YR 8 / 3 外 ぶい黄褐色 10YR 7 / 4	
	4	平面検出	石器未製品	直径 0.4cm 長さ 2.0cm	細かい円筒状の石材。管玉未製品か。	外面は縦方向の削り、上下端を細かく削り切断。	内 ぶい褐色 7.5YR 5 / 4 外 ぶい褐色 7.5YR 5 / 4	
伊勢道跡 64次調査	1	旧河道	甕口縁部	口径(14.8cm)	口縁部は短く立ち上がる。	右方向に流す左上がりの列点文を施す。	内 浅黄褐色 10YR 8 / 3 外 ぶい黄褐色 10YR 7 / 3	
	2	旧河道	甕口縁部	口径(15.8cm)	第2口縁部の立ち上がりが短く、外端部にやや肥厚。	口縁部に列点文。肩部に列点文。縦方向の刷毛。	内 ぶい黄褐色 10YR 7 / 3 外 ぶい橙色 7.5YR 7 / 4	
	3	旧河道	甕口縁部	口径(12.0cm)	第1・第2口縁部は短く上端部に面をもつ。	口縁部に波状文、肩部に直線文。頸部外面に縦刷毛。	内 ぶい黄褐色 10YR 7 / 3 外 ぶい黄褐色 10YR 7 / 3	
	4	旧河道	甕体部		縦方向の刻みを施す貼付け突帯。	外面に縦刷毛。	内 ぶい黄褐色 10YR 7 / 3 外 ぶい黄褐色 10YR 7 / 3	
	5	旧河道	須恵器皿	底径(7.8cm)	小さな台形の高台をもつ。	内外面とも横なで。	内 灰色 N 6 / 1 外 灰色 N 6 / 1	
	6	旧河道	土師皿	底径(8.8cm)	丸みをもつ高台をもつ。	内外面とも横なで。	内 灰白色 7.5YR 8 / 1 外 灰白色 7.5YR 8 / 1	
大洲道跡第 6次調査	1	大溝段下層	長頸壺	体部径(13.4cm)	球形の体部から上方へ立ち上がる頸部をもつ。やや小型の長頸壺とみられる。	外面に縦刷毛。頸部外面に横刷毛を加える。内面は指なで。	内 ぶい黄褐色 10YR 8 / 6 外 ぶい橙色 7.5YR 8 / 1	
	2	大溝段下層	甕口縁部	口径(14.8cm)	頸部の立ち上がりが長く、第2口縁部が直立する。	頸部に横線直線文。口縁部は摩滅のため不明。	内 灰白色 2.5YR 7 / 1 外 淡黄色 2.5YR 8 / 3	
	3	大溝段下層	高坏脚部		円筒状の脚中部。杯部との接合は挿入法による。	内面にしぼり痕。横線直線文、刻目文を施す。	内 橙色 5 YR 7 / 6 外 橙色 5 YR 7 / 6	
	4	大溝段下層	甕体部	底径(3.1cm)	半弧状の上げ底。器壁を薄く仕上げる。	外面は縦刷毛。内面底に刷毛、指なで。貼付突帯を施し、中央分割の凹線が見られる。	内 浅黄色 2.5Y 7 / 6 外 灰黄色 2.5Y 6 / 2	外面に黒斑。
	5	大溝段下層	高坏	口径 15.6cm 器高 12.6cm 低径 12.4cm	浅い椀状の高坏。円錐状に開脚する。挿入法による。	脚中部に横線直線文、刻目文を交互に施す。	内 橙色 2.5YR 6 / 6 外 橙色 2.5YR 6 / 6	三方透かし。
	6	大溝段下層	甕口縁部	口径(15.9cm)	短く外反する第1口縁部から直立する第2口縁部が付く。端部はややつまみ出す。	頸部に外面に縦刷毛。口縁部に2条の沈線文、頸部に横線直線文を施す。	内 灰褐色 10YR 6 / 2 外 灰褐色 10YR 6 / 2	
	7	大溝下層	甕口縁部	口径(15.9cm)	直立する第2口縁部。端部は外方に大きくつまみ出す。	口縁部に2条の沈線文。頸部に列点文を施す。	内 ぶい黄褐色 10YR 7 / 2 外 ぶい黄褐色 10YR 7 / 2	
	8	大溝下層	甕底部	底径(3.4cm)	半弧状の上げ底。内面中央で肥厚する。	外面に縦刷毛。	内 灰白色 2.5YR 8 / 2 外 灰褐色 10YR 5 / 1	
	9	大溝下層	高坏坏部	口径(28.3cm)	深い坏部をもち。内椀気味に立ち上がる。	内面に磨き。	内 ぶい黄褐色 10YR 7 / 4 外 浅黄褐色 7.5YR 8 / 3	外面に黒斑。
	10	大溝下層	高坏脚部	脚径(15.5cm)	小さな坏部に低脚の脚部が付く。挿入法による。	摩滅のため不明。	内 橙色 7.5YR 7 / 6 外 橙色 5 YR 7 / 6	三方透かし。
	11	大溝下層	器台	口径 10.0cm 脚径 12.1cm	小さな坏部に八の字状の脚部がつく。	摩滅のため不明。	内 ぶい橙色 7.5YR 7 / 4 外 浅黄褐色 7.5YR 8 / 4	三方透かし。
	12	大溝下層	鉢	口径 11.8cm 底径 3.8cm	逆台形状の鉢。底部に孔をもつ。	内外面ともに粗い刷毛調整。	内 橙色 7.5YR 7 / 6 外 浅黄褐色 10YR 8 / 4	

第4章 調査成果のまとめ 大型建物の変遷と区画溝

平成11・12年度の確認調査によっていくつかの事実関係が明らかとなった。①方形区画内の大型建物SB-1に先行して1間×2間のSB-11が存在したことが判明した。②SB-10に先行して2間×2間の大型建物SB-13が存在することが明らかになった。その結果、伊勢遺跡中心部に存在する方形区画および楼観がともに2時期にわたり同一地点で建て替えられており、時期的にも連動していることが想定された。いずれも先行建物より大型化している。③方形区画から約150m北側には東西方向に伸びる旧河道があり、それよりも北側は地形的にも低くなっていくことから伊勢遺跡の北東側の境界となる蓋然性が高い。④遺跡東側には幅5～7mに及ぶ南北方向にのびる大溝が160m以上にわたってのびていることが判明した。この大溝は伊勢遺跡の東を限る大規模な区画施設とみられる。今回の報告分の調査では伊勢遺跡内・外の区画施設の様相が若干明らかになったことから、大型建物の変遷と伊勢遺跡内の区画について検討しまとめとしたい。

1. 伊勢遺跡東部の大溝

伊勢遺跡は東西方向に伸びる舌状の丘陵部に広がる遺跡であるが、その後背部にあたる大洲地区で南北方向の大溝を掘削し切断している。その規模は幅約5～7m、深さ2mを測る。その方向は国家座標が示す南北方位に乗っており、中心部の楼観や方形区画に並行するものである。66・68次調査によって150m以上にわたって直線的にのびていることが明らかとなったが、伊勢遺跡形成の計画軸の存在を予想させる。中心部の方形区画および大型建物についても南北方向の配置が意識されており、一般の集落には見られない規格性をもつ特殊な遺跡とみられる。

南北方向の溝は28次調査で遺跡西端においても検出されている。幅約3m、深さ0.7m程の溝であるが、溝の西側では方形周溝墓群が造営されていた。明らかに居住域と墓域を区画する目的で掘削された溝とみてよい。同溝は約60m南北方向に伸び、90°屈曲し40m以上にわたり西方に伸びている。L字状の溝で、内部に墓域を形成するものである。伊勢遺跡の東西端において正しく南北方向に大溝が並行し伸びており、計画軸の存在が窺われる。

大洲遺跡6次調査で大溝最下層から出土した土器から、後期末に埋没したことが明らかになった。下層からは古墳時代初頭、中層では古墳時代前期の土器が出土しており、長期にわたる埋没過程が推測されるが、断面観察からすると再掘削の可能性が高い。これまでの調査成果で、後期末において大型建物群は廃絶するが、大型の竪穴住居を含む集落が存続することが判明しており、再利用された可能性が高い。古墳時代前期まで竪穴住居を中心に居住空間が営まれていたことと整合する。

弥生後期から古墳時代前期において大溝の西側では遺構が多数営まれているが、外側にあたる東側では殆ど居住痕跡が認められないことから、居住空間を区画する施設として機能していたと考えられる。この大溝から東方に向かって幅3m程のV字形の大溝がやや円弧を描いて伸びている。出土土器から弥生後期の溝と推定される。伊勢遺跡の最高所にあたるが、内部には殆ど遺構が検出されていない。溝の北東側では大型の井戸跡がみられるが、大溝の東側にさらに別の溝によって区画された空間の存在が予想される。

2. 方形区画の変遷

伊勢遺跡中心部の方形区画内では2時期にわたって大型建物が建て替えられていたことが判明した。一つはSB-1に先行してSB-11が営まれていたこと、そして楼観と想定されるSB-10に先行してSB-13が存在したことである。いずれも、同一地点で建て替えられており大型化する点で共通している。SB-11とSB-1の建物軸には約5°の違いがみられ、SB-11はSB-3に近い。当初

はSB-3が中心的な建物で、1間×2間のSB-11がそれに付随する建物であったことも想定される。次の段階でSB-11にかわり、SB-1を中心にSB-2を脇殿として造営し、SB-3を取り込んで方形区画を完成させたことが考えられる。内側の柵は西側では等間隔にピットが巡るが、56次地点では不鮮明になる。外側についてはSB-1・2の西側延長上に入り口を設け、2重の柵で強化するほか北側の東西列も存在するとみられる。しかし、その延長上にあたる58次調査地点では明確な遺構が見られず、この地点にまで伸びていないことが予想される。方形区画の柵域は楼観までは取り込んでいない蓋然性が高い。中心部の大型建物群は2つの異なった区画に配置されていたと思われる。方形区画内の建て替えにあわせて、SB-13・10の建て替えが行われたのであろう。

後期新段階になるとこれらの大型建物は廃絶し、この地域には多数の竪穴住居が営まれている。なかには一辺9mを越える大型竪穴住居も数多くみられる。これらの大型竪穴住居の方位には大きくわけて2つの方向がみられる。一つは独立棟持柱付き大型建物SB-4・5に並行する一群と、現在の栗太郡条里に並行する一群の竪穴住居である。18次調査の成果からすると前者のほうが後期新段階でもやや古いものと思われる。栗太郡条里に並行する竪穴住居群に57・59次調査で確認された区画溝が対応するものとみられる。コの字状に伸びる溝はこれまでの調査成果によって南北95m、東西105mほどの範囲を区画していると推定される。区画溝は後期末には埋没しており、後期新段階の溝によって区画された方形区画と考えられる。

伊勢遺跡中心部における方形区画は、後期中段階に2時期の建て替えがあり、後期新段階には竪穴住居群を溝によって方形の区画が営まれるという変遷が想定される。伊勢遺跡中心部から大洲地区にかけて古墳時代初頭の大型の竪穴住居群が営まれているが、明確な区画施設はみあたらない。

3. 方形区画の南側の区画溝

方形区画の南西側には南北方向にのびる溝が存在する。幅約3m、深さ80cmほどの浅い椀状の断面形をした溝で、埋土から水流があったことが判明している。28次調査ではこの溝から取水し、北方向に伸びる導水施設とみられる遺構が確認されている。独立棟持柱付き大型建物SB-4の西側約60mの地点にあたる。この溝施設は方形区画の方位に並行している。この溝に並行して方形区画の南側前面にクランク状に屈曲する溝が掘削されている。

東西方向に75m以上にわたり直線的に伸びた後、約105° 広角に屈曲し南北方向に92m程直線的に伸びる。更に、弥生時代の川の直前で約80° 鋭角に屈折し、85m以上直線的に伸びている。このクランク状の溝は概ね方形区画の南側ではそれと並行しており、方形区画の南辺を区切る施設として機能していた可能性がある。さらに、東西方向に伸びる水路と区画溝によってSB-4・5の西側約100mの地点に台形状の方形区画を形成している。この区画内ではまだ明確な遺構は確認されていないが、今後注意を払う必要がある。

後期中～新段階にかけての遺構とみられるが、遺跡内には溝によって方形に区画された空間が複数存在することがわかる。

4. 伊勢遺跡の区画方位とその変遷

伊勢遺跡は弥生時代後期中段階に出現し、後期末以降急速に衰退していくものと見られてきた。しかし、古墳時代初頭にあたる庄内式併行期にも大型竪穴住居を含む集落が残存し、古墳時代前期まで小規模ながら集落が営まれていることがわかってきた。しかし、計画的な大型建物の造営と配置については後期中～末にかけてみられる伊勢遺跡の特徴であり、それ以降には一般集落化しているものと思われる。以下、弥生後期中～新段階にかけて伊勢遺跡の大型建物及び区画方位の変遷を整理し、まとめたい。

第1段階（後期中—1、V—3）

伊勢遺跡の出現期。遺跡中心部にはSB-3、11が造営され、先行する楼観SB-13がこれに対応し存在したものとみられる。建物の方位はN-18°-Eで若干次の方形区画よりも東へ振っている。SB-13は座標軸の北方位に乗る。この時期、大洲地区には柱穴が多数掘られており、壁立式建物が何度も建て替えられていたことが想定される。遺跡西部には第4次調査で発見された五角形住居など、竪穴住居群が営まれている。

第2段階（後期中—2 V—4）

SB-1・2を中心に方形区画が完成する。SB-3もこの段階にそれに取り込まれている可能性がある。建物方位はN-13°-Eでやや北へ修正している。これに対応してSB-10が造営されたとみられる。SB-10は座標軸の北方位に乗る。いずれも建物規模が大型化する。大洲地区には独立棟持柱付き大型建物群が造営されている。この段階には大洲地区の南北方向の大溝は掘削されていたとみられる。また、遺跡西部の竪穴住居の数も増加し、区画溝を伴う方形周溝墓群も造営され始めていたとみられる。

第3段階（後期新—1 V—5）

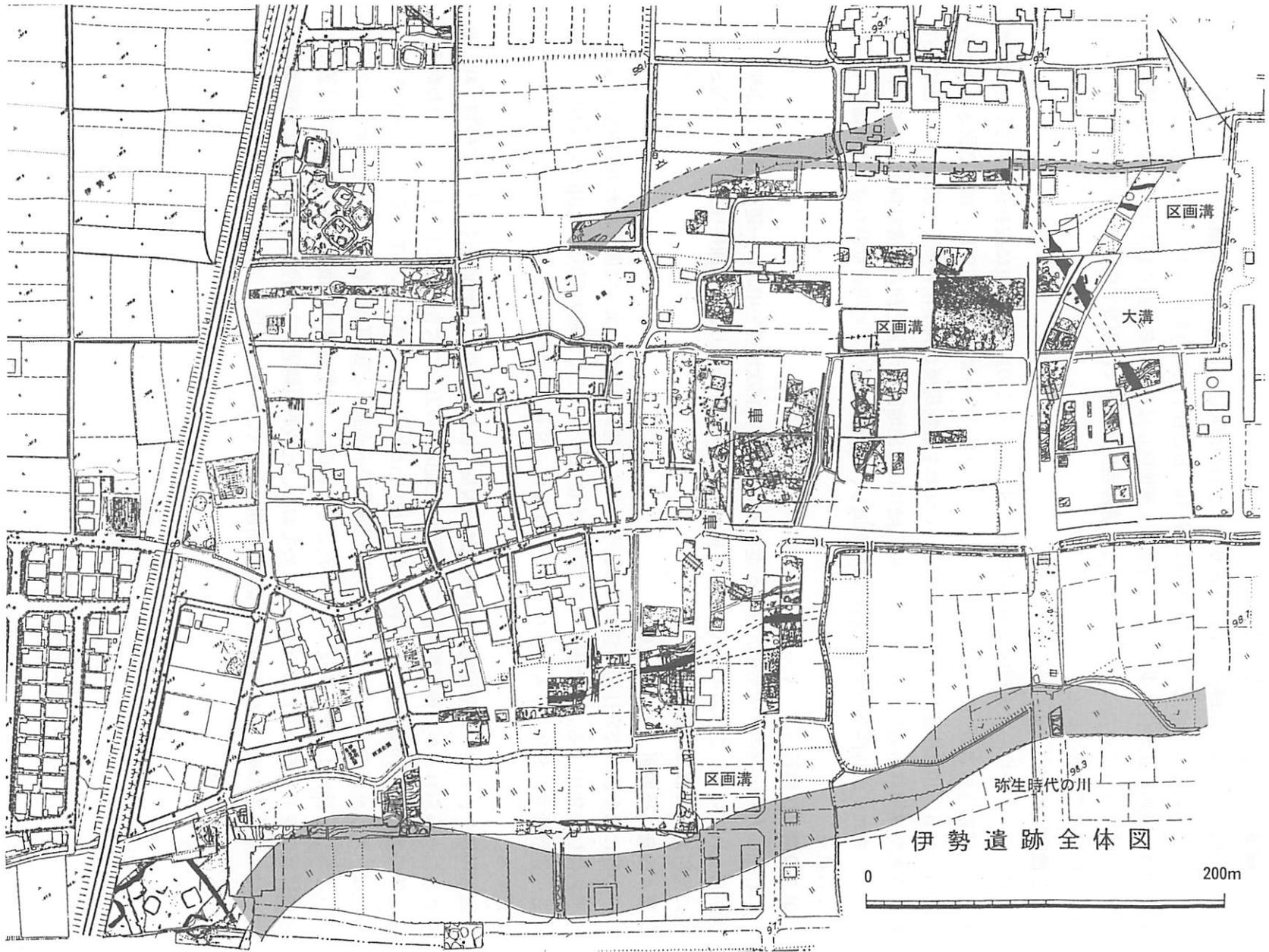
中心部の方形区画内に大型竪穴住居が進出する。第2・18次地点を中心に一辺9mにおよぶ竪穴住居が営まれている。これらの竪穴住居の方位はN-55~60°-Eを示し、独立棟持柱付き大型建物SB-5の梁行方向に概ね一致する。

第4段階（後期新—2 V—6）

中心部には多数の竪穴住居が営まれるようになる。特に区画溝によって囲まれた方形区画内には大型竪穴住居が集中する。区画溝、竪穴住居の方位はN-40°-Eで、概ね現況の水田区画の方向に一致する。建物軸ではSB-6も同様な方位を示すほか、SB-4西方の台形状の方形区画もこの方位に対応する。

以上の通り、大溝や大型建物群は伊勢遺跡出現期の後期中段階には南北方位によって規制され、造営されたとみられるが、後期新段階には現況の土地区画の方位へ大きく変化していることがわかる。中心部の方形区画が機能していた時期とそれ以降では異なった計画軸によっていることが想定される。

とはいえ、後期末に埋没する大溝や方形周溝墓の区画溝など後期新段階においても南北方位が踏襲されており、後にまで影響を及ぼしていたことがわかる。伊勢遺跡の特徴である大型建物群は後期中段階に盛期をもち新段階には衰退しはじめており、比較的短期間にその役割を終えたことが推測されるのである。その後、弥生末から古墳時代前期にかけて大型竪穴住居を含む竪穴からなる集落へ移行することがわかる。



挿図26 伊勢遺跡内の区画施設

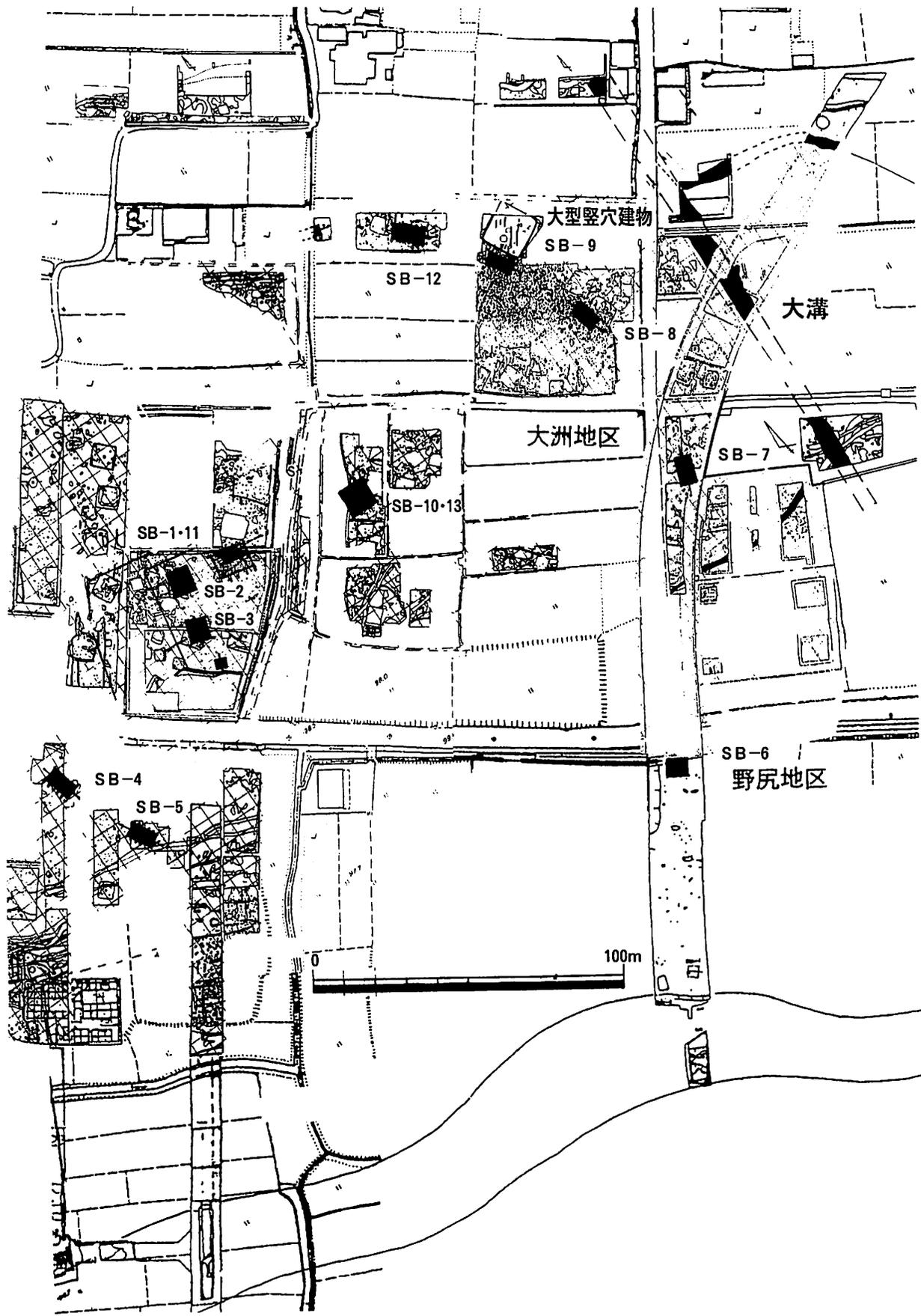
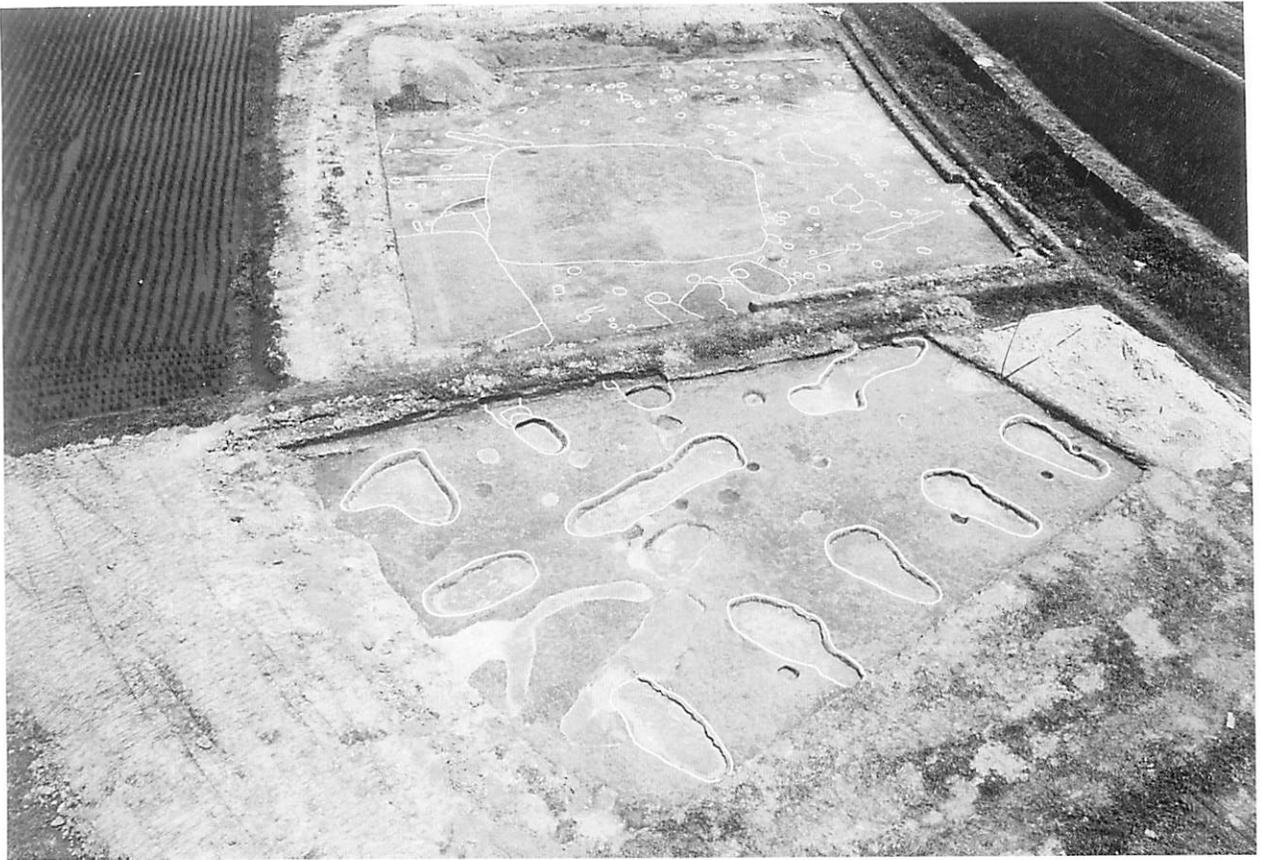


插图27 伊勢遺跡東半部全体図

版 图



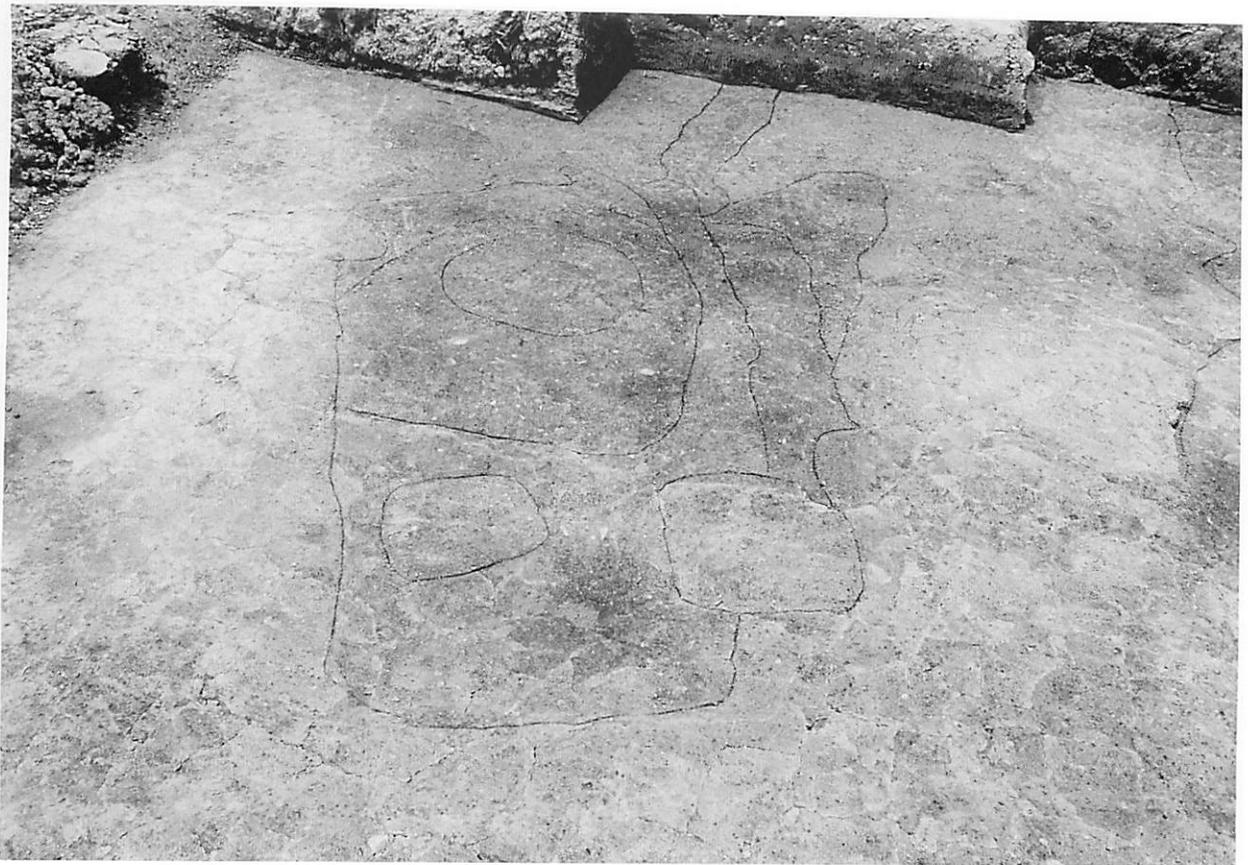
56次調査区全景（西から）



56次調査区全景（南西から）



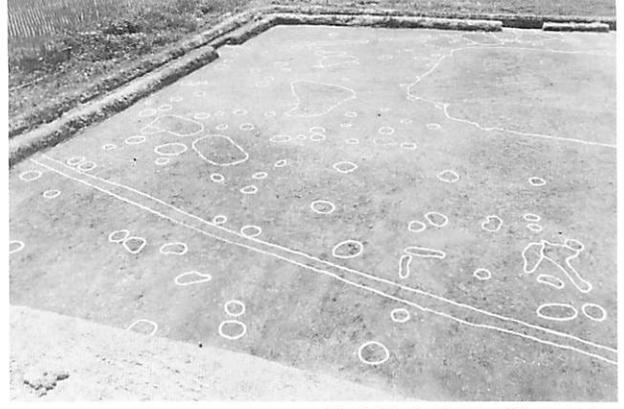
56次 SB-1 P-8 検出状況 (南から)



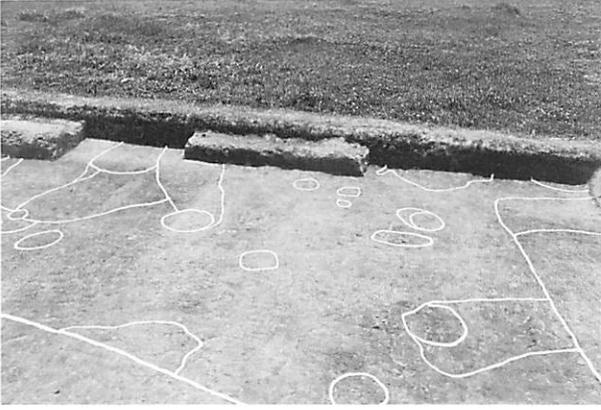
56次 SB-1 P-13 検出状況 (北から)



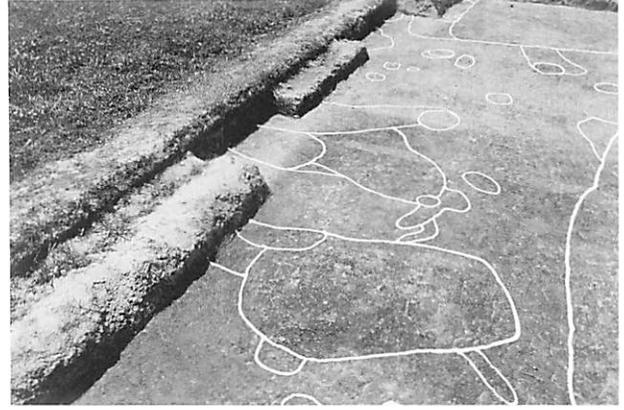
T-1 全景 (北東から)



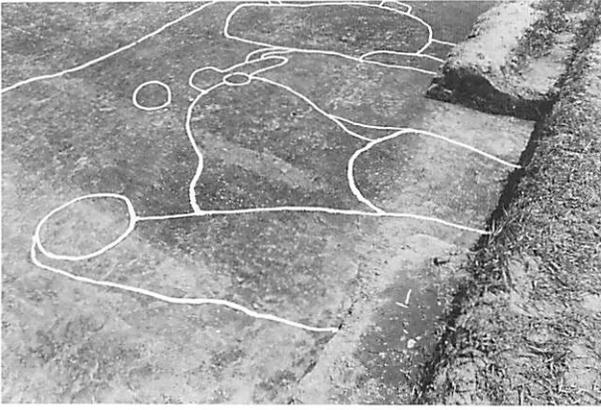
T-1 柱穴検出状況 (北から)



SB-1 柱穴検出状況 (北から)



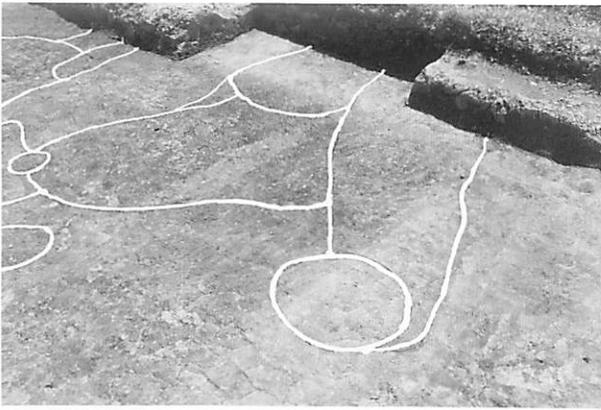
SB-1 柱穴検出状況 (東から)



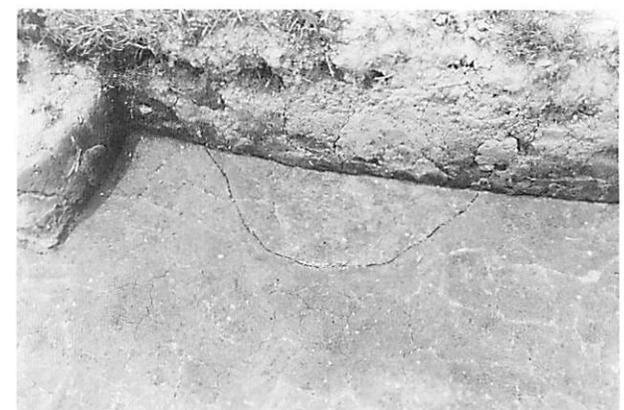
SB-1 柱穴検出状況 (西から)



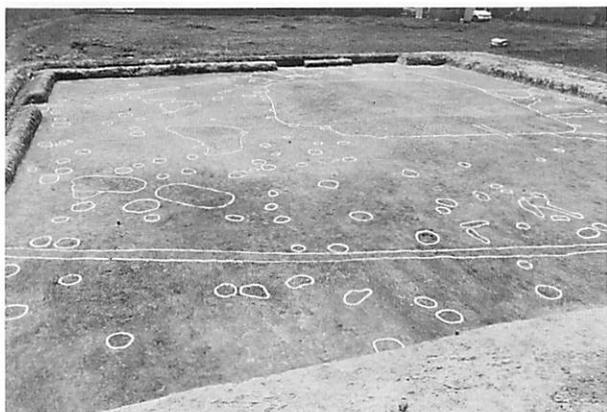
SB-1 P-13検出状況 (北から)



SB-1 P-12検出状況 (北から)



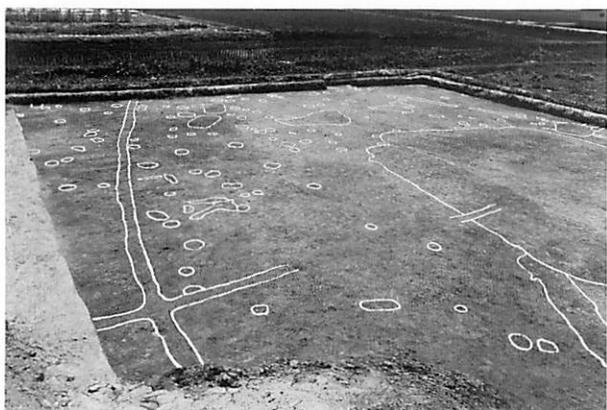
SB-1 P-9 検出状況 (北から)



T-1 全景 (北東から)



T-1 SD-1 (東から)



T-1 全景 (西から)



T-1 SH-1 (北西から)



T-2 全景 (南から)



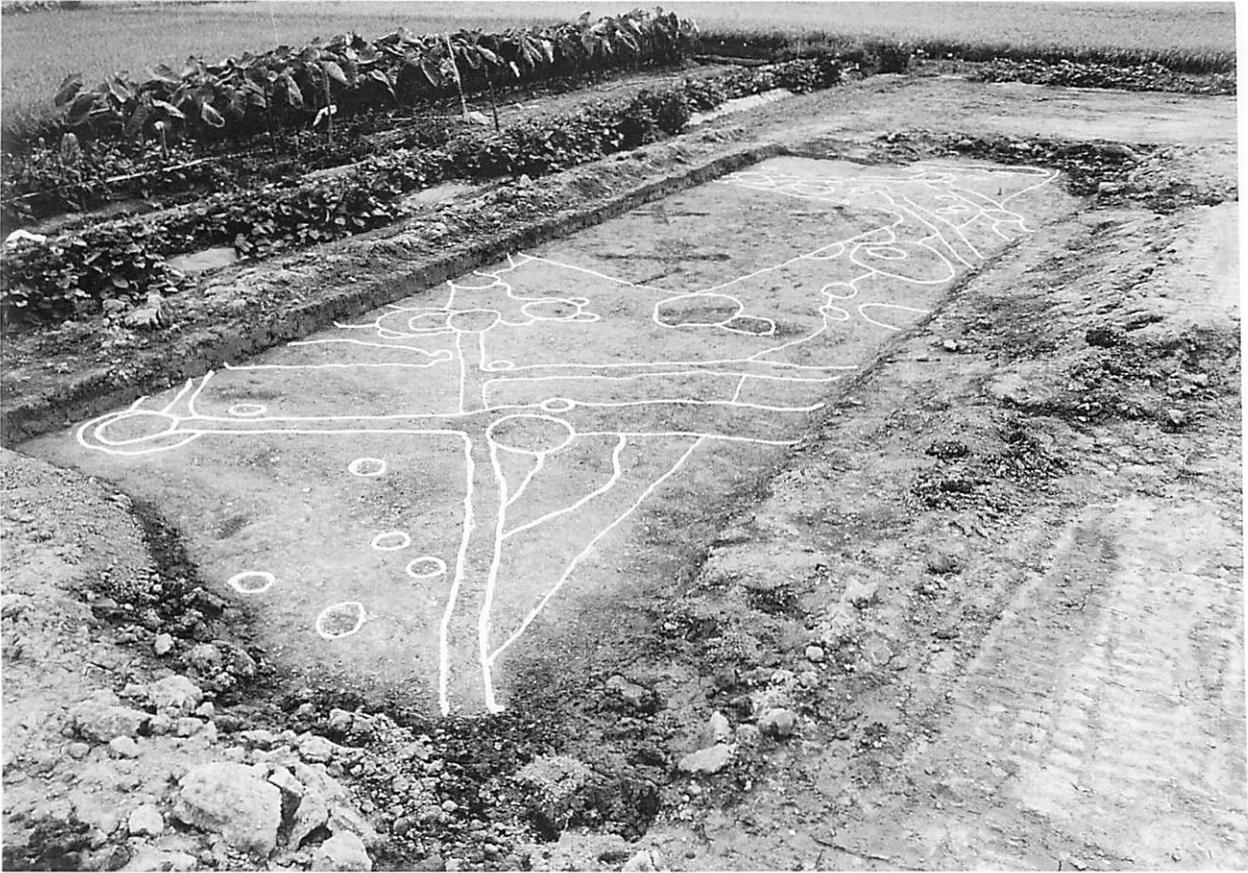
T-2 柱穴群検出状況



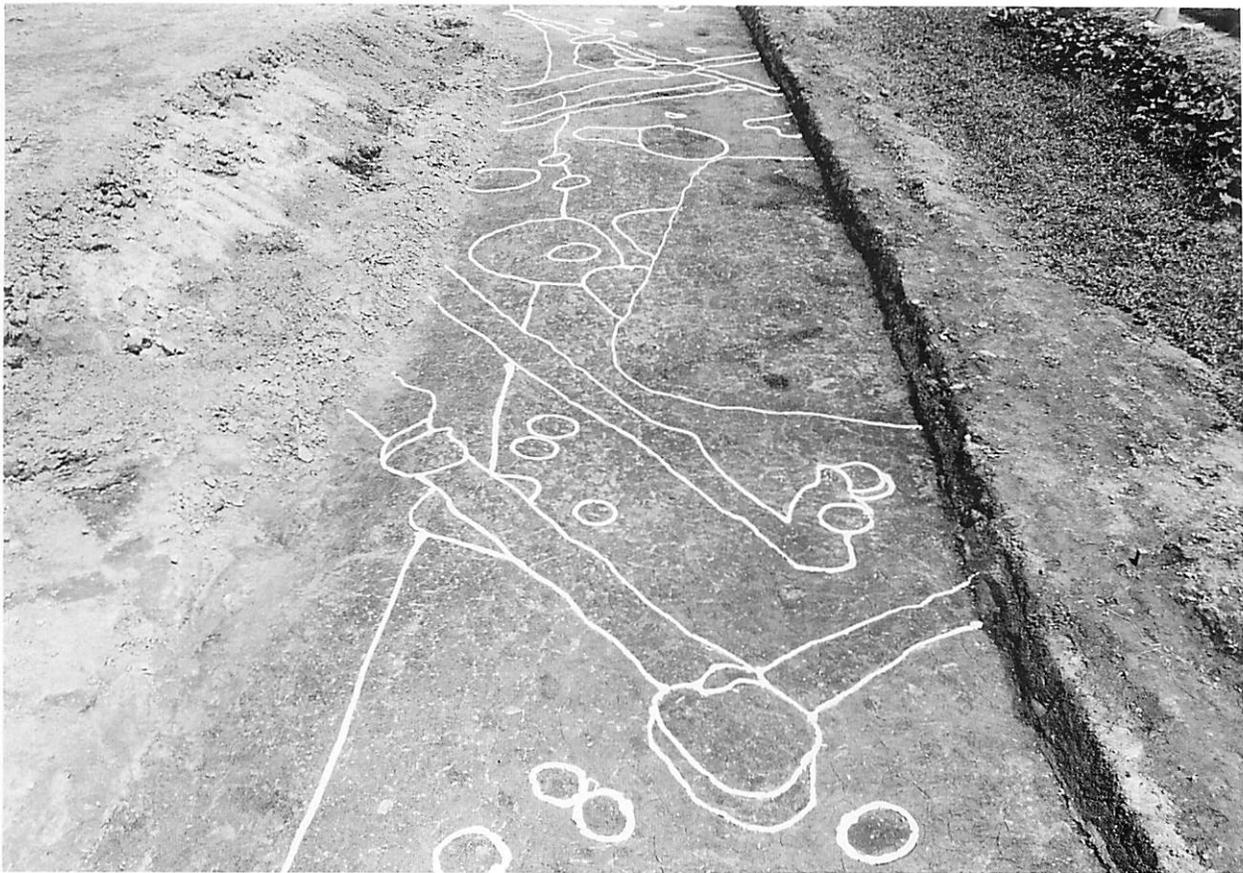
T-2 全景 (北西から)



T-2 全景 (南西から)



58次調査 SB-10検出状況（北から）



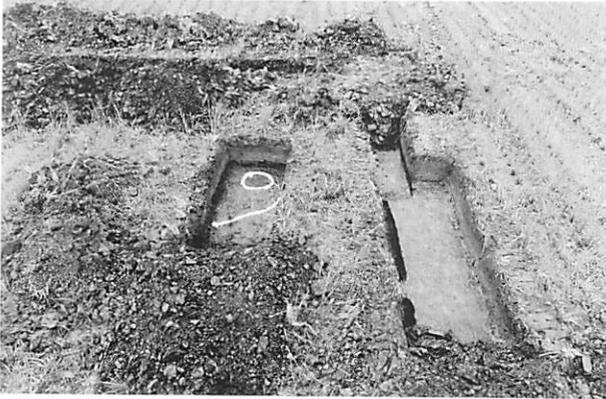
58次調査 SB-10検出状況（南東から）



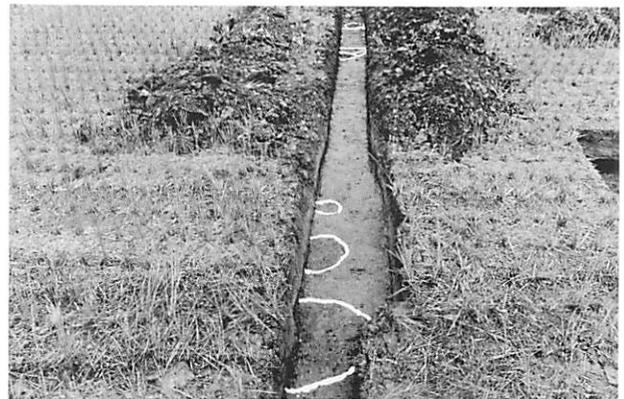
58次調査 S B-10検出状況（東から）



58次調査 S B-10検出状況（南から）



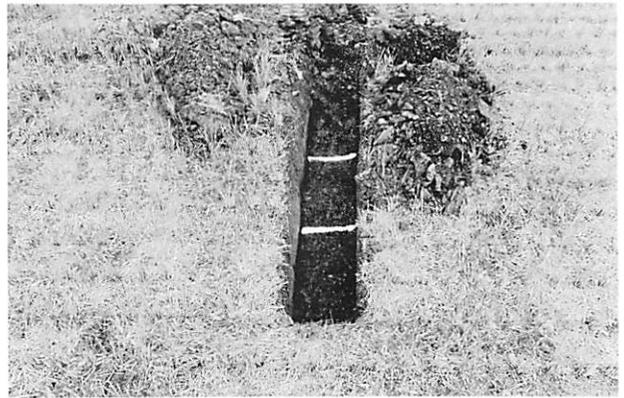
SD-1 検出状況 (東から)



柱穴検出状況 (南西から)



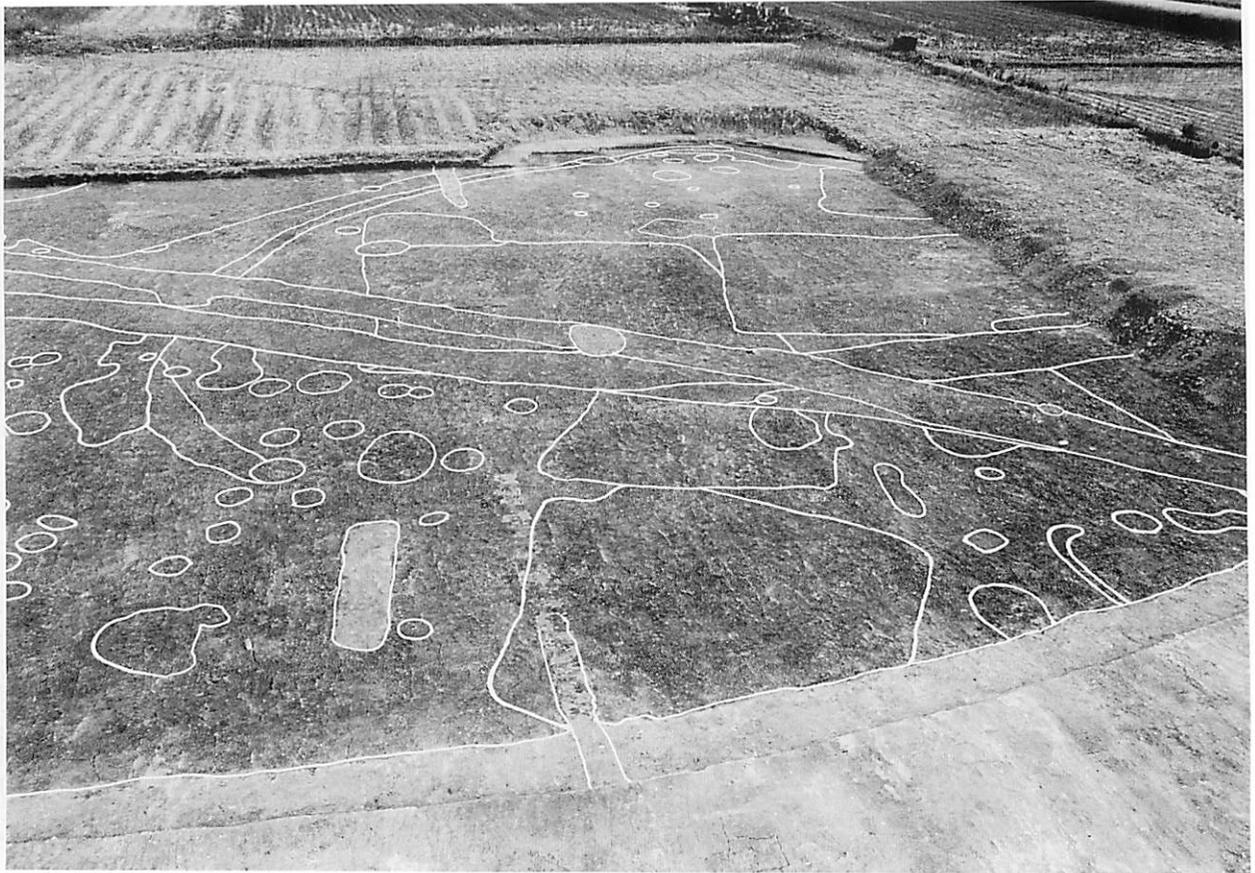
柱穴検出状況 (北東から)



SD-1 検出状況 (北西から)



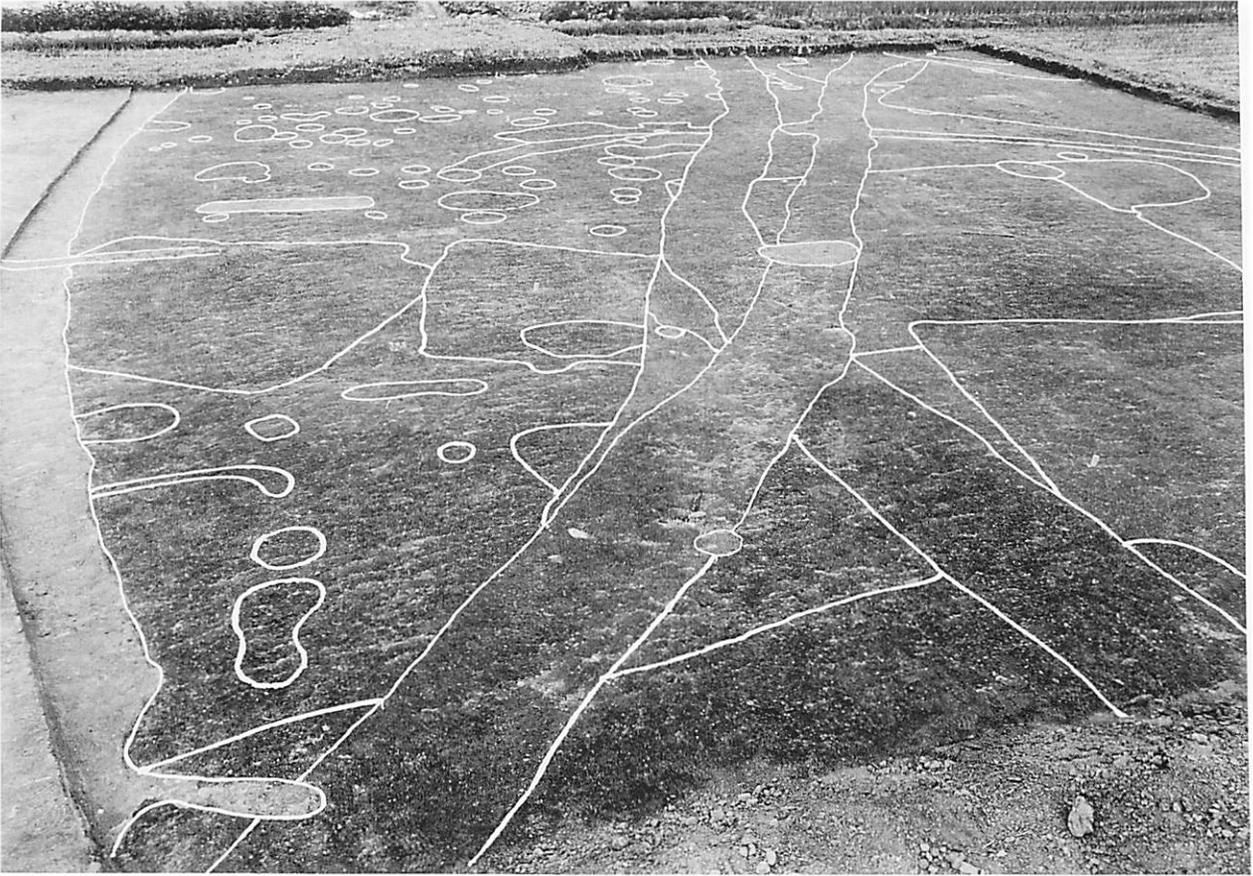
59 次調査 SD-1 検出状況



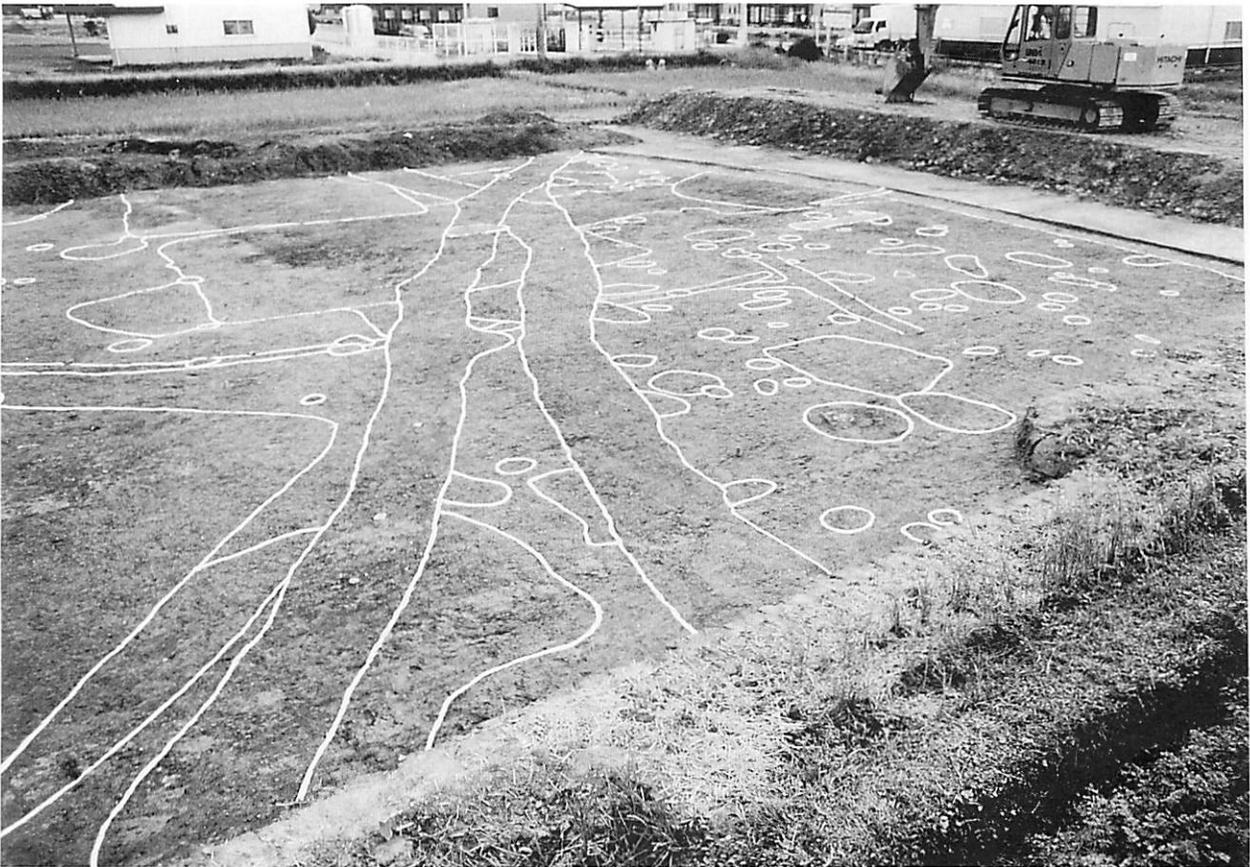
60次 T-1 全景 (北西から)



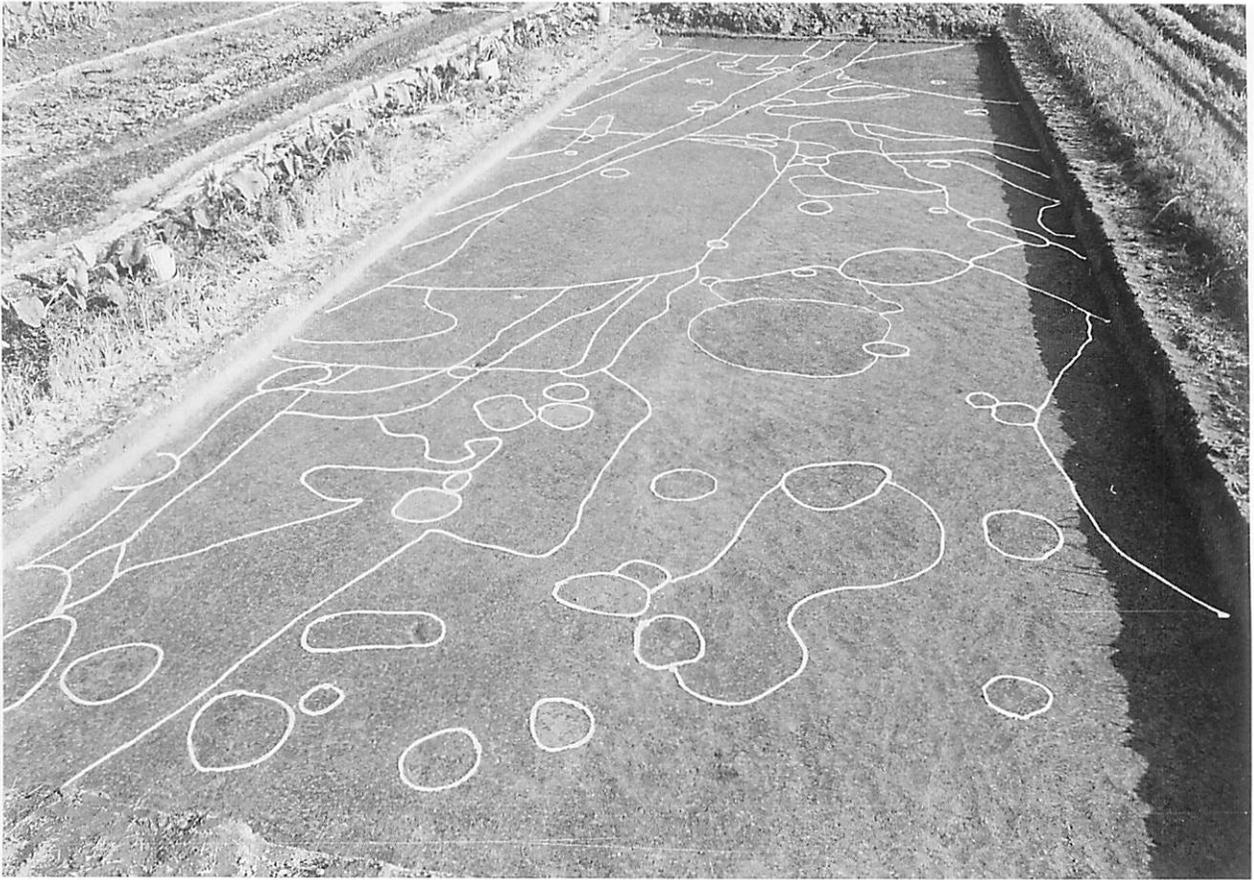
60次 T-1 全景 (南東から)



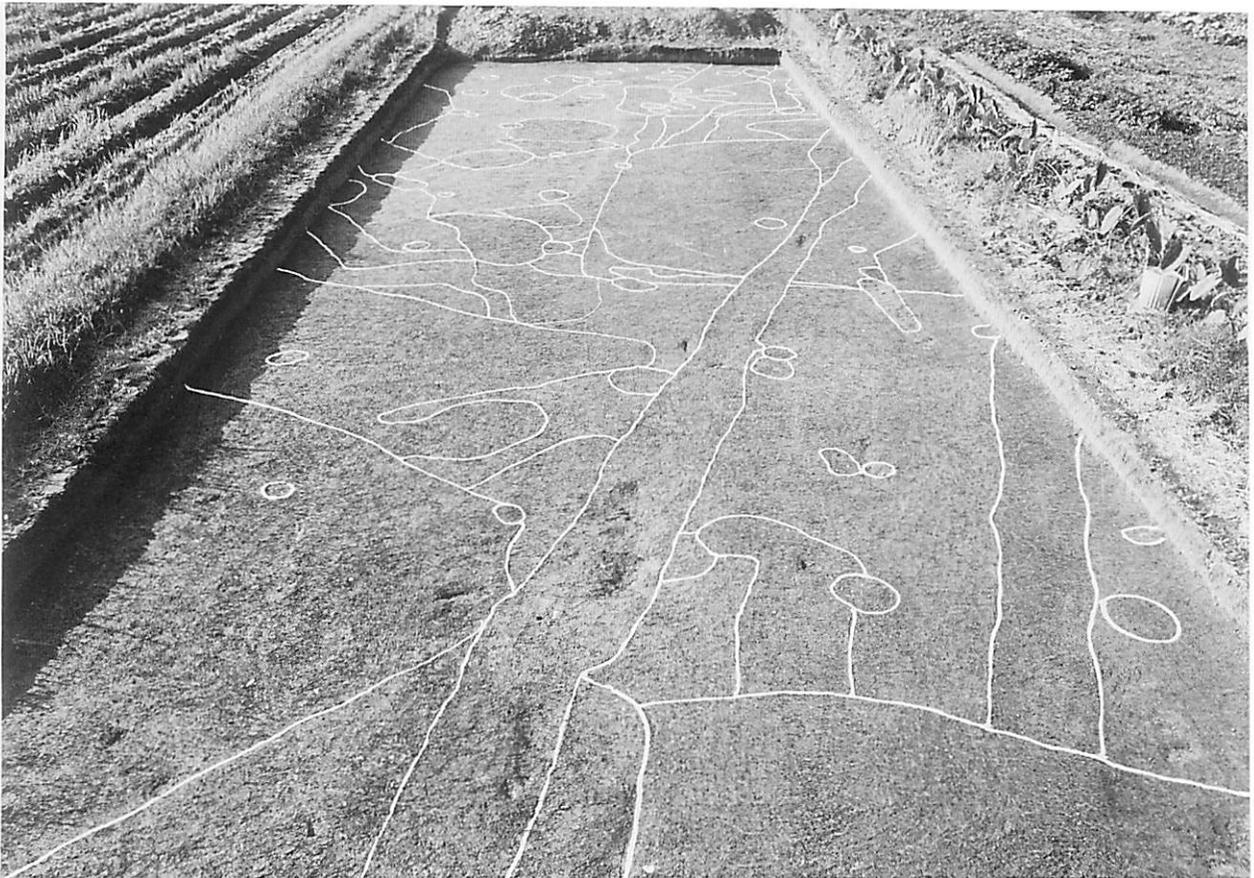
60次 T-1 全景 (西から)



60次 T-1 全景 (東から)



60次T-3全景(北西から)



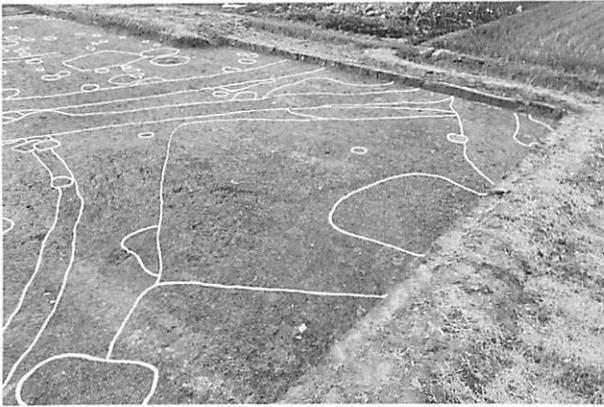
60次T-3全景(南東から)



T-1 全景 (北から)



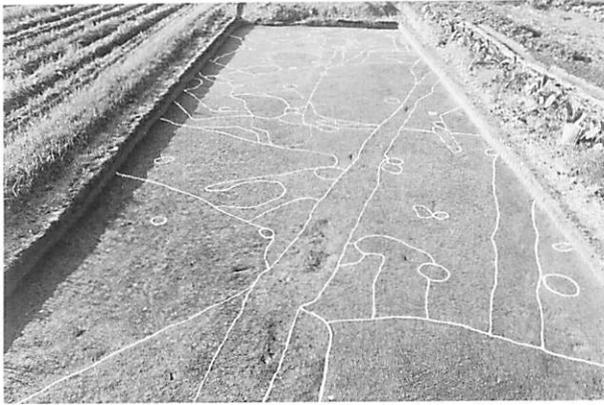
T-1 全景 (南西から)



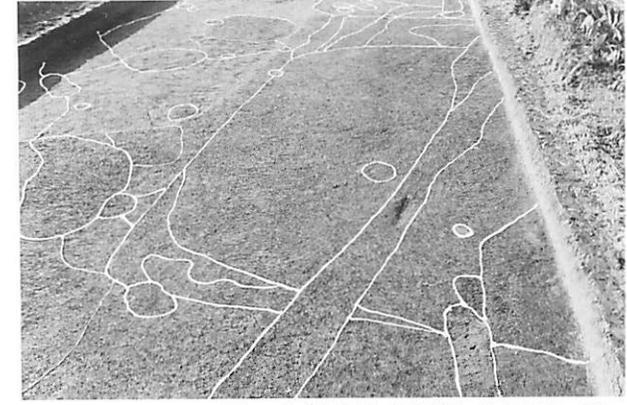
T-1 竪穴検出状況 (南から)



T-3 全景 (南東から)



T-3 全景 (南東から)



T-3 竪穴検出状況 (南東から)



T-2 検出状況 (北から)



T-2 SD-1 検出状況 (東から)



遺構検出状況（東から）



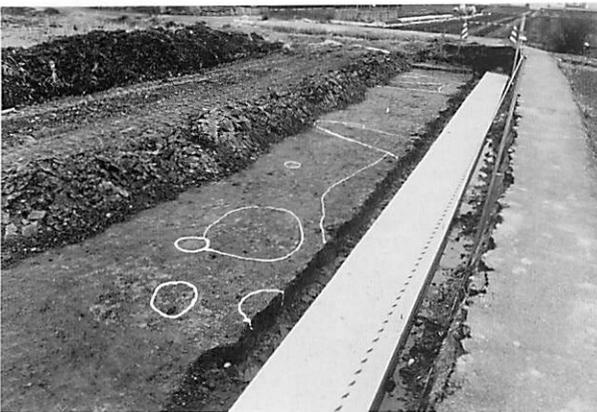
全景（南東から）



調査地全景（南から）



竪穴検出状況（南から）



遺構検出状況（西から）



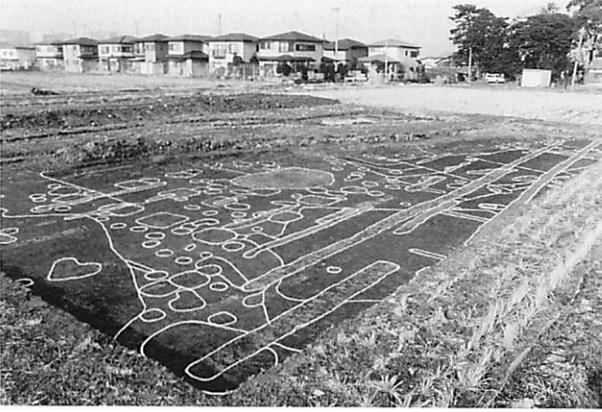
溝検出状況（北から）



竪穴検出状況（北から）



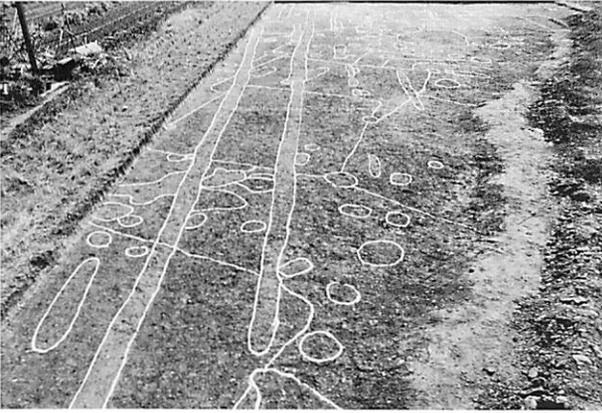
遺構検出状況（東から）



調査地全景（東から）



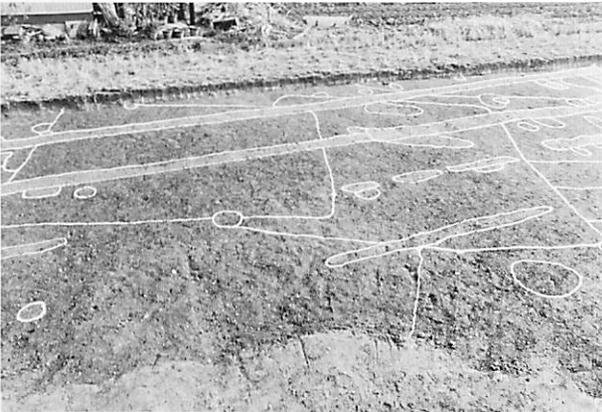
竪穴検出状況（東から）



遺構全景（北西から）



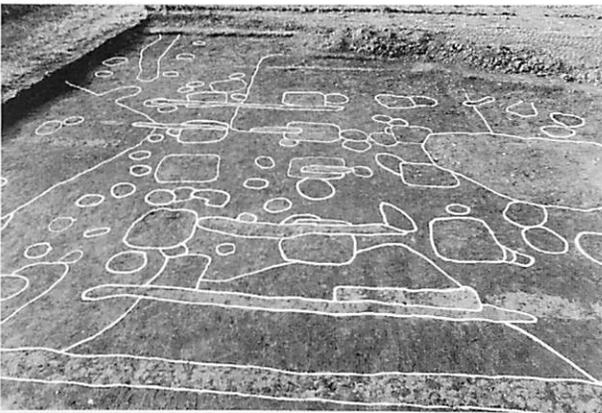
竪穴検出状況（南から）



竪穴検出状況（西から）



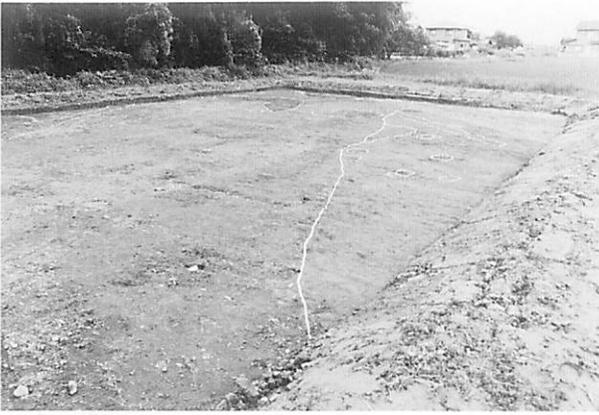
調査地全景（南から）



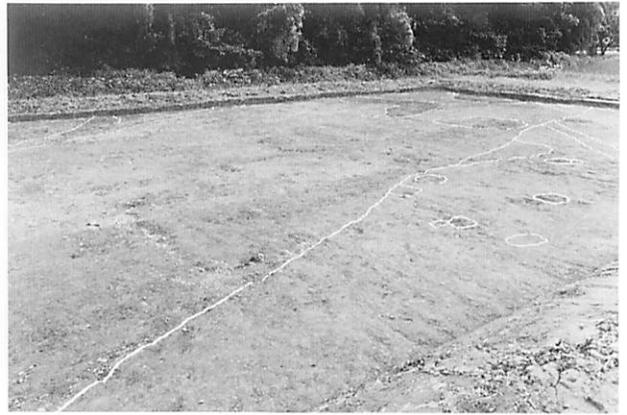
S B - 1 検出状況（北東から）



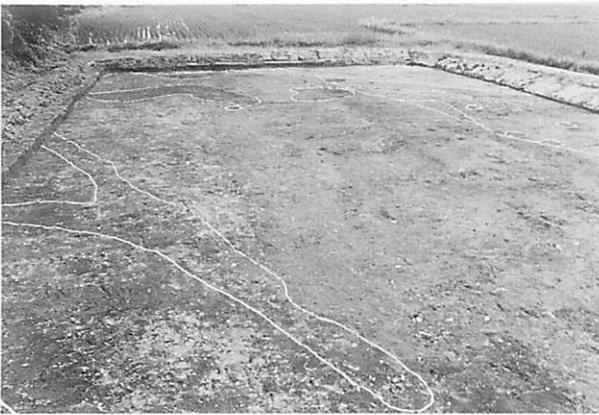
S B - 1 検出状況（南西から）



T-1 全景 (東から)



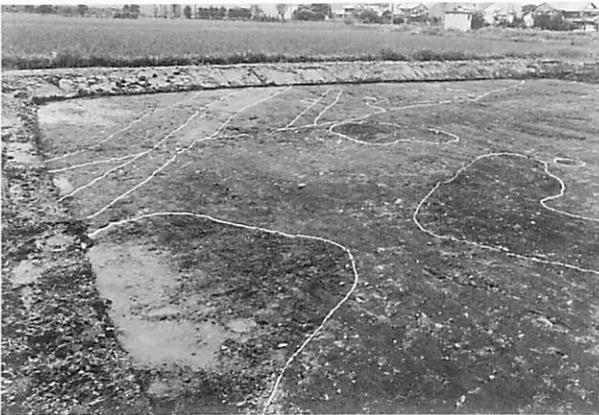
T-1 全景 (北東から)



T-1 全景 (南東から)



T-1 全景 (南東から)



T-1 遺構検出状況



T-1 全景 (北から)



T-2 全景 (南から)



T-2 全景 (南東から)



調査前風景



全景（西から）



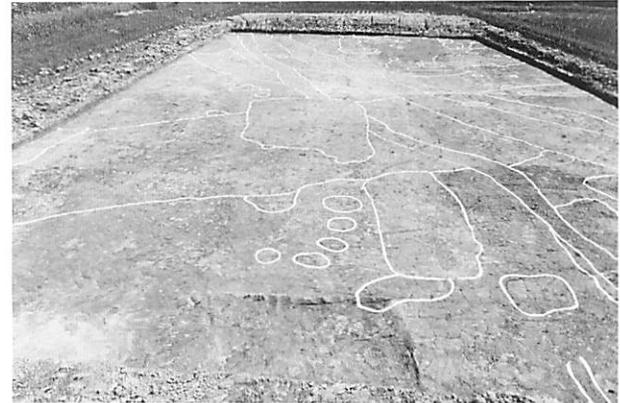
全景（西から）



SD-1 検出状況（南から）



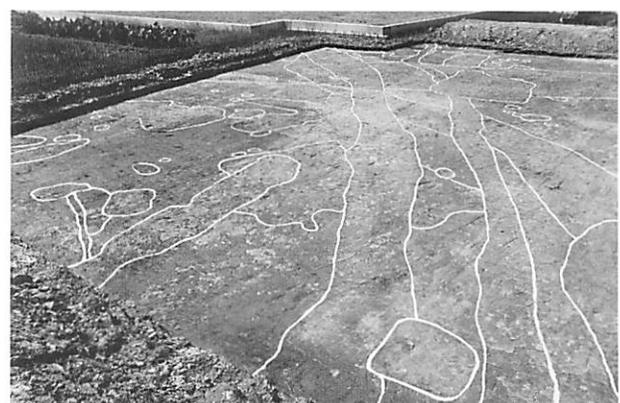
SD-1 検出状況（西から）



SD-1 検出状況（西から）



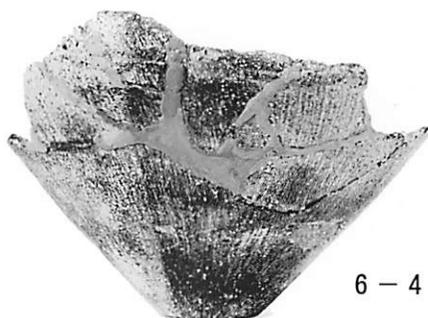
全景（南東から）



SD-2・3 検出状況（東から）



6-1



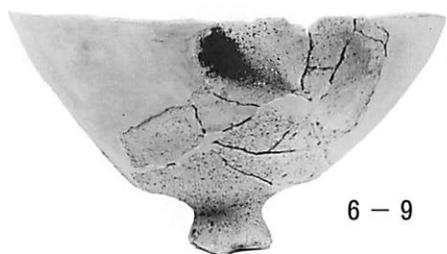
6-4



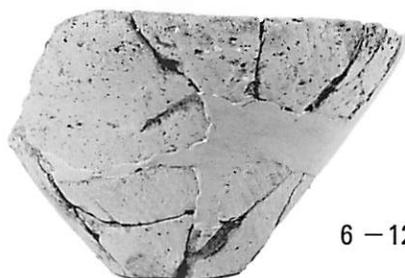
6-8



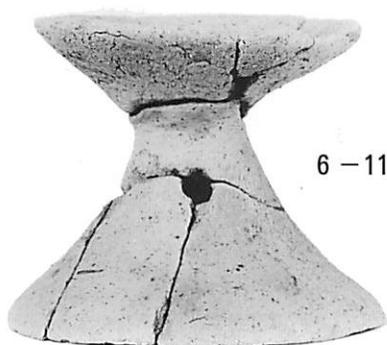
6-5



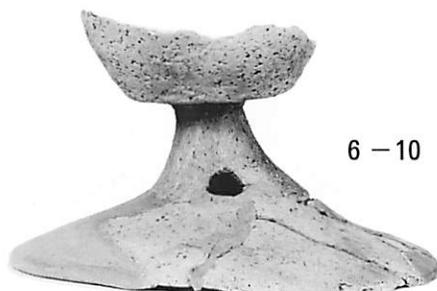
6-9



6-12



6-11



6-10



56-2



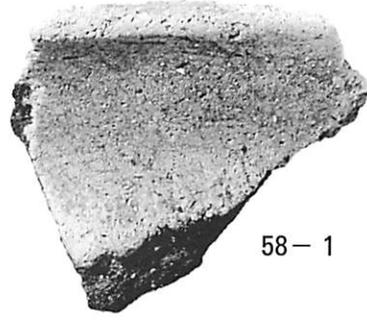
56-3



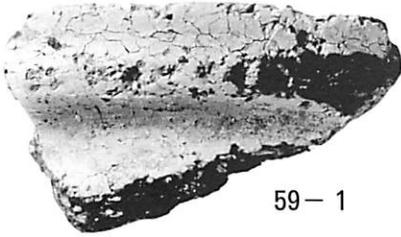
61-4



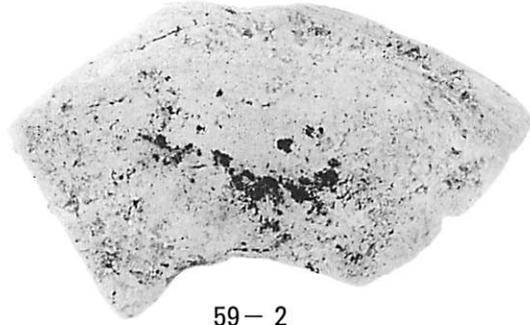
56-1



58-1



59-1



59-2



60-1



60-2



60-3



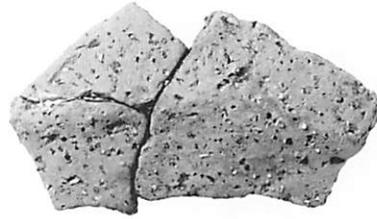
60-5



60-4



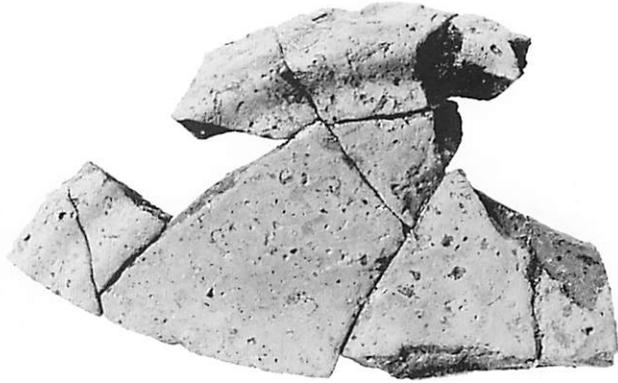
60-6



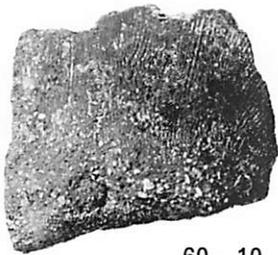
60-7



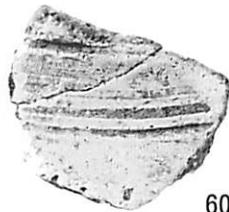
60-8



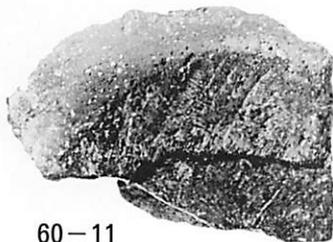
60-9



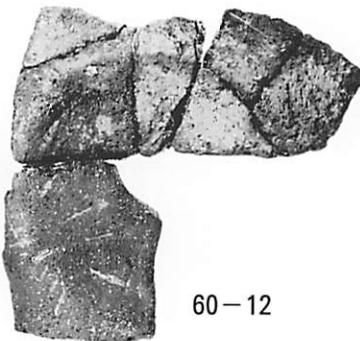
60-10



60-13



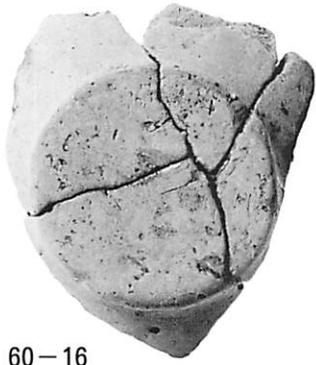
60-11



60-12



60-14



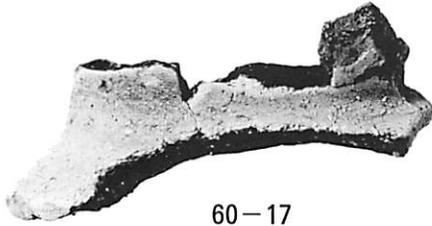
60-16



60-15



60-18



60-17



60-19



61-1



61-2



61-3



64-1



64-3



64-2



64-4



64-5



64-6



6-2



6-8



6-3



6-6

報 告 書 抄 録

ふりがな	いせいせきかくにんちょうさほうこくしょⅡ							
書名	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ							
副書名	守山市文化財報告書							
シリーズ名	守山市文化財調査報告書							
編集者名	伴野 幸一							
編集機関	守山市教育委員会							
所在地	〒524-0021 滋賀県守山市吉身二丁目5番22号 TEL 077-582-1156							
発行年月日	平成16年3月							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	調査番号	° ' "	° ' "	m ²		
いせいせき 伊勢遺跡	しがけんもりやまし 滋賀県守山市 いせちやう 伊勢町 あむらちやう 阿村町	25207	021 046 048 049 050 051 052 053 054	35° 2'	135° 2'	平成11年 4月～ 平成13年 1月	2,500	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
伊勢遺跡	集落	弥生時代		独立棟持柱付 大型建物 竪穴住居 溝 柱 穴		弥生土器		

伊勢遺跡確認調査報告書

守山市文化財調査報告書

発行日 平成16年(2004)3月

編集・発行 守山市教育委員会

滋賀県守山市吉身二丁目5番22号

印刷 株式会社 スマイ印刷工業